

憲、三 子路問成人、子曰、……見利思義。

述、三 子不語怪力亂神。

同、六 ……子曰、管仲相桓公、霸諸侯、一匡天下、民到于今受其賜(利)、微管仲、吾其被髮左衽矣。

憲、三 子曰、驥不稱其力、稱其德也。

下、民到于今受其賜(利)、微管仲、吾其被髮左衽矣。

(52) 諒 一條

衛、三 子曰、君子貞而不諒。

衛、三 子曰、君子貞而不諒。

(50) 利口 一條

(53) 令色 (巧言の部参照)

陽、六 子曰、……惡利口之覆邦家者。

(54) 魯 一條

(51) 力 二條

先、七 ……參也魯。

右諸善徳の解釋批評

上述諸徳表の中、仁と禮とは孔子教の根本義なれば、道と徳との一般的概念と共に別に説きたれば、今次の順序に従つて諸徳の意義を明らめ、更らに現代意識に照らして之れを講解すべし。

A、心的側面より説ける善徳、即ち愛、恕、和、勇、恥等

B、事的側面より説ける善徳、即ち義、忠——忠君、孝——悌、信、直、恭敬、文等

C、心的及び事的側面より説ける惡徳、即ち怨、利——過、巧言、佞、亂等

此所に心的及び事的と言へるは、言はば便宜上の分類にして精確なるものに非ず。何となれば、

事的に始まりたるものも遂に心に達せざるはなく、又た心的に始まりたるものも、結局事的に進展せざることなければなり。例へば、直の如き、恭の如き其の始め行爲の外形を規定せる規則に従ふを言ひしものも、後には心の徳たるに至りしが如し。現に義の如き、敬義内外論として、後代に至りても諸派の間に心的か事的かの争論ありしを以ても知るべきなり。

(A)(1)愛 愛とは、もと、他人に幸福或は利益を與へんとする自然の人情にして、適切に云へば、其は未だ徳となすに足らず。然れども人の日常に於て、己れの愛せんと欲する者にして愛すべからざるあり。愛せざらんと欲する者にして愛すべきあり。其の愛すべきを愛することに於て、此に愛の徳を形成す。孔子の説きし愛は即ち是れなり。君子も道を學んで人を愛し得る所以なり(陽、四)。愛すればこそ勞せしむる所以なり(憲、八)。是に於て愛は仁なるらし(顔、二二)。さればとて又た汎く衆を愛して仁に親しむ(學、六)といふを見れば、必らずしも相一致せざる如くにも見ゆ。韓退之の博愛之を仁と謂ふとの解釋十分なるが如くにして、而かも尙ほ多少の疑あるに似たり。眞意果して如何なるべきや。

思ふに、既に愛の徳ある以上、更に孔子が仁字を捉へ來つて、之れに最上位置を占めしめし理由

は、恐らく愛は自然の人情を言ひ表はすに適して、未だ愛すべきを愛するといふ意義を明示せざるが爲めならざるなきか。此かる仁字の點出に當りても、孔子が之れを獨斷せしに非ざること、左傳中に既に古語として克己復禮爲仁の語あるを見て知るべしと雖も、少くとも孔子が之れを採用するに至りし動機も、愛にては未だ盡さざる道德的意識ありしが爲めと見るべきなり。されば愛は、主として自然的の徳にして仁は明らかに道德的の徳なり。

單なる愛は既に仁に非ずとして汎愛は仁に非るか。汎愛とは個々の人々を、個々の人々として愛することにして、個々の人々を愛するに當りて、凡ての人を同時に愛するやう爲すことにあらず。凡ての人を同時に愛するには、豫め凡ての人々を關係づけ、組織立てて一定の秩序を作す必要あり、決して人々が其の時々の發意考慮に基き得るものに非ず。所謂一定の秩序は幾多賢聖が協力の結果たる大事業に外ならず。仁は此の秩序即ち禮に據れる愛と解するを得。然るに古代人の意識に於て、汎愛には此の意味なし。此所に仁と愛との區別ありと爲すべきなり。

(A)(2)恕 先づ文字の解釋より之れを見るに、周禮の疏には「中心を忠と曰ひ、如心を恕と曰ふ」とある。是れ作字の原意ならんか。併し此は甚だ漠然たるものなるが、説文には「忠は敬なり、恕は仁なり」とあり。此れよりも尙ほ多少の意義を含めたるものとしては、古註には「忠とは中心を

盡すを謂ふ。恕とは我れを忖りて以て人を度るを謂ふ」とあり。更に王弼は「忠とは情之盡なり、恕とは情に反して以て物に同するものなり」と解して居る。要するに、忠とは字の構成が示す如く、己れの心を盡すこと、情を盡すこと、恕とは人々己の情を楯として之れを他人に推し及ぼすをいふ。朱子が「己れを盡す之れを忠と謂ひ、己れを推す之れを恕と謂ふ」も同義なり。

されば忠も恕も共に己れが心を基本として、之れを他人に推し及ぼすことにして、他を我れと同視することに外ならず、即ち「己れの欲せざる所、人に施す勿れ」(顔、二)、及び子貢の「我れ人の諸れを我れに加ふるを欲せざることは、吾れも亦た諸れを人に加ふる無からんと欲す」(公、一三)の心是なりとす。此れ等は何れも消極的言ひ表はしなるが、之れを積極的形式に言ひ易ふれば、「己れの欲する所、之れを人に施せ」なりと言ふを得。曾參が忠恕を説明原理としたる以來、爾後東洋倫理に於て大に論議の題目となれるは人のよく知る所なり。

忠恕は現代語にて之れを同情といふを得べく、又た愛といふを得べし。而して此れ等が何れも倫理の最上原理と立てられたること、西洋に於てもクリストを始めアダム・スミス、ビューム、ハチン等頗る多し。されど此所に最も注意を要するは、此等の術語の心理的意義と、倫理的の其れとの間に大なる相違あること是れなり。心理作用としての同情は、未だ以て倫理的價值ありとは爲すべ

からず。無教養の母親が行き詰りの情態に陥つて、自殺の決意を爲しながら、扱て後に遺る己れが子女の身の上に同情して、此等をも死の道伴れと爲すことは、往々世に在る悲劇なるが、是れ心理的の同情に相違なしと雖も、未だ價值ある同情に非ず。價值ある同情たらんが爲めには、己れを基本とせずして道德的目的を基本として行動せざるべからず。言はば、己れが心を以て人を忖度するに非ずして、天下國家の立場を以て我が心とせざるべからず。日本に於ては大御心を以て我が心として、而かも之れを以て他に同情する時のみ善と言ひ得るのみ。小人、悪人等が如何に誠意を以て他に同情すればとて、其の同情が眞に價值あるに非ず。唯だ普通常識の範圍に於て、自然の人情を以て他に應接すれば、多くは過なしと言ひ得るのみ。而かも時勢の變化に隨ひ、既に舊秩序其儘なる能はざる場合となるに於ては、母親の己れの子に對する同情さへ、不善に陥ることあるを知らざるべからず。今、孔子の教訓は主として穩健なる普通常識に關して爲されたれば、未だ同情の心理或は倫理的概念の區別に考へ及ばざりしのみならず、宋明以後の諸家と雖も明解なかりしなり。随つて諸家紛々の説明も畢竟無益に了ること多しといふべし。

(A)(3)知 知の字には明らかに二大別あり。一は心理的の概念たる彼此の識別の能力、即ち知力にして、他の一は倫理的概念たる人間らしき行動を最もよく識別する徳、即ち智慧をいふ。前者は單

に理論的にして、後者は實踐的なり。言はば、智的知と行的知なり。此くて知らざることを知らずとしたればとて、智的知の増すことはなし。されど知らざることを知りたるかの如く見せかくるは虚榮にして、小人の普通になす所なるに、負け惜しみなく、自己の愚を人の前に白狀するは勇氣なくしては能はぬことなるのみならず、此くするは却つて人らしさを増すこととなる、即ち是れ實踐的智ある所以なり。「爲、一七」の「知<sub>レ</sub>之」の知は智的の知にして、「是知也」の知は行的の知、即ち知の徳なるを知るべきなり。

徳たる知とは、此は道なり、行ふべきことなりと知ることにして、單に事物を學び知ることには非ず。故に其は多少なりとも實踐的勢力を有せざることなし。ショーペンハウエルの如き學者は、倫理學上の知識も亦た全く純理論的にして實踐的に非すと主張す。眞に唯だ純粹客觀的に道德的事實を蒐集し、分類し、説明して、其れに關する一種の概念を得るのみとすれば、純理科學の知識と何等異なるなしとも見らるべし。されど道の研究に就ては然かく冷淡なる態度を取る能はざるが、人間たるもの、事實ならざるべからず。此くするが人の道なり、人らしき人々は皆な此く行ひ來れりと知りつゝ、我れも亦た人たりながら、全然之れに冷淡なりとは有り得べからざることならざるか。即ち知の徳とは此くするが道なりと知りたること、換言すれば邦語に道の心得あることなり。

されば行的知は(イ)事の善惡利害を見、又た(ロ)人の善惡正邪を見ること明らかなり。「爲、一七」は負け惜しみ、虚榮の見苦しき事を知るなり。「里、一」は居所環境の善美なる事を知るなり。「公、一八」は理論的知の持主たる臧文仲も、祭祀に用うる大龜を置く室の柱頭の斗拱に山を刻み、梁上の短柱に水草を畫きなどしたるは、迷信に擒はれ、且つ僭上の振舞たる事を知らざるなり。「雍、二二」は人民の爲めにすべき善き事、並に鬼神を敬遠する事、「陽、一」は事を爲すの時を見るの知なり。「公、七」は子路に勇あるも材を取れずと言ふ。材とは古の裁字の借用字、随つて事理を裁斷し能はずとは事の判斷力を缺くをいふ。「衛、一一」の事の見通しの附かざる場合必らず忽ち失敗するも亦知なきものにして、此れ等の知は皆(イ)に屬す。

明とは人に注意されざるやう、其れとはなしに人の名譽を毀ち、或はノツビキならぬ如き火急の態度を以て、自己の利害に就て人に泣きつく、所謂譖と愬との惡行爲に出る事なきをいふ。「顔、六」の明とは、特に子張の爲にする所ありての説明にして、此れ又知の最上なるもの、名なり。されど論語にありては、明の徳も老莊に於けるが如き重要性を有せず。「顔、二二」は人の善惡、能、不能を見抜くなり、「憲、三三」は人が我を詐はりはせぬかと氣遣ひ、或は人が我を疑ひはせぬかと邪推するは、共にコセコセと小事に拘泥して人の全體を見透し能はざるより來る事にして、然かせざる

は即ち人を知るの明あるもの、明あれば此人は如何なる事を爲すか、豫め知り得らるる筈、即ち先覺なる者は賢なるなり。「衛、七」は人を知るより自ら來る事なり、即ち知者は、此は共に語るべき人か否かを知りて、語るべき人ならば之れと語るも、否らざれば更に言を交へざるをいふ。「張、二五」は言ふべきか言ふべからざるかの判別なり。行的知ある者は、事と人との見透し明らかならば固より惑ふことなし(罕、三〇)(憲、三〇)。而して此れ等は皆(ロ)に屬す。

されば知は人間最上の徳なるかと云ふに、アリストテレスは晩年には然りと答へたる如く、又た釋迦には智慧を第一とするかの如き言説も之れあれど、孔子は知は仁に比すれば尙ほ軽く、言はば仁に到る手段的の徳なりとせしもの、如し。かくて仁者は仁に居て動かざるに、知者は仁に到らんと尙ほ汲々と勉強するを見る(里、三)。同一の趣意にて、仁者は山の如く動かすして靜かなるに、知者は水の如く多忙なり。知者は道の爲めに此の多忙を楽しむも、仁者は既に到り盡したるを以て、何時までも其の位置を保持すれば足る。故に知者は樂しみ、仁者は壽しともいふ所以なり(雍、二一)。

(A)(4)勇 勇の何たるやは人の容易に知る所なり。されど其の野蠻人にも最も早く認めらるるは物質的、筋力的のものなり。精神的のものに至りては教養ありて、一定の省察力を待つて後始めて之れを認むるを得るに至る。而して其れにも亦自ら高下の段階あり。孟子が浩然之氣を論する所、

稍之れを詳にすると雖も、論語は尙ほ漠然たるを免れず(公、七)。子路の孔子よりも過ぎたる勇(述、一〇)、暴虎馮河の勇、並に「泰、二」及び「先、二五」の如きは低級のものにして、「爲、二四」、「罕、二八」、「憲、五」、及「同、三〇」の如き高級の勇に至りては、必らず仁と一致したるべき筈なれど、「憲、五」に於ては勇者必らずしも仁あらずといふ。此は尙ほ唯だ低級の勇に就ていふに似たり。もし夫れ高級のものに至りては、仁者に必らず勇ある如く、勇者にも必らず仁あるべき理なるに、論語に於て此の徹底見なきは聊か物足らざる感なきを得ず。是れ恐らく孔子が兎角青年の傾き易き弊を抑へんが爲めによるものか。

(A)(5)恥 恥には相異なれる二義あり。一は廉恥にして、之なければ人は破廉恥漢となる。他の一は恥辱にして、之あるは「人でなし」なり。「爲、三」の「民免無恥」の恥は前者にして、「里、九」、「公、二五」、「憲、一」、及び「泰、一三」の恥は後者なり。

(B)(1)義 論語の文句によれば、義と利と對立す(里、一六)(憲、一三)。而して其は君子の骨髓を形成する大徳(衛、一七)にして、之れを知つて行はざるは卑怯なること明らかなり(爲、二四)。

されど其の如何なる意義なるかに至つては、其の重大性に反し頗る不明なり。恐らく當時の常識として人々は自ら領解する所ありしならん。暫らく之れが古訓を見るに、此の文字の制作の始に遡

つて之れを尋ぬるに、皇侃の義疏に曰く、「義合<sub>レ</sub>宜也」。孔安國曰く、「義者所<sub>レ</sub>宜<sub>レ</sub>爲也」。中庸には、「義者宜也」と、何れも漠然たるを免れず。日本の東條一堂の論語知言には、「羊我爲<sub>レ</sub>義、勇之宜也。取<sub>三</sub>於羊之性剛愎、不<sub>二</sub>敢退、故曰見<sub>レ</sub>義不<sub>レ</sub>爲無<sub>レ</sub>勇也」とある。此れ何に基くやを審にせず。羊と我とより構成せらるゝ點は頗る可しと雖も、羊の剛愎を標準として正義の意義を取らんとするは究せりと云ふべし。康熙字典には、説文の「己之威儀也、从<sub>二</sub>我羊<sub>一</sub>」の註を引いて、「善」と同じとしたれども、更に善字の解を求むれば、羊の字より善字の構成を説くなく、唯だ説文に「吉也」とあり、玉篇に「大也」とあり、廣韻には「良也佳也」とあるとしたり。更に吉字の解には、同じく説文を引いて「善也」とし、廣韻を引いて吉は「利也」としたり。此くて義は善、善は吉、吉は善といふこととなる。此は偶々以て字訓の字義を知るに當りて多く頼むに足らざるを示すなり。兎にも角にも時勢の變化に伴ひ、一定の常識も破壊するの止むなき時に至り、古き義が果して義なるや否や、眞の義とは抑も如何といふ問題提出せらる。其れとして文獻上最も顯著なるは、恐らく孟子と告子との論争ならん。即ち仁義内外論なり。告子の意見によれば、仁は其の動機内面にあり、義は外面より我に強要せらるゝものにして、我が内面より湧き來る行爲の推進力にはあらず。然るに孟子は仁も義も共に我が内面にある行爲の動機なりと爲す。今利は吾人の内面にある最も強

き動機なるが、其れと對立せる義は、我が好むと好まざるとに關はらず、之れを爲さざるべからざる徳とする點、確かに外面より強要せらるゝものなり。即ちもし我れ好まずとして、義を爲さざれば、外部の權力より利害を以て制裁され、褒貶を以て脅威されて、我が生存を危くするものなり。此所に外部の權力といふは、別ちて言へば(1)國君或は(2)社會一般を意味す。此くて義には公共の命令する意義あり。以て義制事、以て禮制心(書經)、大義滅親(左傳隱公四年傳)、詩書義之府也(左傳僖公三十七年傳)、君能制命(命令)爲義、臣能承命爲信(左傳宣公十五年傳)、死而不義非勇也、共(用)之謂勇(左傳文公二年傳)等の意皆な之に合す。此く義に他律的意味あるは勿論なれど、左ればとて又た仁にも然る如き意味なきか。親が子を愛するは自然の人情にして何人にも強要せらるゝ所に非るも、或る時に或る親は子を愛せざるのみか、却つて之れを惡むことも之なきに非ず。此かる場合、親は其の自然の人情の儘に子を愛せずして可なるべきや。決して然ることあるべき理なし。此の場合仁にも亦た強要の意味を生じ來らざるを得ず。且つ義之府と言はるゝ詩書に規定しある人事にても、もし權力上名譽上の制裁之れなければ、我れは安んじて之れに従はずして可なる底のものたるべきや。例へば、親に對する孝の如き、もし我れ之れを怠らんとすれば、怠りて何等の不安を感じざる底のものたるべきや。其は決して然りと言ふ能はざるべし。義もし外的ならば、仁も亦た外的、仁既に內的ならば、義も亦た內的

的たらざるを得ず。是に於て告子の義外説も不可ならざると同時に、孟子の義内説も亦た可なりといふ理由あり。

荀子は、義を以て、社會の結合を爲すに當つて各人に課せられたる必要なる大則、即ち「分」なりとす(王制)。此分あればこそ上下安らかなり得るとするなり。されば是れ外的秩序なれども、彼も亦た性惡を唱へながら尙ほ何人も父子之義と君臣之正を知るの性能あるを認めたり(性惡篇)。乃ち内外論の一掃的に決し得べからざるを見るべきなり。此他、管子、易、淮南子等には見るに足る義の解釋なし。

朱子は、「義者天理之所宜、利者人情之所欲。」(里仁篇)とし、又「義者事之宜也」(學而篇)、「義者人心之裁制」(公孫丑)、「心自有這制」(義利章註)「制如快利刀斧、事來劈將去、可底從這一邊去、不可底從那一邊去。」(語錄)と。又た程子(伊川)は曰ふ、「在物爲理、處物爲義、體用之謂也。」(告子)此くて朱子は人心自ら先天的に義と不義とを判斷する力、即ち快利なる刀斧の如きもの存するとして、孟子の義之端とする羞惡之心を之れに當てたり。王陽明の良知説上より説く義も亦た其の主觀的判斷たる點に於て相似たり。然るに日本の仁齋は、孟子の羞惡之心を以て義之端とするに於て異存なしと雖も、義之端たる性は其儘にして義には非ずとして、更に客觀的規定を要求するが如く説

けり。又た徂徠は更に義を心の外に存する客觀的標準となし、仁は徳にして道にあらず、義は道にして徳に非ずとしたり。

仁齋は中庸の「仁者人也、親<sub>レ</sub>親爲<sub>レ</sub>大、義者宜也、尊<sub>レ</sub>賢爲<sub>レ</sub>大。」又た孟子の「仁之實事<sub>レ</sub>親是也、義之實從<sub>レ</sub>兄是也」、及び「羞惡之心義之端也」、又た「人皆有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>爲、達<sub>レ</sub>之於其所<sub>レ</sub>爲義也、」の間に其義を得べしとなし、遂に「爲<sub>レ</sub>其所<sub>レ</sub>當<sub>レ</sub>爲、而不<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>其所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>當<sub>レ</sub>爲」を義といふ（語孟字義）。されど其の所謂當爲と不當爲とは何ぞやと言へば、其は又た良心の判斷に歸すと言はざるを得ず。而して良心の判斷は、人々によりて異なる主觀的のものに非るか。且つ論語里仁篇適莫章に於ては、「義者天下至密者也」といふかと見れば、衛靈公篇義以爲質章に於ては、義は時に仁よりも重しとして曰ふ、「義者制<sub>レ</sub>事之本、故以爲<sub>レ</sub>質幹。論曰、聖門以<sub>レ</sub>仁義<sub>レ</sub>並稱、而仁爲<sub>レ</sub>大焉。而此曰<sub>レ</sub>義以爲<sub>レ</sub>質者何也。蓋義者聖人之大用、萬事之所<sub>レ</sub>以得<sub>レ</sub>其理、而人道之別<sub>レ</sub>於禽獸<sub>レ</sub>也。有<sub>レ</sub>時而重<sub>レ</sub>於仁、故曰義以爲<sub>レ</sub>上」と。仁齋の孟子を祖述せる見解可ならざるに非るも、義は時に仁より重しといふに至つては、孔子教の根本原理を覆すの觀あり、亦た窮せりといふべし。

徂徠は曰く、「人或知<sub>レ</sub>禮爲<sub>レ</sub>先王之禮、而不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>義爲<sub>レ</sub>先王之義<sub>レ</sub>矣。古人處<sub>レ</sub>事必援<sub>レ</sub>古義<sub>レ</sub>以斷<sub>レ</sub>之。傳曰、詩書義之府、是其具也。」（論語微學而篇）「義者、詩書所<sub>レ</sub>載先王之古義也」（同書里仁篇註）。かくて彼は左傳の

詩書義之府也の解によりて、義は先王之所<sub>レ</sub>立道之名也として、禮は其の全を指し、義は其の分を指す、随つて義は道の名にして徳の名に非ずとし、極力人々各自の主觀的判斷を斥けたり。されば理は學ばずと雖も知るべきも、禮と義とは道を學べる君子に非れば知るべからずとす。是れ義の客觀的性質を力説するに於て之れを得たりといふべきも、更に先王は何に據りて之れを定め、随つて又た人々は何故に之れを遵奉せざるべからざるかの理由を問ふに及んで、此說にては之れを明らかにする能はざるなり。

仁齋の立脚地より義が仁より重しといふは矛盾に似たれども、事實上より言へば然もありなんと思はるる所なきに非ず。勿論其れも仁の概念如何による。然るに孔子は絶えて仁と義との關係を論じたることなし。而して衛靈公篇に至つて、義を以て君子の骨髓となし、禮は之れを實行する方法なるかの如き説明を爲すは、仁禮を根本義とする孔子に取りて聊か怪しむべきに似たり。徂徠の如く禮義を以て道となし、仁を單に徳とする時は多少此の章の解釋を爲し易きが如くなれども、孔子は禮義の熟字は用ゐたることなく、且つ此章は禮をも輕んじある如くなれば、此れ將た完全なる説明とはなし難し。徂徠が此章の君子は卿大夫にして義以爲<sub>レ</sub>質以下は朝聘之事を以て之れを言ふ臣道なり、故に君道たる仁に關係なしとしたるは、仁を今更ら道としたる點に於て、又た君子を卿大

夫と限りたる點に於て苦しき辯解たるを免れず。

此等難問は皆な根本義たる仁の解釋如何に關る。仁を單に愛とすれば、其れのみにては道に當るに足らず。仁の説明は孔子にありて不明にして了りしが、孟子が義の一字を添加せしは、恐らく仁と並べて道とすべきものあるを見しが爲なり。四端説は明らかに之を證す。荀子に至りても仁主義を立てざるに非るも、禮義を第一義諦なるかの如く説きし傾向あり。唯だ最後の大略篇に至りて仁義禮の關係に論及して、「仁義禮樂其致一也。君子處仁以義、然後仁也。行義以禮、然後義也。制禮反本成末、然後禮也、三者皆通、然後道也。」と曰ふ。是仁と義と禮と一にして相離れざるを明らかにしたるものなり。此は多分荀子の門流の見ならんも、兎に角倫理の見解に於て一段の進境を見たるものと云ふべし。即ち仁の中には義禮を含蓄しあり、義禮は仁に本づいて定められたるの意なり。此かる仁は始めて凡ての根本たるを得るなり。されど爾後の諸家よく之れを闡明したるものなし。朱子に至りては仁を專言偏言の二種に分ち、前者中には一切の諸徳を包含せりとし、後者は仁と義と禮等と并稱せらるるとす。其の組織立てに於て確かに古來の見を集大成したりと雖も、衛靈公篇の例の語の解釋に於て、未だ十分なりと言ふを得ず。何となれば、其の解釋は此章を仁と關係せしめず、孤立的に説きたればなり。又た陽明派も亦た儒教主義に相違なきも、其の説く所は

一掃的にして此れ等精細なる論議との距離は甚だ遠きものありと云ふべし。

此くて孔子にありては勿論のこと、爾後の諸家の仁と義との關係論は不明不完全なりと言はざるべからず。仁齋は仁義の相即を認めたる點(語孟字義)進境を認めたれども、尙ほ徹底に至らず。而して單に論語の研究として之れを見るも、諸家の説明の困難は到底掩ふべからず。余は思ふ此章の言は孔門子弟の見にして、孔子の直接の言にあらざると。衛靈公篇の如きには、往々這般の言説の混入ありと斷すべき十分の理由あり。

要するに、義の原始的意義は徂徠の説きしが如く、詩書に於て善しと言はれたる古來の聖王の定めたる秩序を言ひしならん。孔子の時に於て人々は義と言へば、一樣に之れを領解せしを以て、更に何等の解釋なかりき。されど其の利との對立によりて、大體各人の自然に爲さんと欲する所と背馳するを見る。日本語には極めて一般的意義を有する言葉として「ヨイ」の語あり。支那語にては善の字之れに當れるに似たりと雖も、尙ほ類語として快、利、美、良、能、吉、可、佳、嘉、淑、懿等あり。又た是、正、義、眞等も其れと言はれざるに非ず。又始めて字を作りし者の意識にては、此れ等皆な別々なる事と物とに於て、各々多少相違せる意味を含ませたるものならんも、其れ等の中、特に義として如何なる意味ありしや。恐らく其れとして我が勝手に動かすべからざる外的秩序



の意識を當つるを得べし。即ち聖王の定めたる、行うて善しとしたる事は是れなり。各人の私と對立したる公が定めたる行ふべき事は是れなり。此の意味に於て、義は君に對する忠と結びつき、更に廣き意味としての公と結びつき、忠義、公義となり得る性質を有す。荀子には父子之義の語は之れあれど、何人も私義といふ語を用ゐたることはなし。されど時勢の推移、人類意識の進歩に隨ひ、人には次第に其の内面的意義を尋ね、義の奥に正義心を發見するに至れり。其れ孟子に始まりて、朱子、王子に至りて、内面を主とせる直觀主義を開展せし所以なり。

簡言すれば、義の意義は外的より内的に進みたるなり。されば内的に進みたる者は徂徠の唱ふるが如き缺點ありやと云ふに、外を疎外したる内ならば兎に角、外に基きて更に其上に立ちたる内なる以上、決して然る患なかるべき道理なり。實に義は何處までも「公」的ならざるべからず。之を閉却しての主觀的正義の如きは、何等の價値なしと雖も、「公」的正義心にして、當代の正義の法則と衝突することも亦た全く之れなきに非ず。アテン人がソクラテースを毒殺し、ローマ人がクリストを磔殺したる如き、等しく公的觀點より見たる正義も、其の見を異にすることも亦た絶無に非ず。而して其の見解の何れが正しきやは豫め知るべからず。歴史の判定を待つ外に道なきなり。換言、普通には外的秩序が内的正義心よりもヨリ價値ありと雖も、例外的場合は内的が外的よりもヨリ價値あること之れあるなり。

リ價値あること之れあるなり。

因に康熙字典が引ける容齋隨筆の義の諸意義の解興味あり。聊か脱線的なるが一言せん。容齋隨筆曰、「人物以レ義爲レ名、其別最多、伏正道曰義、義師義戰是也、衆所ニ尊戴曰義、義帝是也、與衆共レ之曰義、義倉義社義田義學義役義井之類是也、至行過レ人曰義、義士義俠義姑義夫義婦之類是也、自外入而非正者曰義、義父義兒義服之類是也、衣裳器物亦然、在首曰義髻、在衣曰義欄之類是也、合衆物ニ而爲レ之、則有義裝義墨義酒、禽畜之賢者、則有義犬義烏義鷹」(字典)是れ宋代の用語なるが、其中何れが根幹にして何れが枝葉なるかといふに恐らく前述公的秩序の意義を本とすべし。義師義戰等は是れなり。公的秩序の洗禮を受けたるものは衆の尊戴を受くるは當然なり。又た公的意義あるを以て、義倉義社等の熟語を生ず。されど義は利と對立するを以て、敢て之れを行ふ勇氣を要す。故に義俠等の語を生ず。利と對立するが故に、各人の私より言へば、不自然的なるが故に、内面的自然的ならざるものを此語を以て形容するに至る、義父等は是れなり。義と利との對立の兩つを同時に取れば、水と油との混合情態となる。是に義酒等の轉語となると考へらる。

(B)(2)忠、忠君 忠の字の古義は、鄭疏に、「中心曰忠、中下从レ心、謂言出于心、皆有忠實也」とあるを原義とすべし。されば六書精蘊等に「竭誠也」とあるの意と見るを得、隨つて朱子の註の「盡己之謂忠」も亦た不可ならず(學、四)(爲、二〇)(公、一九)(述、二四)(類、一四)(憲、八)等即ち是なり。己れを基本として、己れと他とを同視するをいふことなれば、己れの欲せざる所、之れを人

に施すなき恕と密接に關係す。即ち忠恕と熟字する所以なり(里、十五)。而して其の友に對して發する場合は、之れを忠信といふを妨げず(公、二八)(罕、二五)(顔、一〇)(衛、五)。

君に對して發する忠は又た一種特別なる意義を有す。日本に於て忠と言へば殆んど之に限られたる如くなれども、古代支那に於ては然らず。唯だ孔子の君主に對しての敬愛の念は頗る純にして、又た厚し。忠君の語も亦た論語中に之れ有り(僂、一九)。尙ほ其義は「事君盡禮、人以爲諂也。」(僂、一八)の外、他章にも之あり。(僂、五)(罕、三)(鄉、二、三、四)(衛、三七)されど臣の君に事ふるは義の爲めにして、もと熱烈なる愛情ありて然るに非ず。是を以て「子夏曰……事君能致其其身。」(學、七)、又た「臣事君以忠」と言ふと雖も、是れもと「君使臣以禮」の條件に基く。又た「孝慈則忠」(爲、二〇)とも言はる。即ち「君君、臣臣、父父、子子」なり(顔、十一)。されば臣たる易からざるも、君たるも亦た難きなり(路、一五)。此くて君臣の關係離合は頗る簡單薄弱と見られざるに非ず。若し夫れ義を守り得ざるに於ては、所謂「大臣者以道事君、不可則止」(先、二四)なり。君に對しては「勿欺也、而犯之」(憲、二三)にして、「事君數々斯辱矣」(里、二六)の子游の言も亦た孔子の意ならざるに非るべし。伯夷の見によれば、「君不君、臣不可不以不臣」(史記伯夷傳)とあり。當時此かる思想之れありしならんも、是れ臣たる者の最上理想にして、人情に動かさるゝ常人としては、忠君の心が

機敏に君主の態度によりて變ずるを免れず。随つて此點より云へば、臣民の徳不徳も畢竟君主の徳不徳に基く。而して君主たるの理想としては、「萬方有罪、罪在朕躬」(堯、一)にして、堯舜禹の如き心を以て天下を有せざるべからず(泰一八、一九)。君主が此理想に遠ざかるに随つて、臣は去り、民は離れ、國力弱く、遂に亡ぶるに至る(季、二)としたるが如し。

蓋し孔子は保守主義者、秩序主義者にして最も現状打破を嫌ふ。惡主暴君ありとても、例の徳治主義を以て之れを徳化するを以て理想となす。是れ故に當時の上長、特に君主に對して曾て之れに逆ふことを敢てせず、眞によく之れに事へんとする誠を有せざることなし。是れ孔子の教が何れの時代、何れの國家を問はず、採用せられし所以の大理由の一なり。我が日本にありても、夙に其の感化を蒙りて歴代尊重せられざることなかりき。是れ孟子の書が早くより國體に害ありとして拒けられしと大に異れり。明人も日本に種々の書籍の輸入が歓迎せらるゝに關はらず、孟子の書載せたる船は、不思議に難破せりとの記事を留めたりといふ程なるに、論語には絶えて然る患なかりしは、亦た其の忠君の概念の純なりしによると云ふべし。

暫らく此所に支那と日本との忠君の概念に就て比論を試みんに、日本人より之を見れば、支那に於て最も其の情に富める孔子にありてさへ、忠君の力説の尙ほ頗る缺けたるを見るべきなり。是れ

其の國體の相違に基く。日本國家の成立は特別なる家族制にして、皇室を中心として、臣や連が各氏の部局を率ゐて、之れに臣事したる一大團體なり。大氏小氏が皇室に臣事するは、單に義を以てするに非ずして、子の親に對するが如く自然の人情に出づ。支那にても義は君臣にして情は父子と言はれたれども、其は多く表面の修辭にして事實にあらず、多くとも理想に過ぎざるに反し、日本に於ては事實上先づ情に發して義に至るものなり。是れ支那に於ては太古より既に提挺、有巢、燧人、庖犧、神農、軒轅等幾多の氏族あり。黃帝に及びて此れ等統一の業を策し、遂に堯に至りて一と先づ完成し、書經に所謂「克明<sub>二</sub>俊德<sub>一</sub>、以親<sub>二</sub>九族<sub>一</sub>、九族既親、平<sub>二</sub>章百姓<sub>一</sub>、百姓昭明、協<sub>二</sub>和萬邦<sub>一</sub>、黎民於變時雍。」となりたるものなり。而して此所に所謂百姓は黎民に非ずして、異なる諸氏族に外ならず。日本にも諸種の姓氏族といふが之れども、實は諸姓は一氏に外ならず。換言、日本の根幹は一氏に出づ。是れ支那と大に異なる所あり。されば支那に於て諸姓を統一するには實は權力を以てするを常とするも、もし大徳者ありて徳を以て統一し得れば、是れ最上の理想なるが、文獻によれば、支那上代は其れありとされ居たるなり。即ち堯に至りて始めて百姓昭明、協和萬邦なり得しなり。されど堯舜は單に傳説にすぎざるに似たるを觀る。

さればこそ支那の統一國家は徳治主義を以て成立せしものにして、孔子が屢々喝破力説せし所なり。然れども所謂徳を以て統一するとは、別言すれば理性の正しさに從へるものにして、人情の自然によれるものに非ざるは明らかなり。是に於て修養の極、極めて少數の場合、君臣の情は父子の如くなるを得ると雖も、人情の弱さより多くは是れ強き私情を抑へて、僅に弱き義を以て結び付くに止まらず、寧ろ更に甚しきは、君臣の間は利害關係に墮するを免れず。是れ日本に於て始より忠の情より出でて自ら忠の義に進むと大相違あり。忠の義より出でて忠の情に至らんとするは其の團結力の弱き知るべきなり。

何れにせよ、忠とは臣が誠を以て君に事ふといふ形式の類似は日支共に相一致せり。而して君臣の關係にも亦格段の相異あるも亦相似たり。日本に於ては、上御一人の下に大氏小氏あり。大氏小氏の下には又た氏の下あり、其れ等の下には又た部曲の民あり。其れ等の下には更に又た種々の奴婢ありき。而して此れ等上下は、又た之れを一種の君臣と見るを得。支那に於ては人に十等ありとし「王臣<sub>レ</sub>公、公臣<sub>二</sub>大夫<sub>一</sub>、大夫臣<sub>レ</sub>士、士臣<sub>レ</sub>阜、阜臣<sub>レ</sub>輿、輿臣<sub>レ</sub>隸、隸臣<sub>レ</sub>僚、僚臣<sub>レ</sub>僕、僕臣<sub>レ</sub>臺。」(左傳昭公七年傳)とせるが、此の上下の關係は亦た一種君臣の狀なり。我が國の戰國時代に於て、皇室の權力衰へ、諸侯互に覇を争ひし時、一天萬乘の天皇の下に幾多武將の君ありて、鎬を削りて互に鬪争したり。是時大名は一種の君にして、競うて武勇の士を聘用せんとせり。譜第の郎黨ならぬ浪士は

何れに行くとしても不可なるなく、自己の甘心する祿高によりて任意の「主取り」する権利を許されたり。支那に於ては始めより此かる「主取り」の傾向なきに非ず。春秋の時代に至りて、周室は疾くに忘れられ、君といふは明らかに公侯伯等に外ならず。現に孔子の「沾らん哉」の態度さへ之を明證すると云ふべし。忠君の念の薄弱化は知るべきなり。

されど孔子の思想としては、其の周道を再興せしめんとする點に於ても、又た何處の公侯伯等をも尊敬して至らざるなき點に於ても、日本の國體と齟齬することなし。又た其著と言はるゝ「春秋」に於ても、所謂春秋大ニ統ニにすることは乃ち之れあり。されど公侯伯等の諸家に於ける弑逆の多き中に於て、孔子も其の數者をば是認したる例は之れなきに非ず。之れより推せば其の正系の弟子の中より孟子を出せるも亦た怪しむに足らず。孟子のみならず、荀子も亦た正系の門流に相違なきに、禪讓放伐論に就ては孟子と相違する所なきを見る。されば寧ろ此所に支那古代の國民思想ありしに非るか。孟荀等によれば、眞に君主の價値は甚だ低し。即ち、孟子は「民を重しとなし、社稷之れに次ぎ、君を輕しとなす」なり。されば孟子によれば、君位と孝徳と一致し得ざる時は、寧ろ君位を棄つことは敝屣を棄るが如しといふ（盡心篇）。是れ別言すれば、國家と家族との輕重を比較すれば、後者却つて前者よりも重しと爲すものに似たり。此かる國家觀より出發して、君位を見る

時、少くとも其の日本に於ける忠君の意義の正解を得ざるは固よりなり。日本に於ては本來君位に關し一二の不祥事件なきに非ず、又君位窺竊の事實も絶無には非りしと雖も、遂に其の惡事の成功せし事あるなし。權力一たび皇室を去りて、武臣天下を制せし時代となりても、一天萬乘の君位は常に易る事なし。殆ど無教養の武人も、尙ほ武力以上の尊き或物を感じ、「忝なきに涙こぼるる」の感情は人々皆之を有したり。是れ歴代支那の武力萬能に比して、日本の大に精神主義たる明證なり。

日本に於ては國と君とは相離して考ふべからざるものにして、至貴至尊の價値を有す。随つて之れを家族に比すれば、殆んど雲泥の相違あり。もし一家一族の利害が君と國との其れと衝突する場合、臣たる者子たるものが、潔よく君と國との犠牲となるは當然なるのみならず、多くの人々にありては寧ろ名譽とも本懐とも感ぜられしなり。支那にありて「求ニ忠臣ニ必于ニ孝子之門ニ」と云ふと雖も、忠と孝との眞關係は決して支那人の確認せし所にあらず。寧ろ多くは「良禽相レ木而棲、賢臣擇レ主而事」（三國志蜀志）にして、「忠孝之道安得ニ兩全ニ」（晉書周處傳）を以て彼等の常識と見るべきなり。然るに日本に於ては歴史の初めに於て、夙に忠孝の一致を以て國體となし來れり（大伴家持の歌等）とす。されど是れ君に忠することを以て親に孝なるものとするものにして、君に忠なる親にして始めて爾かく感じ得る正大の觀念なり、而して到底國家よりも自己を重しとする親の感じ得べき所に非ざるなり。

換言、國家的洗禮を受けたる孝にして後始めてよく忠と一致するものにして、未だ其れなくして、單に我が親のみを見て之れによく事へんとする低級なる孝の能くし得る所に非るなり。結局忠と一致せざる孝は未だ眞の孝と言ひ得べからざるなり。

(B)(3)孝(弟) 孔子の孝の概念は著るしく保守的にして、一に古禮に従へるものなり(學、六)「學、十一」「里、二〇」「張、一八」も同一趣旨なり。而して其は如何なる事かと問へば、疾病に注意し(爲、五)健康壽命を重んじ(泰、三)、遠遊を謹しみ(里、一九)、常に父母の年を知り(里、二二)、父母過ちあるも飽くまで懇切丁寧を極むべし(里、一八)といふにあり。されど孝は其外形よりも寧ろ精神を重んじたること勿論なり(爲、八)(爲、七)。

此くて孝とは親に對する愛の徹底なりといふべし。而して此の愛の爲めには「直」も亦た其の形態を異にし、父の爲めに其惡を隠すこととなる(路、一八)。孝は單に生前に行はるゝのみならず、死後の孝も亦た從つて厚し(學、九)(憲、四三)(陽、二二)(張、一、十四)。此かる孝は帝としては禹を理想人とし(泰、二二)、弟子としては閔子騫稱揚せらる(先、五)。此かる孝弟は犯上の不徳なく、仁を爲すの本となる(學、二)といふ。是れ其の大要なり。思ふに、上を犯さすよく上に仕ふるの極は、よく君に仕ふること、即ち忠に外ならず。よく孝なれば遂に忠となる。別言すれば、人間の最上の道たる仁の

本も亦た此の孝に外ならずとの解は、現代語を以て翻譯すれば、一切道德の苗床は家庭にありとの教訓にして、千古不磨の眞理と言ふべきなり。

蓋し孝には必然主觀的と客觀的の二要素あり。簡言、孝の事と心と即ち是れなり。而して孝の心は即ち仁の萌芽なることは明らかなることながら、仁の事に至つては、當時の習慣の示す所の外容易に定め難し。當時支那に於て、如何なる仕へ方をするが孝なるやは、既に古くより親權萬能の主義によつて定められたり。されど事の側面より見て、親の意志も然ることながら、各自の健康を重んずべきは何時の時代に於ても重要なりと雖も、或は遠く遊ばず、或は父母の年を知る等のことは、時世によつて其の價值を異にするに至るは言を待たず。些細の事は暫らく措いて、此所に最要事は子は親に對して絶對服従を爲すべきものか否かにあり。其は孔子の時にありては、然りと言ふの外なかりき。されど親の亂暴惡虐なることも有り得べし。之れを如何にすべきかと言ふに、孔子は亦た飽くまで子を抑へたり。「里、一八」によれば、父母に過惡あれば諫むることは差支なきも、其の氣分に合はざるをすれば、父母を敬して其心に違はず、其れが爲め如何に勞苦すとも怨みずといふを本旨とせり。何等の從順か、蓋し極といふべし。孟子さへ、此點に於て「號泣して之れに従へ」(萬章上)と云へり。此の如きは事實上、人の子の能くし得べき所なるべきか。春秋傳に記する所によ

れば、陳の靈公の子たる夏徴舒は、淫蕩なる姦夫たる父王を弑し、楚の公子建も己れの妻を奪へる父王を弑したり。是れ皆父の亂行によるものなるが、此ほど極端の場合ならざるも、日常普通の際、父母の非行なきに非ず。此時一概に親の主張を立つること果して正しといふべきか、且つ朋友に對する信と一致し得ざる時は如何、甚しきは君に對する忠と衝突する時は如何、など考へ及ぼせば、論語の指導がよく之れを解決し得べしとも考へられざるなり。禮に従へとは、即ち舊習慣に従へとの意となることなるが、時勢の推移事情の變化により、既に舊習慣に従ふ能はざる時、前條の如き衝突不一致を除く方法は如何。恐らく孔子の胸中を察すれば、此際仁を以て指導原理となすことならんも、仁は其の明示せざる所にして、弟子の容易に領解し得ざる所なるを思へば、如何にせば孝なり得べきや、孝の事の側面よりの説明は固よりのこと、其心よりの其れも亦た不明なりと云はざるを得ざるなり。

されど既に仁は愛の徹底、或は博愛とすれば、之れを極めて狭く家庭内に限りて云ふも、子は父を愛すると同時に、母をも愛すべく、又た同胞をも愛すべき筈なり。もし父が飲酒の癖ありて、貧しき他の家族を犠牲にして、己れの嗜欲を満足せんとするに對し、子は果して如何に之れに對すべきや。唯々諾々父の意志に従ふべきや。或は弱き母と同胞とに同情して父に抗すべきや。這般の事

態は極めて原始的社會にも有り得ることなるが、論語の教ふる所のみにては、此間に處する能はざるなり。此點は孔子のみならず、孟子に至るまで結局怨を呑んで父に屈服するを説きたる如し。されど父の權力を以て服従を強ふるは、是れ壓制にして其の結果は、(1)弱者の卑屈を將來す、是れ意氣に富まざる兒子の陥る所なり。もし兒子にして氣力ありて、而かも當時屈服せざるを得ざる立場に置かるゝに於ては、其の結果は、(2)面従背反となる。然るに體裁よく之れを爲すことは偽善なり。更にもし普通の兒子が、從順ならんともし、さればとて從順もなし得ずして、長き間隱忍して遂に堪忍の極限に達する時は、(3)不祥なる殺傷沙汰にも及ぼざるを保せず。此れ等皆な親子間に不合理性あるより生ずる所にして、孔子の教の不徹底或は不透明の致すところといふも過言にあらざるなり。之れを明々乎、斷々乎、基督の「地に泰平を出さん爲めに、我れ來れりと意ふ勿れ」に比すれば、東西の差大なるものありといふべし。之れを中庸性と云へば即ち美稱なれども、所謂中庸性は動もすれば其中に不徹底性を伴ふを免れず。

論語によりて孝の意義を尋ぬる限り、右の如くなるが、孔子の作と言はるゝ孝經には、頗る之れと異なる教訓あり。特に、其の諫諍章には、曾子が「敢て問ふ、子の父の令に従ふは、孝と謂ふ可きか」と言へるに、「子曰く、是れ何の言ぞや。昔者天子に争臣七人あれば、無道と雖も其の天下

を失はず。諸侯に争臣五人あれば、無道と雖も其の國を失はず。大夫に争臣三人あれば、無道と雖も其の家を失はず。士に争友あれば則ち身令名を離れず。父に争子あれば則ち身不義に陥らず。故に不義に當りては則ち子は以て父に争はざるべからず。臣は以て君に争はざるべからず。故に不義に當つては則ち之れを争ふ。父の令に従ふは又た焉んぞ孝たるを得んや」とあり。是れ父の命令正しからざる場合、子は斷然之れを争はざるべからずと爲すものにして、絶對的服従を強ひざること明らかなり。事理の上より之れを論ずれば、一層適切なりといふべし。されど孝經は孔子の作に非ること言を待たざるのみならず、其の制作年代さへ判明せざる所なり。

史記、白虎通、孔子家語は孔子の作とし、劉歆、何休、鄭玄、王肅も之れに賛成す。偽孔安國傳の序には、曾子の作とし、宋の司馬光、胡寅、晁公武は孔子と曾子との孝道に關する論説を、弟子が筆記したるものとし、宋の馮椅は子思の作と爲し、宋の胡宏、汪應震、朱熹は斷じて後世の僞作とせり（漢籍解題）。

孔子居、曾子侍の語既に孔子の作に非ず。孝經の文は既に論語の朴實簡潔を失ひ、且つ文義頗る明白を缺く。又た論語には道德の哲學的根據を示さざるに、孝經は天地人の三才に互りて説を立て、孝は天の經なり、地の義なり、民の行なりと云へり。此語は左傳昭公二年傳に子産の禮を説ける言なりとして、晉の賢者子大叔の趙簡子に答へたる者と一致す。孔子が子産の禮の解釋を剽竊して、

孝を説明するの不見識をなしたるべきや甚だ疑はし。又た論語の諸徳は尙ほ非常に特殊的、偏成的たるを免れず。僅に其の統一原理として、仁ありしに、孝經は孝の一徳を以て諸徳を盡したる如く説明し、『人の行は孝より大なるは莫し』とせり。是れ孝を重視せんが爲めに、強ひて之れに深廣の意義を有たしめんとせしものに外ならず。然かも其の深厚の意義なるものも、一定確然たるものに非ずして、勉めて其れらしからんとする擬裝の譏を免れず。或は孝經を「文體平易、旨意明白なり」など評するものあれど、其の不當なること甚し。

孝經の僞作たること既に明らかなり。其は恐らく孔子流の思想家が、孝を力説せんが爲めに著せしものにして、孝を中心として諸徳を説かんとするに際し、忠も亦た孝なりと、忠孝一致に近き言あるに至りしことも一顧に値すべし。曰く、「君子の親に事ふるや孝なり、故に忠は君に移すべし。兄に事ふるや悌なり、故に順は長に移すべし。」と。是れ子の親に對して懐く忠の心其儘、君に對する忠なりと言へるものにして、心理的説明としては意義あれども、其れのみにて忠の倫理的意義を盡す能はざるは多言を要せず。従つて日本に於ての忠孝一致とは大に異ならざるを得ず。要するに、發生學的に家庭は忠君愛國の苗床に相違なきも、本質論的より云へば、狹少なる基礎上の孝其儘廣大なる意義ある忠といふを得ず。其の此く言はれ得んが爲めには、孝の意義を極度に理想化する

るを要すと言ふべし。

家長たる父なき時、其の代理たるべき者は多く見なれば、弟の兄に對する徳も亦た孝と相似たり。是れ孝悌の熟字の由て生ずる所以なり。而して其の意義も亦た相同じ。されど兄と父とは自然の人情として、敬と愛との度異ならざるを得ず。是に於て事實上孝に於けるよりも更に一層紛糾せる問題此間に起るを常とするも、論語には適切に之れを解くの指示を缺く。換言すれば、絶對的服従は最も此所に行はれ難きなり。兄の弟に對する愛は、父の其れに比して大に劣るものあり。弟の兄に對する敬は父の其れに比して又た然り。兄弟仲よくとの注文は然ることながら、相互の愛と敬との配分を如何様にすべきか。是れ普通家庭に於て日常毎に生じ來る難問にして、隨つて兄弟喧嘩なるものは絶へざる所なり。兄弟は他人の始めとも、又た義理の始めとも言はるゝ所なるが、兄弟は親子に似て同時に他人なる義理の詳は、論語の明示せざる所なり。蓋し同胞は一面に於ては親子の如く、他の一面に於ては他人の如く、又た更に他の一面に於ては友人の如し。故に凡て此れ等關係を分析して、其時々之宜しきに從ふに非んば、其の處理未だ完しといふを得ざるなり。

(B)(4)信 古義によれば、信とは懿也、不疑也、不差爽也とあり。蓋し我が言ひし所と我が行との差はざるをいふ。又た人の言ひし所が、其儘事實と違はずとて、我れが之れを疑はざるをいふ。而

して此かる情態の持續する時は、人々の間に一種の習慣性を生ず。是れ又た信の語を以て言ひ表はさる、是れ信任なり、信用なり。

「朋友と交りて信ならざるか」(學、四)、「言つて信あり」(學、七)等は前者にして、「信じて古を好む」(述、一)「篤く信じて學を好む」(泰、一三)等は後者なり。後者は各自の主觀のことにして、虚偽の容るべき餘地は之なしと雖も、言と行との一致すると否とは、各自の意志内の自由にして、此所には十分に不誠の進入する危険あり。約束に反するは固より不信なり、言明を裏切るも不信なり。

此れ等は明白疑ふべからずと雖も、中には又た言と行とは一致するも、尙ほ各自の主觀には快く之れを一致せしめたるに非ず、寧ろ自己の意に反し強ひて一致せしむる如き場合も往々に之れあり。是れ誠意ある信とは言ひ難し。是に於て誠意と一致したる信、即ち忠信の言の出づべき理由あり。信の信たる價值は、此の徹底的の信に存せざるべからず。人類の他の動物と異なりて、高等なる文化を創造するに至りしは、其の言語の發明ありしによると言ふを得。甲乙互に其の意志を通ずるは必ず此の共通の用具に由る。而るにもし此の共通の用具の利用し得られざる時は、人と人との交通は杜絶することとなる。言語は交際の先決條件なり。「即ち大車輓無く、小車輓無くは、其れ何を以て之れを行らん也」(爲、二三)なり、「民信なくば立たじ」(顔、七)なり。然るに人は種々の理由により、



或は無意識的に不信に陥いることあり、或は意識的に不信を行ふことあり、前者は多く意志の薄弱等、比較的罪の輕きものなれど、後者は思慮分別を交ふるを以て、善惡ともに功罪重からざるを得ず。大抵の場合、不信は自己の醜惡を隱蔽或は庇護せんが爲めに生ずるものなるが、時には却つて他の善を爲さんが爲の方便たる事あり。此かる場合不信ならざるは寧ろ惡なり。「君子は貞にして諒ならず」(衛、三六)、「馬鹿正直」は賞讃すべきにあらず。されど言語の常道より云へば、此は權道に外ならず。平生尋常の場合にありては、不信の罪すべき行爲たるのみならず、信こそ社會生活上最も貴むべき大徳なり。「武士に一言なし」或は「一言金鐵の如し」は、單に武士道の要諦のみならず、特に文明の世となりては一般社交の鐵則ならざるべからず。換言、凡そ如何なる所と時とを問はず、不信虚偽の行はるること多ければ多きだけ、其の社會の不健實を證明す。約束は固よりのこと、一般の言明に於ても、其所に不健實あればこそ不信の生ずるものなればなり。即ち「信が義に近ければ言復む可きなり」(學、一三)と言はるゝ所以なり。義とは正しき事にして、正しき事に就ての約束は守られ易きは勿論なり。されど其れ將た一概に言はるべきに非ず、盜賊の如き、博徒の如き、或は市井の匹夫匹婦の如き、正しからざる事に就ても頑固に其の言を履み、約束を守ることあり。されば信は彼れと此れとの共同目的ありて、之れを各自が失はざる限り、固く行はるゝを見

ると雖も、此の如きは變態社會のことにして、其の是非は其の共同目的の如何によりて論定せられざるべからず、正常の社會にありては、一般の善を目的とすることを豫想して後、始めて眞の信を談すべきものにして、孔子の時代に於ては尙ほ比較的單純なりしが故に、此かる豫想も唯だ暗々裏になされ居りしなり。

人の言、又た言によりて言ひ表はされたる事物を順に信するは信する者の知徳に關係す。小人は大人の言を信する能はず。惡人は聖人の道を信する能はず。是れ故に信するとは信せんとする努力に始まる。即ち修養の精神盛んにして、其の點に於て或る程度の成功あれば、以て信を語るに足る。篤信は大人の事に屬するなり。孔子が篤信を勸告せしは修養に熱心なれと云ふなり。(泰、一三)

又た我に信の徳あれば、他人に一種の信を生ず。此の一種の信とは、信の徳に非ずして信の徳ある者に對する習慣的認識にして、即ち信任或は信用是れなり。「民之れを信ず」(顔、七)の如し。

要するに、信は社會生活の門戸なるが故に、其れに就ての指導は論語に於て頗るよく完備せるを見るなり。唯だ之れを友に限りたる如き觀あるは、古代社會の單純性を語るものにして亦た是非もなきことなりとす。

(B)(5)直 孔安國曰く、「行の直きこと矢の如く曲らざるなり」と。論語後錄に直の字の出所を説

きて、「詩（經）に其直如矢とある、夫子の此言の本なり」と。此れ等は皆字の意義にして字の指示する事柄の説明に非ず。されど子は父の爲めに、父は子の爲めに事實を白状せざるを以て直とするに似て、字義的解釋の餘りにも兒戯に似たるを見るべし。凡て曲る曲らぬには、何ぞ標準なからざるべからず。其れには自ら大きく言へば、内外の二つあり。一は自己の心を楯に取りて言ふことなり、即ち我が事實と思へることを其儘に言ひ、此くと思ふことを其儘に行ふことなり。此は仁齋の言ふが如く僞らすといふこととなる。他の一つは我が心の外にある標準、例へば先王先聖の立て置きたる教訓法規を始め、師父の指導を其儘に遵奉することにして、約言すれば、告子の義は外なるの義の意味に當る。前者は遂に誠に歸着する。文化程度の低き社會、或は兒童などにありては、此れ等兩者は一致して相離れずと雖も、何日かは然る能はざる時期に遭遇す。もし我を立つるを主とすれば、父子互に其惡を隠さざる馬鹿正直となり、或は直情徑行の我儘となりて、共に善なりといふを得ず。又もし所謂「お義理」を重んずるに汲々たれば、徒らに外面を繕ふ僞善となり、輕薄となりて、是れ又た如何はしき行爲たるを免れず。「眞ッ直グ」は善し、即ち「直」は善しとは偏成的の徳、原始的の徳の名にして、未だ精確ならざる意義のものなり。孔子の時代も方に然りしなり。されど其の本義は、正に「眞ッ直グ」にあることなるが、其の眞ッ直グは内外何れに向ふべきか判

明せざりしなり。孟子には浩然之氣が「直を以て養はる」る旨を説きあれど、既に重要な概念には非ず。而して「大學」「中庸」時代に至りては、「誠」が中心點に進み來るに隨つて、「直」の徳は後退して復た多く語り出されざりしも、此かる理由に基くなり。即ち直は眞ッ直グなれど、其れ丈けにては善きことにてはあらぬこと、既に孔子の時にありて然りしなり。是れ「路、一八」、「陽、二四」にて明らかなり。されど「許く」は「直」に相違なく、「隠す」は「直」にあらず。然るに「許く」は悪く、父の惡を眞ッ正直に言ふも悪しきは何故なるかといふに、何れも尙ほ其奥に潜みある眞義に背けるが爲めなるを知らざるべからず。即ち直は直たるが爲めに善に非ずして、孔子の語を以て言へば、仁の目的に合へばこそのことなるなり。もし直にして仁の旨に反する場合ならば、其は惡となる。是れ直が直たらざるに非ずして其が不仁たるが爲めなり。「子は父の爲めに隠して、直が其中に在り」との「直」は、實は「直の旨趣が」と言はるべき所なるに、其が尙ほ偏成的概念たりしにより、然か言はれしに外ならず。直の本義は、「衛、六」の如く矢の如くなりしなり。内外の兩傾向未だ判然たらざりしも、「爲、一九」、「公、二四」、「雍、一七」、「泰二、一六」等皆な是れなり。

「憲、三六」は孔子の老子教の批評にして大に注目すべき文句なり。報怨以徳の徳とは恩にし

て、怨とは仇、仇に酬ゆるに恩を以てせよとは老子の説く所なり。されど此かる「汝の敵を愛せよ」との態度は其返報の確ならざる限り、現世主義者の到底容認し能はざる所なれば、孔子が「直」を以て怨に酬いよと曰ひしは當然なり。されば其の所謂直とは何ぞや。もし己れが心を標準として直情徑行するを是としたらんに、思ふ存分の復讐も許さるべきに似たり。されど孔子が之れを是認したりとも思はれず。もし心以外の世間の規則を以て怨に對するとせば、即ち習慣的に取扱へといふこととなると雖も、古來果して何等の定則ありとすべきや。たとへ其れありとも、残忍酷薄は多くの古代社會の慣行に外ならざれば、是れ又た孔子が之れに盲從するを是認したるべしとも思はれず。是に於て朱子は此の「直」を至公無私なりとし、徂徠は之を賛したり。朱子の解は内面的なるに、本來外面的を主とする徂徠が之れを賛成したるは奇異にして、或は仁齋を駁するに急なるより、此に至りしに非るか、亦た窮せりといふべし。仁齋は「是非邪正、各其の實に隨つて増さず減ぜざるを直といふ」とせり。されど是非邪正の實を考ふることの困難が問題なるにて、既に考へ得て後之れを増減するとせざるとの如きは、左まで重大ならざるなり。論語解釋に於ては亦た一隻眼ある中井履軒は、「怨を挾まざる」を直と解せり。其は恐らく公平との意味ならんも、當時の秩序に隨ふの外、公平の何たるやは明らかならず。結局諸家の解釋も簡明適切なるを得ざるなり。蓋し皆な

歸著すべき根本概念に還元して之れを論ぜざるが爲めなり。されど主觀主義と客觀主義との分水嶺上に立てる孔子の時の言葉を以て言へば、此章の直も亦た「矢の如し」の意味なりならんも、尙ほ曖昧の點を有せしは當然といふべし。此くて此の直の字と共に、章全體は頗る注目せらるべきものとなる。孔子教と老子教との關係に就て、現世主義を以て超越主義を否定せしことは頗る明らかなれども、其の否定の程度は種々に考へられ、舊來の秩序以上一步も出でざるか。然らずして其れ以上に出るとせば、幾何か老子に接近したるべきか。蓋し當時或は孔子以後に至り、門流の間に論議の題目となり、次第に後者の傾向を長するに至りしことも想像し得べし。されど孔子が既に判然老子と同然の立場を取りしと考ふるは過ぎたりといふべし。龜井南冥の論語語由には、「中庸」の南方の強を以て本章を解したるも、此かる中庸は恐らく門流の見にして、未だ孔子の思想と見るべきに非ず。唯だ當時怨に對する人々の態度は、當然次第に博愛の方向に向つて改善されつゝありしことは疑なしとして、博愛の概念も孔子は墨子などと異りて、所謂差別愛即ち何處までも在來の秩序に即しての愛を意味するを以て、直を以て怨に對するとは在來の秩序に從つての愛といふこととなる。禮記の檀弓に、「子夏問於孔子曰、居父母之仇如之何。夫子曰、寢苦枕干（盾也）不仕、弗與共之也。遇諸市朝、不反兵而闘。」と。以て怨に對する門流の思想傾向を想見し得べきなり。

要するに、直は未定型の徳にして、將來更に誠、或は信等に分化さるべき運命を有するものなるが、孔子の時にありては尙ほ渾然たる内容を以て行はれ居りしなり。然るに後儒強ひて己れが見に従つて之れを講解したるが爲め種々の混雜を惹起せしのみ。

(B)(6) 恭と敬 書經の洪範の註に、貌曰<sub>レ</sub>恭、とあり。曲禮の註に、在<sub>レ</sub>貌爲<sub>レ</sub>恭、在<sub>レ</sub>心爲<sub>レ</sub>敬、貌多<sub>レ</sub>心少<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>恭、心多<sub>レ</sub>貌少<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>敬、とあり。又た説文に肅也、とあり。書經或は曲禮の註により、恭は外形に關し、敬は内面に關する徳たるは明らかなるのみならず、此の二つは相離れざる一つなることも亦た知るを得べし。「貌多く心少し」とは外形を主としたるを云ひ、或は「心多く貌少し」とは内面を主としたるを云ふ。されど此かるのみにては未だ敬の何者たるやを説明したりといふを得ず。是に於て、説文の「肅なり」の解は一步敬の意義に入れり。肅とは一般的に畏ることなり、慎しむことなり。故に事を爲すに當りて畏れ慎しむことなり。されど其の本義は我れが他人に對し畏るゝ意味にあり。何が故に恐るゝかと云へば、勿論亂暴する暴力に對して畏るゝこともあれど、必らずしも先方が力強きが爲めにあらず、其は道德的にはあらず、道德的に畏るゝは畏るべき合理性あるが爲なり、即ち先方に一種の貴さあるが爲なり。現代人の語、特にカントの其れを以て言へば、先方が有する人格の價値を我れが認むるが爲なり。唯だ古き時代にありては、未だ意識の精し

さ明白さ之れ無きを以て、漠然と其の「氣持ち」を「肅」として言ひ表はせるにすぎざるなり。事に對して畏れ慎しむべき筈はなきに似たれども、親の事君の事は親及び君を敬するより、其の事を敬するに至るを見るべし。

此く恭と敬とは本質上相離るべからざるものなれども、事實上相離る能はざるものにあらず、寧ろ普通の人々の間にありては、多く別々となる患多し。是れ不道德に相違なきも、亦た止むを得ざるなり。孔子の時代に於ては、人々は多く之れを離して考へしが故に、孔子の注意せし所は多く之れを結び付くる點に存したり。「爲、七」は孝と敬との離れたるを救はんとせしなり。「爲、二〇」は忠と敬との「雍、二六」は禮と敬との離れたるを救はんとせしなり。「公、一七」は交友と敬との結び付き居るを讚美せしなり。「雍、一」は敬が内にあれば治民の法は簡便を妨げざるをいふ。「憲、四五」は敬が自己修養上重要なるを云へるものなるが、實に敬は愛と共に人々交際上の第一義諦たるを失はず。唯だ當時未だ之れを一大原則と認むる迄には至らざりしなり。

(B)(7) 儉 儉の物を節約することには多言を要せず。而して當時の人々は、輒もすれば奢に傾かんとしたる弊風ありたるを以て、孔子が之れに對して警戒する所ありしは、其の「不孫」に比して寧ろ「固」を取り(述、三五)しによりて明らかなり。蓋し下位の者が上位の者の装を爲して奢なる

は、僭上の譏を免れず、即ち不遜なり。然るに古制を守りて質素なるは、當時の一般意識よりは頑固の評を免れざりしならんも、孔子は前者を拒けて後者を取りしなり。且つ其は其の甚しく禮を重んぜしにかゝはらず、麻冕に比して純を取りし(罕、三)にて知るを得。蓋し麻冕は緇布の冠にして、之れを織るには少なからざる絲を要するに、純は單なる絲なれば、其の價格に於て非常の相違あり。苟も禮によりて敬の意を失はざる以上、安價を以て用を辨するを儉徳ありとせしなるべし。孔子の儉を説くこと頗る務めたりと雖も、儒家は葬喪に際しては、鄭重なる古制を守りしが故に、尙ほ墨家者流の攻撃を免れざりき。是れ一は時代によりて急迫の度合を異にするによるべしと雖も、抑も亦た孔子の把持する中庸主義と、墨子の徹底的革新主義との別によらずんばあらざるなり。孔子にも新味なきにあらずと雖も、其は保守色の中に隠れて人の耳目を聳動するに至らざるのみか、殆んど注意せられざりし程度とも云ふべきなり。是れ又た孔子教が如何なる世の現状維持者にも歡迎されて排斥せられざりし一理由なりしならん。

(B)(8)文 文には二義あり。(1)文章の文と、(2)人物の一性質、即ち徳と是れなり。而して後者に又た諡法の文と否との別あり。(1)も論語にある文は單なる文章に非ずして、古聖賢の道、即ち斯道を書き表はしたる文章なれば、即ち斯文なり(述、二四)(罕、五)(顔、二四)。されば道を學び道を行ふは文

に由らざるべからざること最も明らかなれども、今當面の問題に非ず。諡法の文(公、一五)(憲、一九)は古法の定むる所にして重き意味はなし。唯だ徳たる文の意義は、皇侃の疏に、質は即ち實なり、文は即ち華なりとある是れなり。此くて邦語にて言へば見ての立派さなり(尙、一五)(兼、一八)。其は畢竟禮容の整備せるより來ることなれば、文徳とは即ちよく禮容に習へるをいふ。其れも單に外面の修飾のみによつて成る立派さのみに非ずして、必らず内面の實質と相待つて後始めて眞の立派さと呼び得べし。古注派の包咸は、彬々とは「文質相半之貌」と訓ずれど、此は單に分量的のことに非ず、實は文質相待つといふに如かず。文質彬々は凡人の容易に得らるべき徳に非ずして、道の卒業者即ち君子にして後始めて許さるべき所なり。

## 右諸惡徳の解釋及び批評

## (C)(1)諸惡徳

(イ) 個人的動作 一言一行は直接間接、皆な社會一般に關係するものなれども、

比較的到自己一人丈けの關係に止まるものを個人的動作とす。其れとして論語に論ぜられ居るは、

一般的のもの……過失

言に關するもの……隱、瞽、躁

言動に關するもの……嗔

態度に關するもの……暴慢、鄙倍

富の消費に關するもの……奢

勞力の使用に關するもの……勞ムダボネナリ

暴力の行使に關するもの……力

等なり。過失、利口、巧言、奢、勞、力の何たるやは説明を要せず。隱、瞽、蹀等は本文既に之を解いて十分なり。嗔は鄭玄之れを呶嗔と註し、字書に呶嗔は容を失するなりとあり。朱子之れを粗俗と註するは之れが爲めなり。暴慢は亂暴無禮にして、鄙倍の鄙は朱子が之を凡陋とし、倍は理に背くなりしたり。俗に所謂下司なり。

(ロ) 過及び狂捐、蕩 人生は試練なりと言はる。實に何時にても人は計畫を立て、現在より未來へと突進す。されど其の計畫を樹つるに當り、如何に用意周到なるも、尙ほ爲さんと欲する事の爲されず、爲さざらんと欲する事の爲さるゝことあるを免れず。此かる計畫以外の惡事は、之れを過といふ。「過つて改めざる是れを過といふ」も、實は過は有意の作用に非れば適切な意味にて惡事にはあらず。唯だ其の計畫を樹つるに當つて、用意の周到ならざる限り、不注意の責任を負はざるを得ず。即ち油斷、不緊張等は此の意味にて惡なるなり。而して大抵の場合に、多少とも此の意味

にては人は全然責任なき能はず。もし過あれば改むるに憚りなかるべきは言を待たざれども、過つて改めざるを過といふの過は、たゞ惡行爲たる過を指す。一般の過は改むると改めざるとに關はらず、過なるに相違なし。唯だ修養に熱心する者と否とは、一旦自ら過たるを知りし瞬間の態度に現はる。前者は喜んで斷然として之れを改むるに反し、後者は却つて己れの非を辯護するを常とす。故に前者は過を好機として益々善人となるを以て、過を貳びせざるを得(雅、三)。之れを日蝕に比し、一時の暗黒も忽ち仰ぎ見らるゝ立派さを來すと、「張、一一」に譬へたるは適切なり。然るに小人の過や必ず文(張、八)を以て無罪なる過も眞の惡事となる。

過は善事への第一歩の失敗なり。其れとして善事にあらざるは固よりなりと雖も、亦た善事を爲すに當りて避くべからざる好ましからざる事なり。もし人之れを惡事として避くるに急ならば、寧ろ何事をも爲すことなくあらんには若かず。是れ風邪を恐れて外出を避くるが如き退嬰主義にして老子教の説く所なり。此の如くんば人は無氣力となり、社會に文化發展の希望絶ゆるに至る。然るに過は其の結果こそ惡けれ、其の善事を計畫し之れを遂行せんとする意氣ある點は大に採らざるべからざる所、是れ孔子が過の改むべきを説くと同時に、其の亦た採るべき所あるを注意せし所以なり。而して狂簡及び狂狷を責めながら、亦た之れに同情せし所以も亦た同じ(路、二一)(陽、一六)。

狂とは皇侃の疏に、「狂とは直進して避くる無き者なり」とあり。狷とは包咸の注に「狷とは節を守りて爲すなし」とあり。朱子の註に「狂とは志極めて高くして行掩はず、狷とは知未だ之れに及ばずして守ること餘あり。」とあるも殆んど同意なり。蓋し己れが善と信する事に熱心にして、未だ注意の周到ならず、随つて小節に拘泥せざるは狂なり。己れが善と信する事を守りて、退くべき所にも退かざるをいふ。善の研究未熟なるに比して、其の敢爲力の過強なるは狂にして、其の爲さざる方向に向ひたるは狷なり。何れも知の缺陷あるに關はらず、善事の敢爲力あるは嘉みすべし。過は敢爲力とは言ふべからざるも、實行力とは言ひ得べし、程度の差のみ。

序に此所に説かん。古の狂は肆なりしが、今の狂は蕩として孔子は慨嘆したるが、肆とは包咸之れを「極意敢言」(陽、註)と云ひ、朱子は「肆とは小節に拘はらざるを、蕩とは則ち大閑を踰ゆるを謂ふ」と註す。されば古の狂は善の細密なる所を知らざるに拘はらず、大體の善に向つて猛進することを怠らざりしに、今の狂は其の善といふことにも頓著せず、無檢束に猛進す、即ち俗に云ふムチャなるを責めたるなり。退嬰よりも進取は取るべしと雖も、猛進其物が善きに非ざるは固よりなり。狂も蕩に至つて惡となる。

(C)(2) 社會的動作 社會的動作の惡に關しては之れを五種に分つを得。

(イ) 社交上他人の感情に關するもの、即ち狂狷、利口、巧言、令色、媚、善柔等。

(ロ) 他人の生命財産に關するもの、即ち賊。

(ハ) 他人との信實性に關するもの、即ち詐、譎、諒等。

(ニ) 名譽に關するもの、即ち諂佞、便佞、便辟、驕、伐、勞、絞、僻等。

(ホ) 社會意識に關するもの、即ち「同」「黨」の如き是れなり

(イ)の狂とは、取るべき所あるに拘はらず、勿論一種の惡なり。其れとして皇侃は、「人に抵觸して廻避することなき者」なりといふ、即ち人の氣に障るを何とも思はず事を爲すをいふ。狷とは爲さざる側面より同じ事をいふ。狂狷には此かる側面もありしなり。利口、巧言は左までの相違なく、令色の顔色を作り、體裁を作るも亦た特に説明を要せざる所、媚も諂も亦た然り。善柔とは馬融は之れを面柔と解せり。

(ロ)の賊は本文之れを解す。

(ハ)の諸項は皆な事實の眞、或は言語の眞に關するものにして、詐、譎は眞を裏切るもの、諒は無意義に眞を守るものなり。

(ニ)は他人に過分の名譽を與ふるを諂或は佞といふ。便佞、便辟等も左まで相違あるものに非ず。

便佞は鄭玄は之れを「便は辯なり、佞にして辯なるを謂ふ」と解せり。便辟は之れを「巧みに人の忌む所を避けて以て容媚を求むる者」とせり。驕、伐、勞は共に自己に過分の名譽を取るものなり、即ち自慢なり。絞とは皇侃は之を「絞とは猶ほ刺の如きなり、好んで人の非を譏刺して以て己れの眞を成すなり。」とせり。即ち露骨皮肉のことにして、是れ又た人の名譽を奪ひ去るものなり。

(ホ)は群衆生活を爲すに就ての考へ方行ひ方なり。

此の内巧言に就ては五條、令色は三條、佞は五條、諂や伐、勞は二條の論及あり。此れ等數條が正に孔子の力説の度合を示すものとは斷言し得ずと雖も、讀者の印象上よりは然かあらんかとも考へらるゝは自然なりと云ふべし。之れによりて見る時は、孔子は他の諸惡も然ることなるが、巧言令色、或は佞諂の如きは最も拒くべきものと爲したるが如し。

右(イ)の中、巧言は心にもなき嬉しがらせの言を弄するなり。令色とは己れに實なき立派らしき體裁を作るなり。共に自己に無き價値を有りとしたる言動なり。而して諂佞は他人に有りもせぬ價値を有りとして其の甘心を買ふことにして、是れ又た無き者を有りとする點に於て前二者と共通なり。是れ等は何等か己れに弱點短所あるが爲めに、意志薄弱者の爲す所なり。もし夫れ我が知れる所を知れりとし、我が惡しき所を惡なりとし、爲すべきを爲すの強き心あらん者は之れに陥ることなき

なり。されば此等の人々は仁鮮しと言はれ、有る者を有りとし、無き者を無しとして偽らず、飾らざる「剛毅木訥近仁」と言はるゝ所以なり。

巧言令色は確かに自己の價値を無視する不見識を示す。されど或人にありては、天性人を喜ばさんととして一も二もなく然る行爲に出づるものあり。人を喜ばさんとする本能は亦た人より喜ばるゝ結果を來す。是れ無愛嬌にして他の感情に注意せず、一本調子に自己の品位を守るものに比すれば、社會的生活に於て護身の長所あり。されば自然的愛嬌者は偶然にして生れ來れるに非るを見る。是に於て弱者の世に在るや、意識的にも巧言令色の舉に出でざるを得ず。又た特に弱者に非るも、未知の大衆と外面的に接觸して、其の好感を得るが爲めには、此かる手段を必要とす。外交官及び小賣商人の如きは即ち是れなり。此く見來れば、孔子が嚴しく巧言令色を罪したるは、弟子等の内面的實力を養成せしめんが爲の忠言にして、巧言令色の一般的價値づけに非ざるを知るべし。蓋し巧言令色は其の長所あり、又た一種の美德とさへ言はれざるにあらず。唯だ其の國の聖人によりて夙に此かる教訓を受けたる民族にも關はらず、支那人が秦漢以來、次第に剛毅木訥性に遠ざかり、既に今日となりては最も外面的糊塗術に長じ、宣傳外交を得意とするに至りしこと、眞に今昔の感に堪へざるなり。思ふに是れ、彼れ等が性來溫和親切にして平和好きなるに、累代暴虐壓制なる支配



者の苦しむる所となりて、而かも敢て其れより脱出するの勇氣能力なきより、踏まれても蹴られても之れに逆らはず、一に之れを天運と諦らむるの習慣を形成し、唯だ優者强者に向つては巧言令色、哀請懇願、是れ事とするに至りしによるに非るか。其所にも例外あるべきも、結局彼等の多くは淺く、而かも廣く歐米人に好かるる長所を有すれども、決して深く高く人格者として尊敬せらるゝを見ざるなり。

(ロ)に就ては多言を要せず。

(ハ)不信は信と對立せるものにして、信は既に別に論じたり。唯だ信も不信も其れ自身としては評價されず、其の背後の目的如何によりて善とも惡ともなること、詐、譎の惡なると共に諒も亦た罪せらるゝを以て知り得べし。是れ宋儒の解せしが如く、孔子が直覺説ならざりし一證となすべきなり。

(ニ)諂佞は、勿論惡しき意味あるに相違なけれども、亦た巧言令色的一種、或は其の延長として有意義なることあるを知らざるべからず。蓋し名譽とは我れが他人の價値を認むることにして、其の認め方に大なる道德あり。大凡そ他人の價値は我れより見れば低きに失し、自己の價値は我れより見れば高きに失するを常とす。然るに多くの人々は此事に注意せず、自己の主觀に従つて率直に他

人に對するを以て、他人は不快の感を抱く、是れ實に不敬の惡徳なり。されば人が往々にして諂佞と考ふる行爲必らずしも惡徳に非ず、率直、眞實などと稱する行爲、必らずしも美德に非ず。但だ心に利慾等の卑しき動機ありて、之れを達成せんが爲めに、意識的に心にもなく過分なる先方の價値を認むるは惡なるを免れず。孔子の時、次第に此かる惡の増長せんとする傾向ありしを以て、所謂諂佞は之れを惡く謂ひしものと知るべきなり。

「伐る」或は「勞る」は、共に他人が未だ我が價値を認めざるに、我れが先づ之れを認めて、他人をして亦た我が價値を認めしめんとする心作用なり。而して此かる場合は自然我が價値は我れによりて過大に見積らるゝによりて、他人は不快不當の感を懷くを常とす。伐る、勞るは惡なり。但だ我が正しき價値は之れを認めて、聊かの不可なきのみか、認めざるは却つて大に惡し。如何にせむ、其の正しき價値づけなるものは大修養の結果に非れば能くし得ざる所、即ち自知自覺の容易ならざる所以なるを。

驕とは單なる名譽の發揚にはあらず。其の上に勝ち氣、權勢欲の加はりあるものなり。高明逼人惡で、兎角高き名譽は何となしに嫉視され易きものなるに、況んや人を壓伏せんとする氣勢あるものに於てをや。然るに小人は眞に實力もなきに、徒らに「威張」らんとする。是れ孔子の深く

戒むる所なり。世に偽善者小人少なからず。是れ等は何れも己れ價值なきに、其れ有るかの如く振舞ふ者なり。此れ等は共に小面コツラ悪き感を人に與ふるは當然なり。左ればとて其の無き價值を無しとして人に示すは、是れ「面皮を剝ぐ」ものにして、人の名譽を毀損すること、即ち「絞」なり。然することも何處までも悪しといふに非ず。もし天下國家のために必要なりと信じて爲すに於ては固より許さるべきこと、今日の新聞記事の如く、又た昔にありても公然惡事を責めたるの例、之れなきに非ず。唯だ概して露骨皮肉には惡き刺ありと知るべきなり。故に孔子は之れを戒めたり。

(ホ)社會意識に關する惡徳には「同」と「黨」とあり。同とは雷同するなり。無教養の人々は兎角人の言の是非を判別することなくして、輕々に其れと共鳴す。されど君子人は敢て他人の言に逆ふことなく、一往之れと調子を合すと雖も、一も二もなく雷同することなし。即ち同とは人の意見を作ることにて就ての惡徳なり。然るに黨とは仲間を作るに就て、利害を以て結び付くことにして、是れ君子の義を以て結び付くに反し、固よく惡なり。さればとて人と事を共にせざるも亦た惡し、故に君子は「群す」といふ。

尙ほ政治的惡として「亂」あれど、其は説明するまでもなし。

**惡徳論要約** 凡そ惡の淵源は心理的に云へば、(1)全般的の精神錯亂と一部の脱線と、(2)無氣力

と(3)不明、即ち無知となり。論語も亦た略ぼ之れを指示す。「小人窮すれば此に濫す」(衛、一)の如きは、精神全部の昏迷なり。然るに然までのことには非ずとも、卒然心得違に導きて、人をして心にもなき脱線行爲を行はしむる精神作用も亦た少なからず、即ち迷に至らしむる原因たるものなり。其れとして慍、怒、忿(三者は程度の差)の如き、怨、憾(同じく程度の差)の如き、又た畏懼の情の甚しき情態なる意の如きは即ち是れなり。又た最も強きものとして、更に好色及び利欲の情あり。但だ學的に云へば、此れ等を以て盡きたるに非ず、一般的に今日にては之れを情の、或は欲の作用といふも、孔子當時には未だ此かる説明の興味なかりしなり。

此れ等の情は凡て意志を動かすものなるが、數多き人の中には、生來意志力の弱き者ありて、其れ等は兎角緊張を爲すことを得ざる缺陷を有す。之れを「惰」といふ。されど引き續き相一致せざる感情起りて、互に衝突對消したる結果、言はば失望の極、遂に何事をも爲すの勇氣なきに至ることあり。是れ又た退嬰怠惰の狀となる。されど多くの場合、意志は種々の感情に動かされて、正しき判断に従ふことなくして惡行を來すに至る。我、固、必、欲、克、慾、矜の如きは即ち是れなり。我とは勝ち氣なり、我儘なり。固とは他に頓著なく、我を守るなり。必とは絶對的に我を立つるなり。欲とは多く我れに物質を得んとするなり。克とは馬融は「人に勝つを好む」と註す。矜とは皇

侃は「莊なり」と註す。自ら尊大に構ふることなり。慾と欲とは大なる相違なし。

此れ等の情或は欲の刺激を受くるも、若し善惡の智明らかにして、其の惡を拒けて善を爲す意志が強ければ、人は始めて君子善人となるを得。然るに之れを缺けば邪となる。隱も其の一種なり。又たもし單に其智を缺くことは之を愚といひ、惑といふ。愚とは全然の無智を云ひ、惑とは判断の曖昧なるをいふ。

要するに、情或は欲の要求を智が判断して、意が其の惡をすて、善に就くは即ち誠意の作用なるが、論語に於ては未だ此れまでの認識なし。されど孔子以後儒者の認識次第に進みて、「孟子」より「大學」、「中庸」に至りては、誠意主義の漸く組織化せらるゝを見る。

實踐的に見て、孔子の教訓の適切なるは今更らにも言はず。多くの人々は無意義に氣を腐らせ、其の原因の我れにある場合にも、之れを他人に歸して之れを責めんとする傾向あり、即ち氣を腐らせず、氣分を平らかに持つことの、如何に自己の幸福となるか測り知るべからざると同時に、よく他人を遇する所以なるを知るべきなり。もし其の心理状態の昂る場合は、譯もなく己れの怒を人に移し、或は見當違に人を怨みなどするは、事に益なきのみか大害を招く、是れ孔子の大に戒むる所以なり。

優勝欲なる性質は即ち人の極度に完全性を得んとすることにして、之れなければ人は無意義なる存在となりうる。其れ有ることは大に望まし。されど其は決して空虚安價なる満足なるべからず。換言、我れが眞に其の資格あることは然る價值の必然なる要件なり。然るに此の要件たるや、多大の修養を積んで後始めて獲得さるゝことなるが、凡夫の悲しさとして、之れなしに優者を氣取らんとす。是れ惡なり。我、固、必、欲、克等は皆其一種といふを得。而して此れ等は主として内面に止まる心状態なるが、其が外面に現はれて力に頼るに至れば暴となる。其は必然態度の無禮と一致するものなれば、暴慢とならざるは稀なり。

### 約論

以上善惡の諸徳、其の條目の數多なる驚くべし。是れ諸事に涉り諸人に接しての適切なる指導教訓にして、道の具體的説明なり。されど數多き諸徳を關係づけ統一化せんとする欲望が繼で起るべきは當然の勢ならざるべからず、即ち何ぞ一貫の理を尋ねて諸徳を整頓統一せんとする事業是れなり。而して論語に於て然る知的把握作用の始りたるは「凡ての徳を智仁勇の三に纏め上げたことに見るを得。此は「憲、三〇」なるが、尙ほ季氏篇に至りては、「三友」、「三樂」、「三愆」、「三戒」、「三畏」等明らかに雜多を統一する作用の行はれたるを見る。此かることに就き孔子と弟子門人との

分界が何處に立つかは分明に知るべからずとするも、爾後次第に「誠」主義等の發展を來したるを知るべし。而して其の發展するに従つて、「孟子」「大學」「中庸」等に於て徳目の著るしく減少し簡易化されたるを見る。偏成的特殊の諸徳が組織化普遍化する、は即ち學の職事なり。論語に學の萌芽あるも、尙ほ教の範圍を出でざるは、此所に於ても之を見るを得。

### 第三篇 對 己

#### 1 心 性

心

爲、四 七十而從<sub>レ</sub>心所欲、不<sub>レ</sub>踰<sub>レ</sub>矩。

雍、七 子曰、回也、其心三月不<sub>レ</sub>違<sub>レ</sub>仁、其餘則日月

至焉而已矣。

性

公、三 夫子之言<sub>レ</sub>性與<sub>レ</sub>天道、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>而聞<sub>レ</sub>也已矣。

陽、二 子曰、性相近也、習相遠也。

(同、三 子曰唯上知與<sub>レ</sub>下愚<sub>レ</sub>不移。)

知

知

爲、二 子曰、溫<sub>レ</sub>故而知<sub>レ</sub>新、可<sub>レ</sub>以爲<sub>レ</sub>師矣。

同、七 子曰、由、誨<sub>レ</sub>女知<sub>レ</sub>之乎、知之、爲<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>之、

三對 己

不<sub>レ</sub>知、爲<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>知、是知也。

里、二 子曰……知者利<sub>レ</sub>仁。

公、九 ……賜也、何敢望<sub>レ</sub>回、回也、聞<sub>レ</sub>一以知<sub>レ</sub>十、

賜也、聞<sub>レ</sub>一以知<sub>レ</sub>二。

雍、二 子曰、知<sub>レ</sub>之者、不<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>好<sub>レ</sub>之者、好<sub>レ</sub>之者、

不<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>樂<sub>レ</sub>之者。

述、元 子曰、我非<sub>レ</sub>生而知<sub>レ</sub>之者、好<sub>レ</sub>古、敏以求<sub>レ</sub>之

者也。

同、七 子曰、蓋有<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>知而作<sub>レ</sub>之者、我無<sub>レ</sub>是也、多

聞擇<sub>レ</sub>其善者<sub>レ</sub>而從<sub>レ</sub>之、多見而識<sub>レ</sub>之、知之次也。

泰、九 子曰、民可使<sub>レ</sub>由<sub>レ</sub>之、不<sub>レ</sub>可使<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>之。

二二三

衛、三 子曰。知及之、仁不能守之、雖得之、必失之、知及之、仁能守之、不莊以涖之、則民不敬、知及之、仁能守之、莊以涖之、動之不<sub>レ</sub>以禮、未善也。

(陽、四 子曰、道聽而塗說、德之棄也。)  
張、六 子夏曰、博學而篤志、切問而近思、仁在其中矣。  
慮、謀

季、九 孔子曰、生而知之者、上也、學而知之者、次也、困而學之、又其次也、困而不學、民斯為<sub>レ</sub>下矣。

衛、三 子曰、無遠慮、必有近憂。  
學、三 曾子曰……為人謀而不忠乎。  
述、〇 子曰……必也臨事而懼、好謀而成者也。  
泰、四 子曰、不在其位、不謀其政。  
憲、七 子曰、不在其位、不謀其政。  
衛、八 子曰……小不忍、則亂大謀。

思、擇、釋

為、五 子曰、學而不思則罔、思而不學則殆。

公、二〇 季文子三思而後行、子聞之曰、再斯可矣。

憲、六 曾子曰、君子思不出其位。

衛、三〇 子曰、吾嘗終日不食、終夜不寢、以思、無益、不<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>學也。

益、不<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>學也。

季、一〇 孔子曰、君子有九思、視思明、聽思聰、色

思溫、貌思恭、言思忠、事思敬、疑思問、忿思難、見得思義。

忿思難、見得思義。

為、三 子曰、君子不器。

器

罕、二 ……夫子循々然善誘人、博我以文、約我以禮、欲罷不能、既竭吾才、如有所立卓爾、雖欲從之、末由也已。

公、四 子貢問曰、賜也何如、子曰、女器也、曰、何器也、曰、瑚璉也。

路、三 子曰、君子易事而難說也、說之不<sub>レ</sub>以道、不<sub>レ</sub>說也、及其使人也、器之。

情

愛

學、五 子曰、道千乘之國、敬事而信、節用而愛人、使民以時。

同、六 子曰、弟子入則孝、出則弟、謹而信、汎愛衆而親仁、行有餘力、則以學文。

顏、〇 ……子曰……愛之欲其生、惡之欲其死、既欲其生、又欲其死、是惑也。

同、三 樊遲問仁、子曰、愛人。

憲、八 子曰、愛之能勿勞乎、忠焉能勿誨乎。

陽、四 ……子游對曰、昔者偃也、聞諸夫子、曰、君子學道、則愛人、小人學道、則易使也。

怒、忿、慍

怒、忿、慍

雍、三 哀公問、弟子孰為好學、孔子對曰、有顏回者、好學、不遷怒、不貳過、不幸短命死矣。

顏、三 子曰……一朝之忿、忘其身、以及其親、非惑與。

季、二〇 孔子曰……忿思難。

學、一 人不知而不慍、不亦君子乎。

公、元 子張問曰、令尹子文……三已之、無慍色。

憂

為、六 子曰、父母唯其疾之憂。

雍、二 子曰、賢哉回也、一簞食、一瓢飲、在陋巷、人不堪其憂、回不改其樂、賢哉回也。

述、三 子曰、德之不脩、學之不講、聞義不能徙、不善不能改、是吾憂也。

同、六 子曰、女奚不曰、其為人、發憤忘食、樂以忘憂、不知老之將至。

怒、忿、慍

顏、四 司馬牛問：君子，子曰：君子不憂不懼，曰：不憂不懼，斯謂之君子已乎？子曰：內省不疚，夫何憂何懼。

憲、三 子曰：……仁者不憂。

衛、二 子曰：人無遠慮，必有近憂。

同、三 子曰：……君子憂道，不憂貧。

患

學、六 子曰：不患人之不己知，患不知人也。

里、四 子曰：不患無位，患所以立，不患莫己知，求為可知也。

憲、三 子曰：不患人之不己知，患其不能也。

季、一 ……丘也聞，有國有家者，不患寡而患不均，不患貧而患不安。

陽、五 子曰：鄙夫可与與事君也與哉，其未得之也，患得之，既得之，患失之，苟患失之，無所不至矣。

懼

里、三 子曰：父母之年，不可不知也，一則以喜，一則以懼。

罕、三 子曰：知者不惑，仁者不憂，勇者不懼。

憲、三 子曰：君子之道三，我無能焉，仁者不憂，知者不惑，勇者不懼。

顏、四 子曰：君子不憂不懼。

哀

佾、三 子曰：關雎樂而不淫，哀而不傷。

同、三 子曰：居上不寬，為禮不敬，臨喪不哀，吾何以觀之哉。

張、一 子張曰：……喪思哀。

同、四 子游曰：喪致乎哀而止。

同、五 孟氏使陽膚為士師，問於曾子，曾子曰：上失其道，民散久矣，如得其情，則哀矜而勿喜。

同、二 子貢曰：……夫子之得邦家者，所謂立之斯立，道之斯行，綏之斯來，動之斯和，其

如丘之好學也。

雍、三 哀公問：弟子孰為好學，孔子對曰：有顏回者，好學。

同、三 子曰：知之者，不如好之者，好之者，不如樂之者。

述、一 子曰：述而不作，信而好古，竊比於我老彭。

同、二 子曰：富而可求也，雖執鞭之士，吾亦為之，如不可求，從吾所好。

同、五 子曰：我非生而知之者，好古，敏以求之者也。

泰、二 子曰：好勇而疾貧，亂也。

同、三 子曰：篤信好學，守死善道。

罕、六 子曰：吾未見好德如好色者也。

先、七 季康子問：弟子孰為好學，孔子對曰：有顏回者，好學。

路、四 子曰：……上好禮，則民莫敢不敬，上好義，則民莫敢不服，上好信，則民莫敢不用。

生也榮，其死也哀，如之何，其可及也。

好

學、二 有子曰：其為人，孝弟而好犯上者，鮮矣，不好犯上，而好作亂者，未之有也。

同、四 子曰：君子食無求飽，居無求安，敏於事而慎於言，就有道而正焉，可謂好學也已。

同、五 子貢曰：貧而無詔，富而無驕，何如，子曰：可也，未若貧而樂，富而好禮者也。

里、三 子曰：惟仁者能好人，能惡人。

同、六 子曰：我未見好仁者，惡不仁者，好仁者，無以尚之，惡不仁者，其為仁矣，不使不仁者加乎其身。

公、七 子曰：由也，好勇過我。

同、五 子貢問曰：孔文子何以謂之文也，子曰：敏而好學，不恥下問，是以謂之文也。

同、六 子曰：十室之邑，必有忠信如丘者焉，不

情。

路、二 子貢問曰、鄉人皆好之何如、子曰、未可也、未可也、鄉人皆惡之何如、子曰、未可也、未可也、不如鄉人之善者好之、其不善者惡之。

衛、三 子曰、已矣乎、吾未見好德如好色者也。

同、三 子曰、衆惡之、必察焉、衆好之、必察焉。

季、二 孔子曰、見善如不及、見不善、如探湯、吾見其人矣、吾聞其語矣。

陽、八 ……好仁不好學、其蔽也愚、好知不好學、其蔽也蕩、好信不好學、其蔽也賊、好直不好學、其蔽也絞、好勇不好學、其蔽也亂、好剛不好學、其蔽也狂。

張、五 子夏曰、日知其所亡、月無忘其所能、可謂好學也已矣。

學、一 子曰、學而時習之、不亦說乎、有朋自遠方來、不亦樂乎。

里、二 子曰、不仁者不可久處約、不可長處樂、仁者安仁、知者利仁。

雍、二 子曰、賢哉回也、一簞食、一瓢飲、在陋巷、人不堪其憂、回不改其樂、賢哉回也。

同、三 子曰、知者樂水、仁者樂山、……知者樂仁者壽。

述、五 子曰、飯疏食、飲水、曲肱而枕之、樂亦在其中矣。

(季、五 孔子曰、益者三樂、損者三樂、樂節禮樂、樂道人之善、樂多賢友、益矣、樂驕樂、樂佚遊、樂宴樂、損矣。)

憲、二 微生畝謂孔子曰、丘何爲是栖栖者與、無乃爲佞乎。孔子曰、非敢爲佞也、疾固也。

里、三 子曰、惟仁者能好人、能惡人。

同、五 子曰、富與貴、是人之所以欲也、不以其道

得之、不處也、貧與賤、是人之所以惡也、不以其道得之、不去也。

公、五 或曰、雍也仁而不佞、子曰、焉用佞、禦人以口給、屢憎於人、不知其仁、焉用佞。

衛、三 子曰、衆惡之、必察焉、衆好之、必察焉。

陽、六 子曰、惡紫之奪朱也、惡鄭聲之亂雅樂也、惡利口之覆邦家者。

同、二 子貢曰、君子亦有惡乎、子曰、有惡、惡稱人之惡者、惡居下流而訕上者、惡勇而無禮者、惡果敢而窒者、曰、賜也亦有惡乎、惡微以爲知者、惡不孫以爲勇者、惡訐以爲直者。

同、二 年四十而見惡焉、其終也已。

張、二 子貢曰、紂之不善、不如是之甚也、是以君子惡居下流、天下之惡皆歸焉。

學、一 子曰、學而時習之、不亦說乎。

公、六 子使漆雕開仕、對曰、吾斯之未能信、子說。路、二 子曰、君子易事而難說也、說之不以道、不說也、……小人難事而易說也、說之雖不以道、說也。

喜

里、三 子曰、父母之年、不可不知也、一則以喜、一則以懼。

公、九 子張問曰、令尹子文、三仕爲令尹、無喜色、三已之、無愠色、舊令尹之政、必以告新令尹、何如、子曰、忠矣。

志

罕、四 子絕四、毋意、毋必、毋固、毋我。

學、二 子曰、父在觀其志、父沒觀其行、三年無改於父之道、可謂孝矣。

爲、四 子曰、吾十有五而志於學。

里、四 子曰、苟志於仁矣、無惡也。

里、九、子曰、士志於道、而恥惡衣惡食者、未足與議也。

季、二、子曰……隱居以求其志、行義以達其道、吾聞其語矣、未見其人。

同、六、子曰、事父母幾諫、見志不從、又敬不違、勞而不怨。

微、八、子曰、不降其志、不辱其身、伯夷叔齊、謂柳下惠少連、降志辱身矣、言中倫、行中慮、其斯而已矣。

公、云、顏淵季路侍、子曰、盍各言爾志、子路曰、願車馬、衣輕裘、與朋友共、敝之而無憾、

張、六、子夏曰、博學而篤志、切問而近思、仁在其中矣。

顏淵曰、願無伐善、無施勞、子路曰、願聞子之志、子曰、老者安之、朋友信之、少

我、吾、予等

者懷之。

罕、四、子絕四、毋意、毋必、毋固、毋我。

述、六、子曰、志於道、據於德、依於仁、游於藝。

人格

罕、云、子曰、三軍可奪帥也、匹夫不可奪志也。

(俗、三、子曰、管仲之器小哉。)

心理學的諸語

孔子は曾て心理學的説明を爲さんとしたることなく、唯だ一に心の諸作用に就きて道德上の教訓を與へることに専心せり。故に今心理學上の諸語を心作用別に隨つて之れを分類配列するに止む。

a 心全體に屬するもの………心、性、慾等

b 知力に屬するもの………知、才、思、慮、器等

c 感情に屬するもの………好、惡、愛、樂等

d 意志に屬するもの………志、意、我、器等

此くて心とは如何なるものか。又た性は善か惡か等は尙ほ未だ問題たらず。凡て原始的情態にありしことなれば、同語中に種々の異義を含ませありて、後世の争端を開きしものも少からず。本來知には理論的のものと、實踐的のものとの著るしき相違ありて、前者は單に彼此甲乙を辨別するものなるに、後者は價值を判斷して善を取り、惡を拒くる徳たるに關はらず、論語には別に此れ等に就て判然たる注意を拂ひたることなし。今此所には單に前者に屬するものを取り、後者は更に徳の部に配列することとす。又た「器」の字の如きも、孔子が子貢を評して、汝は器なりとせしは、知の器の意味なるに、管仲の器を小と云ひし器は、全體の人物人格を指せるものなれば、之れを意の部に收めたり。更に序に、君子が人を使ふに當りては、「之れを器とす」とも云はれたるが、此は心作用に屬せることに非ず、單に部分的役割にして、全般の運営の反對たるにすぎず。然れば同じく器の字なるも、其れには種々の意義あるを知るべきなり。意、我等は既に惡なるものの如くにも見らるるが、尙ほ後世の如く著大なる論議の題目とはならざりき。



a (1) 心性 宋儒が其の哲學的立脚地より、「心」及び「性」を解釋して以來、心性論は大問題となれりと雖も、此は古學派の主張せる如く固より孔子の原意に非ず。孔子は性は各人互に相似たることを認め(陽、二、三)(衛、三八)たれども、其間自ら程度の差ありとす(述、一九)(季、九)。されど人の初生の間は純なりとするも、「生れ損ひ」も亦た之ありと信じたるが如し(雍、一九)。此くて幼稚なる性論なれども、よく常識と一致せり。唯だ既に常識を逸脱せんとする傾向ありし時勢なれば、人の所行の過甚なるものに就て、人々は其の天性に基くものか、或は後天的に個人の責任なるかの疑を起せしは事實なりしならんも、孔子は其所迄立ち入りて説明を加ふるを好まず、飽くまで常識主義に踏み止まりしと見ゆ(公、一二)。心の説明亦た性の其れと同じく淺薄と言はば言へ、其の範圍に於て人の實行すべきことは多々ありしなり。而して孔子は蠶絲牛毫の微細なる研究を爲さずと雖も、其の古來の大道を實行する一段に至りては、努力の限を盡したるが、尙ほ其は容易ならざる難事業にして、七十にして僅かによく、別に意志を用ゐざるも道を踏み違ふることなきに至れりといふ(爲、四)。

索隱行怪ならぬ此かる平凡なる大努力も、亦た是れ貴き聖人たる一相たらすんばあらざるなり。

a (2) 欲 欲は性の個々の狀に發現するものなるが、其の一々は各の内容の部に論ずるを以て、

此所には關係語のみを紹介しておく。

b 知 鳥獸草木の名を識る(陽、九)といふ如き單なる理論的の知も之あれど、何れにせよ、孔子の知といふは多くは道德に關しての實踐的の知なり、知は道德に入るの門戸たるに相違なし。されど門戸的の知が情化され、意化されて後始めて實踐的の知完成す(雍、二〇)(述、二七)。如何にすれば知が情化さるべきや。其は教育修養上の大問題たるを失はず。「衛、三二」は之れに觸れたる言なれども、勿論明白に之を説きたるものに非ず。知、仁、莊、禮を關係づけたる點、頗る詳悉せる。如きも實は適切ならざる憾あり。現に、「仁能く之れを守るも、莊以て之れに蒞まざれば、民敬せず」の如きは、餘りにも仁を輕視せるに似て如何はし。又た餘りにも巨細に涉りたる指示は、適切を缺くとも見らる。或は末流の言に非るなきや。余は論語中、少くとも其の某々篇には孔子の言ならずして、末流の言を含みあるを信する者なり。

生知なるものの有無は、後世の論題たりしものなるが、孔子は知性の高下あるを認め(季、九)(陽、三)たれども、生知を以て自ら居らざりき(述、一九)。蓋し自ら謙遜したりとも見られざるに非ずと雖も、生知、學知、困知の別の如き、天才兒たる顔回にさへ、生知を許さざるを見れば、又た孔子の原意には非ず、或る門流の見とするを可とすべし。

知るとは單に外部より印象を受くるのみに非ずして、自ら内面より發明する所ある作用なり。是れ故に「温<sub>レ</sub>故而知<sub>レ</sub>新」(爲、一一)といふ。如何に温ぬるとも、故きものは故きに止まるに似たれども、實は然らずして其の之れを温ぬる所に新らしきものの生ずるを見るべし。温ぬるとは研究することなり。或る事物に就てよく「思」ふことなり。此點「釋」も「擇」も同じと見るを得。「慮」も亦た「思」ふことなれど、前者は理論的なるに反し、後者は實踐的なり。又た「謀」は事を爲す方法に關するの知なりとす。

此くて「思」に對立して「學」の概念あり。此は外部より印象を受け入るる作用なり。外部より印象を受け入るるのみにては、心は外部の奴隸に外ならざるに、之れに思の作用加はりて後、始めて事理明らかとなる。此くて思の作用の重要にして、其れなくしては徳も亦た存し得べからず。(陽、一四)。されば思のみにて事理明白なり得るやといふに、是れ又た然らず。外部よりの事實の供給不十分なるに於ては、單に主觀的に事理明白と思ふのみにて、客觀的に適切ならず、隨つて危険なり。故に時に「思」を抑へたることもあり(衛、三〇)。結局兩者の必要をいふ(爲、一五)と見るを得。是れ後世の哲學に於て心、主觀の偏主義を説きしと自ら異りて健實なりといふべし。

思に程度あるは固よりなり、而して其の十分なることの望ましきも言を待たず。されど日常實際

上の處理に至りては、精思にも亦た程度のあるものにして、もし何時までも決定せざるに於ては、却つて迷に陥ることも之なきに非ず。故に三思を戒しめて再思を勸む(公、二〇)と雖も、此の再と三とは嚴密なるものに非ず、「程」ありとの意なり。「憲、二八」及び「季、一〇」は共に知の作用論に非ずして徳の問題なり。

才とは知の運用の側面をいふ。才ありとは知のよく働らくをいふ。(泰、一一、二〇)(罕、一〇)(先、六)皆な是れなり。孟子の才情などいふ才とは異なり。「公、四」の「器」も亦た才知をいふ。唯だ「路、二五」の「器」は別の意味なり。

c 感情 好むとは或る目的物に快樂を感じて之れを求めんとする傾向を指し、惡むとは其の反對なること、多くの説明を用ゐざる所なり。而して「嫉」は「惡む」の程度の進みたるものと見るを得べし。愛は多く人に就て言はる。單なる「好」に非ずして、他人を己れと同視して之れが爲めに爲すあらんとする心なり(學、五、六)(顏、一〇、二二)(憲、八)(陽、四)。されど普通又た時に人ならずして物を愛するといふも言はるることあり。此の愛は廣義のものにして好と同じ。されど論語には此の用法無し。

好むは、一時的表面的のことも之あれど、事と物との次第によりては、「樂」しむに至ることあり。

樂しむとは、好むことが深く内面に徹底して常住的となれるものなり。言はば既に至るべき所に至り盡して、更に動かざる意義あるにより、自ら「山」を連想し、又た「壽」と關係あり（雅、二〇）。道に關して言へば、勿論「好」は「樂」に若かず（學、一五）（里、二）（雅、二〇）（述、一五、一八）（季、五）。

喜や説も大差なし。此れ等にも之れを引き起す或る因由あるに相違なきも、主として心の愉快なる満足せる情態をいふ（學、一）（公、一九）。慍や、怒、忿等と對立す。後者の中、「慍」は最も程度の輕き不快の情にして、稍や興奮の氣勢あれど未だ怒や忿の如き反抗抵敵の傾向なし。

哀は同じく外部的因由あるも、主として苦しき深き主觀的情態を意味す。死や喪に對して此情の起るは當然なり（尙、二六）（張、一、一四、二五）。而して其の情態暫らく持續して、其の因由を去るの望みなければ、哀も亦た持續するを免れず。此かれば哀は憂となる。普通人は疾に就き（爲、六）（類、四）貧に就き（雅、一一）憂ふれども、君子は此かる淺薄の憂なく（述、一八）、却つて道に就て憂ふ（衛、三）（述、三）。されどよく憂の由て來る所を察すれば、多くはよく遠慮せざるに基く（衛、一一）。もし夫れよく悟るに於ては、絶えて憂なる者あることなきに至る（罕、三〇）（類、三）（憲、三〇）。

憂は不愉快なる主觀的情態なるが、もし之れを其の取り除かんとする因由と結び付けて考ふる時、其は患となる。患には判然と其の苦因あり。其れとして當時の人の患は、知己なきことなり（學、一

六）（憲、三二）、地位なきことなり（里、一四）、富なきことなり（季、一）、（陽、一五）。然れども君子の患とする所は、大に之れに異なること前諸條の示す所の如し。

尙ほ不愉快なる主觀的情態の中に懼あり。此は我れに加へらるる凶事、危害を念とするものにして、其中當然のものは老い行く父母の年（里、二）の如きあれど、多くは勇なきより來るものなり。故に勇者君子には之なし（罕、三〇）（憲、三〇）（類、三）。

説文によれば、「意」とは「志」なり、又た「志」とは「心の之く所」なり。是れ恐らくは此れ等の語の原意ならん。されば「心」とは最も深き意味の語にして、志と意とは其の或る一方に傾ける態度をいふ。即ち心が目的を追うて動かんとする態度なり。されど「罕、四」の母意の意は、此か一般的意義と異りて、稍や悪性ある意を意味すと爲さざるべからず。仁齋も徂徠も、意には此の悪性なしと辯ずるも苦解ならずんばあらず。意には心性なきもあり、又有るもあり、孔子が母意であるからは朱子が私意と解するも亦た道理ありと言ふべし。唯だ心理學の見地より言へば、母意の意ならずして志と同意義の意こそ問題たるべきなり。

志とは心が實行に移らんとするの態度なり。隨つて人が如何なる事を實行せんとしつつあるか。其れ正によく其の人の人柄を顯示す。仁に志し（爲、四）、道に志し（述、六）、道を學ぶに志し（爲、四）

て餘念なければ、人として間然する所なきも、其は萬人の爲し得る所にあらず。凡人は然あらんとしながら、尙ほ惡衣惡食を恥る心を免れず(里、九)。是れ故に人は善き志を立てて、一意之れを貫くことは難し(季、一一)。是れ其の難き事を成し遂げたる伯夷叔齊の稱せらるる所以なり(微、八)。即ち志は篤くせざるべからず(張、六)。

されど志は然る重大のものに限らず、日常の場合には幾多の小志も之ありて、其れ等は人々區々相異するは勿論なれば、孔子は弟子に向つて之れを問ふことも之ありしなり(公、二四)。子たる者は父の微妙の志をも察知して、之を満しやらんとするを孝と爲す(學、一一)。而るに無修養の人に至りては、一意に惡しき目的に志し、而かも猛烈に之れを追求し、何人も之れを翻し得ざることも之なきに非ず(罕、二六)もし不幸にして此かる志が、父母にあることあらば、子たる者は之を諫めざるべからざるも、之を爲す仕方は徐々に又た穩當なるべく、而かも尙ほ聽かれざることあるも自然なれば、之を怨むことなかるべしとす(里、一八)。蓋し人の實行的態度が強烈にして、奔馬が急坂を下る如き勢にある時を言へるものなり。如何に孔子が細心孝の實行を重んぜしやを窺ふべきなり。

我 孔子は「我」の説明を爲したることなし。論語中所々「我」「予」「吾」等の語見ゆと雖も、其の間又た相異ありとも覺えず。唯だ「我」は主格、目的格に用ゐられて所有格なく、「吾」は主格、

所有格に用ゐられて目的格なく、「予」は主格、所有格、目的格共に用ゐらるるを見るのみ。今參考の爲め諸篇の此れ等諸語を示すに止めたり。

人格 に當つべき語として「器」あること曩に注意したる所なれど、固より未だ此れ等概念の説明に入らざるなり。

### 2 身體衛生

#### 疾病

爲、六 孟武伯問孝、子曰、父母唯其疾之憂。

詩云、戰々兢兢々、如臨深淵、如履薄氷、而今而後、吾知免夫、小子。

雍、二 伯牛有疾、子問之、自牖執其手、曰、亡之命矣夫、斯人也而有斯疾也、斯人也而有斯疾也。

泰、四 曾子有疾、孟敬子問之、曾子言曰、鳥之將死、其鳴也哀、人之將死、其言也善。

述、三 子之所慎、齊、戰、疾。

罕、三 子疾病、子路使門人爲臣、病間曰、久矣哉、由之行詐也、無臣而爲有臣、吾誰欺、欺天乎。

同、四 子疾病、子路請禱、子曰、有諸、子路對曰、有之、誅曰、禱爾于上下神祇、子曰、丘之禱久矣。

鄉、三 疾、君視之、東首加朝服、拖紳。

泰、三 曾子有疾、召門弟子曰、啓予足、啓予手、

爲、五 子曰、生事之以禮、死葬之以禮。

里、八 子曰、朝聞道、夕死可矣。

命、富貴在<sub>レ</sub>天。

泰、四 曾子有<sub>レ</sub>疾……人之將<sub>レ</sub>死。

憲、三 子路問<sub>レ</sub>成人……曰、今之成人者、何必然、

罕、三 子疾病、……欺<sub>レ</sub>天乎、且予與<sub>レ</sub>其死<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>臣之

見<sub>レ</sub>利思<sub>レ</sub>義、見<sub>レ</sub>危授<sub>レ</sub>命。

手<sub>レ</sub>也、無寧死<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>二三子之手<sub>レ</sub>乎、且予縱<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>大葬、予死<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>道路<sub>レ</sub>乎。

張、一 子張曰、士見<sub>レ</sub>危致<sub>レ</sub>命、見<sub>レ</sub>得思<sub>レ</sub>義、祭思<sub>レ</sub>敬、喪思<sub>レ</sub>哀、其可<sub>レ</sub>已矣。

先、三 季路問<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>鬼神、子曰、未<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>人、焉能事<sub>レ</sub>鬼、曰、敢問<sub>レ</sub>死、曰、未<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>生、焉知<sub>レ</sub>死。

寢<sub>レ</sub>夢

同 三 閔子侍<sub>レ</sub>側、閔聞如也、子路行行如也、冉有、

公、二 宰我晝寢、子曰、朽木不可<sub>レ</sub>雕也、糞土之牆不可<sub>レ</sub>朽也、於<sub>レ</sub>予與<sub>レ</sub>何誅。

子貢侃侃如也、子樂、曰、若<sub>レ</sub>由也、不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>其死<sub>レ</sub>然。

述、五 子曰、甚矣、吾衰也、久矣吾不<sub>レ</sub>復夢見<sub>レ</sub>周公。

顏、五 司馬牛憂曰……子夏曰、商聞<sub>レ</sub>之矣、死生有<sub>レ</sub>命、

鄉、八 ……食不<sub>レ</sub>語、寢不<sub>レ</sub>言。

右解説批評

身體の健康は、人間萬事の基本的條件なるが、孔子は既によく之れに就きての認識を有したり。父母は其の疾を憂ふといふ(爲、六)は、「其」によりて父母を意味するにせよ、子を意味するにせよ健康第一たることは相同じ。即ち疾を重視せしなり(述、一二)(泰、三)。而して疾は一定の法則ありて起るものなれば、平生に於てよく之れを守り、徒らに祈禱の如き迷信に依頼すべからず(述、三四)。

但し其れ以外の力によりて生ずることも之あり。其は運命といふの外なし(雍、一〇)とす。

孔子が衛生を重視して衣食住に大なる注意を拂ひしは驚嘆に値ひす。唯だ修養の爲めにてもありしならん、孔子が如何にも克己主義的にして、物質輕視の傾向ありしを看過する能はず。且つ此所にも支那人に固有なる形式拘泥の甚しきを見るなり。而して此れ等は殆んど一々章句の指示を必要とせざる程に多きなり。随つて孔子の燕居せる時に於てさへ申々如たりしか否を疑はる。

宰我の晝寢の如何なるものなりしやは暫らく措きて、之を深く戒しめたるは、其の修養上の緊張の乏しかりしによること勿論なり。而して孔子が餘ほど年長に至るまで周公を夢み、其れを夢みざるを以て自ら衰微なりとして嘆ぜし如き、如何に其の進修努力の熱烈なりしかを察するに足る。

死生は、宗教上にありて殆んど唯一の重大關心事なり。而して佛教にありても基督教にありても、彼岸の生活は認識を超越したるも確信たるを失はず。然るに孔子は此點に於て、飽く迄も實證主義者にして、死後の事は知り得べからずとして、漫りに之れに就て揣摩臆測するを厭ひ唯だ生死ともに一に禮に従ふべしとしたり(先、一二)。是れ孔子教が宗教と異なる所以なり。但だ死は人生の最後なれば、飽くまで之れを慎しむべく、臨終は一生の總決算の時なれば、たとへ脱線行爲ありし人さへも、曾子は善心に立還り善言を發するものとせり(泰、四)。

されど孔子も死が萬事を終るものとは考へず、道は生死を超越したる價值あるを認め、道のためには死も亦た辭せず（里、九）。又た辭すべからず（憲、一三）（張、一）とせり。唯だ生には一定の法則あれば、之れを守る以外は敢て漫りに杞憂せず、安んじて天命に従ふべしとせしなり（顔、五）。又た徳の上に於て、子路の如く剛強の質の勝つ時は、天命を全うするを得ずとして之れを戒しめたり（先、一三）。亦た以て孔子教の溫柔性を知るべきなり。

衣

里、九 子曰、士志於道、而恥惡衣惡食者、未足與議也。

泰、三 子曰、禹吾無間然矣、非飲食、而致孝乎鬼神、惡衣服、而致美乎黻冕。

罕、二 子曰、衣敝緇袍、與衣狐貉者立、而不恥者、其由也與。

鄉、六 君子不以紺緇飾、紅紫不以爲褻服、當暑袗絺綌、必表而出、緇衣羔裘、素衣麕裘、黃衣狐裘、褻裘長、短右袂、必有寢衣、長一身有半、狐貉之厚以居、去喪無所不佩、非

帷裳、必殺之、羔裘玄冠、不以弔、吉月必朝服而朝、齊必有明衣布。

鄉、二 鄉人儻、朝服而立阼階。

同、三 疾、君視之、東首加朝服、拖紳。

同、五 子見齊衰者、雖狎必變、……凶服者式之。

學、四 子曰、君子食無求飽。

里、九 子曰、士志於道、而恥惡衣惡食者、未足與議也。

述、九 子食於有喪者之側、未嘗飽也。

同、五 子曰、飯蔬食、飲水、曲肱而枕之、樂亦

在其中矣。

述、六 子曰……發憤忘食、樂以忘憂。

泰、三 子曰、禹吾無間然矣、非飲食。

鄉、七 ……齊必變食、居必遷坐。

同、八 食不厭精、膾不厭細、食饒而餽、魚餃而肉敗不食、色惡不食、臭惡不食、失飪不食、不時不食、割不正不食、不得其醬不食、肉雖多、不使勝食氣、唯酒無量、不亂、沽酒市脯不食、不撤薑食、不

多食、祭於公、不宿肉、祭肉不出三日、出三日不食之矣、食不語、寢不言、雖蔬食菜羹瓜（必）祭、必齊如也。

同、〇 鄉人飲酒、杖者出、斯出矣。

同、二 康子饋藥、拜而受之。

同、三 君賜食、必正席先嘗之、君賜腥、必熟而薦之、君賜生、必畜之、侍食於君、君祭先飯。

鄉、四 ……朋友之饋、雖車馬、非祭肉、不拜。

同、五 ……有盛饌、必變色而作。

衛、三 子曰、君子謀道、不謀食。

同、七 子曰、事君、敬其事、而後其食。

住居

學、四 子曰、君子食無求飽、居無求安。

里、一 子曰、里仁爲美、擇不處仁、焉得知。

述、四 子之燕居、申申如也。

泰、三 子曰……危邦不入、亂邦不居。

罕、三 子欲居九夷、或曰、陋如之何、子曰、君子居之、何陋之有。

路、元 樊遲問、子曰、居處恭、執事敬、與人忠、雖之夷狄、不可棄也。

憲、三 子曰、士而懷居、不足爲士矣。

張、二 子貢曰、紂之不善、不如是之甚也、是以君子惡居下流、天下之惡、皆歸焉。

衣食住に就ての教訓の數多にして親切なること、又た孔子教の一特色なり。而して其は深く支那民族性に由來する所にして、既に我が今日に適用すべからざるもの多きこと、一々此所に指摘するの要なきを見る。

3 「行」

- 學、六 子曰、弟子入則孝、出則弟、謹而信、汎愛衆而親仁、行有餘力、則以學文。
- 同、七 子夏曰、賢賢易色、事父母、能竭其力、事君、能致其身、與朋友交、言而有信、雖曰未學、吾必謂之學矣。
- 同、二 子曰、父在觀其志、父沒觀其行、三年無改於父之道、可謂孝矣。
- 爲、三 子貢問君子、子曰、先行其言、而後從之。
- 同、六 子張學于祿、子曰、多聞闕疑、慎言其餘、則寡尤、多見闕殆、慎行其餘、則寡悔、言寡尤、行寡悔、祿在其中矣。
- 里、二 子曰、君子欲訥於言、而敏於行。
- 公、二 宰予晝寢、……子曰、始吾於人也、聽其言、而信其行、今吾於人也、聽其言、而觀其行、於予與改是。
- 同、四 子路有聞、未之能行、唯恐有聞。
- 述、二 子謂顏淵曰、用之則行、舍之則藏、唯我與爾有是夫。
- 同、三 子曰、三人行、必有我師焉、擇其善者而從之、其不善者而改之。
- 同、三 子曰、文莫吾猶人也、躬行君子、則吾未之有得。
- 泰、五 子曰、篤信好學、守死善道。
- 路、三 子曰……君子名之、必可言也。言之必可

行也、君子於其言、無所苟而已矣。

衛、五 子張問行、子曰、言忠信、行篤敬、雖蠻貊

憲、四 子曰、邦有道、危言危行、邦無道、危行

之邦行矣、言不忠信、行不篤敬、雖州里

言孫。

行乎哉、立則見其參於前也、在輿則見其

同、元 子曰、君子恥其言、而過其行。

倚於衡也、夫然後行。

右解説批評

行の字には恐らく三義あり。(1)「述、一〇」の行は道を運用すること、即ち世に用ゐらるることにして、其は我が意の儘となるものにあらず。人は世に用ゐられざれば、悶々の情に堪へざるに、顔回は其の場合孔子と共に、平然として道を我が胸中に藏し得るとしたるなり。(2)「衛、五」の子張の問うたる行は、如何にせば我れが世に行はれ得るかか意、即ち社會的實行性の意味なれば、孔子は如何なる社會に於ても、普遍的に妥當なる道を提示したり。眞に言忠信にして行の篤敬なるは、何人が如何なる時にありても其の懷抱を行ふ必要條件たり。其餘の行は(3)普通の意義の行爲なり。普通の行は、一面に於て知或は學と對立し、他の一面に於て言と對立す。而して孔子は知や言と比較して、行に於て最も人の本領を認めたり。故に父没すれば其の行を觀るを以て孝の重大事と爲す(學、一一)。

知と言とは、輒もすれば行と分れ得るものなるが、行と分れたる知や學や言は價值なし。是れ宰子の貶斥せられし所以なり(公、一〇)。寧ろ知なく學なくとも其の行あれば、子夏は、之を知れり學びたりと言ふも可なりと言へり。されば學は實行ありて後の學なり(學、六)。言は行の後に發すべしとす(爲、一三)。而して徹底的に言行一致の君子の實行は、孔子も尙ほ之を難しとせり(述、三二)。如何に孔子教が實行教なるかを見るべきなり。此れ等は皆個人的弱點によりて言と行とが分ることなるが、更に別に社會的理由によりて然かせざるを得ざる場合あり。即ち邦に道なき時は、忌憚なき言は身を危くするを以て、よろしく言葉は婉曲謙遜にして其の行爲のみは高尚にすべしと言へり(憲、四)。(言に就ての教訓は更に「言」の條下にあり)

1 行「事」 意志は行爲即ち事に現はる。意志の關する所、凡て是れ廣き意味に於ける事にして、是れ道德の關與する全範圍なり。されば視ること、聽くこと、言ふこと、更に又一舉手一投足は勿論、容貌、風采、態度に至るまで事ならざるはなしと雖も、今「事」と云へば其の内普通作業即ち職「事」を意味するあり。因りて今前者を一括して行「事」として之れを職「事」と區別し、職事は之を一般的と特殊的に分ちて之を列記す。

視(觀、察)

爲、一〇 子曰、視其所<sub>レ</sub>以、觀其所<sub>レ</sub>由、察其所<sub>レ</sub>安、

人焉廋哉、人焉廋哉。

顔、一 子曰……非禮勿<sub>レ</sub>視。

季、一〇 孔子曰、君子有<sub>レ</sub>九思、視思明。

聽

顔、一 子曰……非禮勿<sub>レ</sub>聽。

季、一〇 孔子曰……聽思聰。

言

學、三 子曰、巧言令色、鮮矣仁。

同、三 子曰、信近<sub>レ</sub>於義、言可<sub>レ</sub>復也。

爲、九 子曰、吾與<sub>レ</sub>回言、終日、不<sub>レ</sub>違如<sub>レ</sub>愚、退而省<sub>レ</sub>其私、亦足<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>發、回也不<sub>レ</sub>愚。

同、三 子曰、先行<sub>レ</sub>其言、而後從<sub>レ</sub>之。

里、三 子曰、古者言之不<sub>レ</sub>出、恥<sub>レ</sub>躬之不<sub>レ</sub>逮也。

同、二 子曰、君子欲<sub>レ</sub>訥<sub>レ</sub>於言、而敏<sub>レ</sub>於行。

公、一〇 宰予晝寢、……子曰、吾於<sub>レ</sub>人也、聽<sub>レ</sub>其言<sub>レ</sub>而

信<sub>レ</sub>其行、今吾於<sub>レ</sub>人也、聽<sub>レ</sub>其言<sub>レ</sub>而觀<sub>レ</sub>其行、於<sub>レ</sub>予與<sub>レ</sub>改<sub>レ</sub>是。

泰、四 曾子言曰……人之將<sub>レ</sub>死、其言也善、君子所<sub>レ</sub>貴乎道者三、……出<sub>レ</sub>辭氣、斯遠<sub>レ</sub>鄙倍<sub>レ</sub>矣。

先、三 子曰、論篤是與、君子者乎、色莊者乎。

顔、一 子曰……非禮勿<sub>レ</sub>言。

同、八 棘子成曰、君子質而已矣、何以<sub>レ</sub>文爲、子貢曰、惜乎夫子之說<sub>レ</sub>君子、駟<sub>レ</sub>不及<sub>レ</sub>舌。

同、三 子曰……子路無<sub>レ</sub>宿諾。

路、三 子曰……君子名<sub>レ</sub>之、必可<sub>レ</sub>言也、言之、必可<sub>レ</sub>行也、君子於<sub>レ</sub>其言、無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>苟而已矣。

憲、五 子曰、有<sub>レ</sub>德者必有<sub>レ</sub>言、有<sub>レ</sub>言者不<sub>レ</sub>必有<sub>レ</sub>德。

同、三 子曰、其言<sub>レ</sub>之不<sub>レ</sub>作、則爲<sub>レ</sub>之也難。

同、元 子曰、君子恥<sub>レ</sub>其言、而過<sub>レ</sub>其行。

衛、七 子曰、可<sub>レ</sub>與<sub>レ</sub>言、而不<sub>レ</sub>與<sub>レ</sub>之言、失<sub>レ</sub>人、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>與<sub>レ</sub>言、而與<sub>レ</sub>之言、失<sub>レ</sub>言、知者不<sub>レ</sub>失<sub>レ</sub>人。亦不<sub>レ</sub>失<sub>レ</sub>言。



衛、三 子曰、君子不以言舉人、不以人廢言。  
 同、二 子曰、巧言亂德、小不忍、則亂大謀。  
 季、六 孔子曰、侍於君子、有三愆、言未及之而言、謂之躁、言及之而不言、謂之隱、未見顏色而言、謂之瞽。

割雞焉用牛刀、子游對曰、昔者偃也、聞諸夫子、曰、君子學道、則愛人、小人學道、則易使也、子曰、二三子、偃之言是也、前言戲之耳。

勳容(顏色、風采、態度動作等)

同、一〇 孔子曰、君子有九思、……言思忠。  
 陽、七 子曰、巧言令色、鮮矣仁。  
 同、元 子曰、予欲無言、子貢曰、子如不言、則小子何述焉、子曰、天何言哉、四時行焉、百物生焉、天何言哉。

學、三 子曰、巧言令色、鮮矣仁。  
 同、八 子曰、君子不重、則不威、學則不固。  
 同、一〇 子貢曰、夫子溫、良、恭、儉、讓、以得之、夫子之求之也、其諸異乎人之求之與。

戲言

述、二 子曰、富而可求也、雖執鞭之士、吾亦爲之、如不可求、從吾所好。  
 罕、二 ……子聞之、謂門弟子曰、吾何執、執御乎、執射乎、吾執御矣。  
 陽、四 子之武城、聞弦歌之聲、夫子莞爾而笑曰、

同、三 有子曰、恭近於禮、遠恥辱也。  
 爲、八 子夏問孝、子曰、色難。  
 述、四 子之燕居、申申如也、夭夭如也。  
 同、二 子曰、君子坦蕩蕩、小人長戚戚。  
 同、三 子曰、子溫而厲、威而不猛、恭而安。  
 同、四 曾子曰、君子所貴乎道者三、勳容貌、斯遠暴慢矣、正顏色、斯近信矣、出辭氣、

斯遠鄙倍矣。

焉、敏則有功、惠則足以使人。

先、三 子曰、論篤是與、君子者乎、色莊者乎。  
 顏、一 子曰……非禮勿動。  
 路、元 樊遲問仁、子曰、居處恭、執事敬、與人忠、雖之夷狄、不可棄也。  
 季、一〇 孔子曰、君子有九思……色思溫、貌思恭。  
 陽、六 孔子曰……恭則不侮、寬則得衆、信則人任

陽、三 子曰、色厲而內荏、譬諸小人、其猶穿窬之盜也與。  
 張、九 子夏曰、君子有三變、望之儼然、即之也溫、聽其言也厲。  
 堯、一 (湯)曰……寬則得衆、信則民任焉、敏則有功、公則民說。

右解說批評

視に就ての規範は非禮視るべからずなり。普通に言へば、明なるべしといふ一言に歸す。明とはよく視ることに外ならず。人を見るに當りては、決して輕卒なるべからずして、視より觀に、觀より察に、次第に深く見入らざるべからず。又た今時の表現法にて言へば、單に深くとのみならず、更に廣くともいふべきは言を待たざるなり。

聽くに就ても亦た同一の注意あるべし、之れを聰といふ。此くて聰と明とを結び付けての聰明は、知力の最上を意味するに至りしなり。

孔子は深く言語の重要性を認めたり。是れ言は我が精神内容を他に傳達し、又た彼の其れを我れ

に受け容るる要具なるを以てなり。言に就ては、己れの内容を發表する發言と、他の其れを理解する知言(堯、三)と共に注意せざるべからず。而して其の何れも慎言に始まる(學、一四)(爲、一八)(顔、八)(憲、二二)。されば人と對談の際、先方が未だ其の事に論及せざるに、我が先ばしりて言ふは氣早(躁)なり。先方が既に其の事を語りつつあるに、我れは知らざる振するは、腹に一物ある(隱)なり。又た未だ先方の顔を見ざるに、我が語り出すは盲同様(瞽)といふとも戒しめたり(季、六)。是は恐らく後世門弟の言ならんも亦た慎言たるを失はざるなり。此くて對手如何を省みず、漫りに話しかくれば非常識者として他人は對手とせず。さればとて言ふべき時に言はざれば、人は共に語るに足らずとして離れ去る(衛、七)。言ふことの時を得べきは勿論なるも、何れかと言へば、孔子は多辯よりも寧ろ寡黙を善しとしたり(爲、九、一三)(里、二四)。特に人を喜ばさんが爲めに、心にも無きことを言ふ巧言(學、三)(衛、二六)(陽、一七)は最も厭ふべし。心に全く無きに非るも、誇大なる發表を爲すときは、言行の不一致は免れず、是れ又た最も注意を要する所とす(里、二二)(先、一九)(憲、二二、二九)。君子は既に之を言ひたる以上は、必らず之れを行ふの眞實を有せざるべからず、即ち忠(季、一〇)なり。此の徳は最も子路の長する所なり(路、三)。されど多くの人々にありては然らず(公、一〇)(憲、五)。故に言と人とは或は離るることあれば、名言の爲めに其の人を取ること、惡人の爲めに其の

名譽を棄つることも共に不可なりとす(衛、二二)。又た人との約束に當りては、其の事の正不正によりて、履行し得ざるに至るを以て、豫めよく之れを考慮して後爲すべし(學、一三)との注意も亦た極めて適切なり。而して臨終の言(泰、四)が凡ての人に於て正しきや否は疑ふべしとするも、人生生涯の總決算たるを以て、精神の平衡圓熟の結果、大體然るものありとも言ふを得べし。

以上の考慮を経て、扱て如何に言ふべく言ふべからざるかを顧みる時、吾人は如何に孔子が不言實行を獎勵したるかを思ふなり。是れ或る弟子の輕浮なる言行を避けしむる修養法として不可ならずと雖も、之れを大體論として見る時、其の教訓の餘りにも修辭辯論を抑へすぎたる觀なき能はず。「陽、一九」の如き、天の如く無言ならんとする言の如き、子貢に對しての特殊のものたりとも考へられ、又た後世異解を容るるものなるが、要するに其れも孔子が言辭の發表を輕視したる傾向に基くといふべし。もし文字通りに、此の章を解釋せば、老子教に近し。恐らく後世門流の言ならんも知るべからざるなり。

孔子が、徹頭徹尾窮屈繁雜なる禮法の規矩中にありて、謹嚴其の物の如き生活を事とせしやに思はるるも、亦た間々戲言を弄して一種の餘裕を示せしは、適ま以て其の人格の高く大なるを示せりといふべし。

舉動の一々を詳にするは、無益の業なれども、孔子が如何にも謹嚴なりしこと、喪と食と歌と（述九）、又た哭と慟（先、八）等に於て之れを窺ふを得。

動容とは、此所に顔色、風采、態度并に些細なる舉動等を概稱す。此れ等は何れも自然的事象の如きも、實は皆な是れ内面の徳の現はれならざるはなし。されば人々自己の意力によりて如何とも爲し得べければ、其の第一規範は「顔、一」の非禮勿動なり。

顔色は最も幾微に内面を現はすもの、而かも之れを現はして不可なる場合も少からず、即ち子游の問に對して、孝行は顔色を好くするより始まるとして、色難し（爲、八）と教へられたる所以なり。されど眞實なくして顔色のみよくするは、孔子の反覆戒しむる所（學、三）（陽、一七）、又た内面に堅固の道徳なく、徒らに外面のみ氣取るは君子の取らざる所、色の厲なる（陽、一三）はよろしからず。信に近き（泰、四）が希ふべく、温なる（季、一〇）が望まし。詳に云へば、温にして厲なる（述、三七）、是れ君子の顔色容貌ならざるべからざるなり。

風采態度は重々しからざれば萬事を爲すの基礎定まらず（學、八）。恭は「學、一三」を始め、到る所に力説さるるも、足（過）恭（公、二五）は恥づべく、又た禮と伴はざれば勞するのみとなる（泰、二）。敬も「爲、七」以下各所に力説せられ、莊も亦た望まし（爲、二〇）（先、一九）。即ち之れを望んで儼然

たることあり（張、九）、されど其の信實性なきは戒しむべし。此く一々の規定を守る以上、餘りにも窮屈らしけれども、孔子の如く修養熟成する時は、少くとも其の燕居時は申々天々（述、四）にして、坦として蕩々たりしなり（述、三六）。唯だ此れ等諸性質の關係は如何等は、當時尙ほ論究せられざりしなり。

ロ 一般的職「事」

學、五 子曰、道千乘之國、敬事而信、節用而愛

人、使民以時。

同、二四 子曰、君子……敏於事、而慎於言。

爲、八 子夏問孝、子曰、色難、有孺事弟子服其勞。

佾、三 哀公問社於宰我、宰我对曰、……子聞之曰、

成事不説、遂事不諫、既往不咎。

同、三 子曰、管仲之器小哉、或曰、管仲儉乎、曰、

管氏有三歸、官事不攝、焉得儉。

衛、毛 子曰、事君敬其事、而後食。

「事」は最も廣き概括なるが、其の中作業は今日の語にて、業務と雜事とに分つを得。

孔子は活動主義なるが故に、事を敬することを力説せり（學、五）（路、一九）。何故に事を敬するかと云へば、其は人の人たる所以を表現するを以てなり。即ち、事は其の結果する福利の爲めに之れを爲すに非ず（衛、三七）。福利の爲めにするは事を侮蔑するものなり。既に事を敬する以上は、之れを遂行するに當り、敏活なるべきは當然なり（學、一四）。幾千年の昔にありて、此く能率の増進を説き

たる孔子は、亦た一卓見なりといふべきなり。

但し事を爲すに當りては、失敗あり過失あるを免れず。世人動もすれば單に他人の失敗過失の跡をのみ見て、之れを惡評するは酷薄なり。

孔子は宰我の失言に際して、徒らに其の過去を咎めず、既に出來たることは致方なし(世、二一)としたるは、獨り弟子の一二に對しての寛大のみに非るを見る。

ハ 特殊的職「事」

(個人的雜事)

家事

張、三 子游曰、子夏之門人小子、當洒掃應對進退、

則可矣、抑末也、本之則無、如之何。

農事

路、四 樊遲請學稼、子曰、吾不如老農、請學

爲圃、曰、吾不如老圃。

漁獵

述、二 子釣而不網、弋不射宿。

射

佾、七 子曰、君子無所爭、必也射乎、揖讓而升下、而飲、其爭也君子。

同、三 子曰、射不主皮、爲力不同科、古之道也。

御

罕、二 達巷黨人曰、大哉孔子、博學而無所成名、

子聞之、謂門弟子曰、吾何執、執御乎、

執射乎、吾執御矣。

博奕

陽、三 子曰、不有博奕者乎、爲之猶賢乎

已。

小道

張、四 子夏曰、雖小道、必有可觀者焉、致遠

恐泥、是以君子不爲也。

遊

里、元 子曰、父母在、不遠遊、遊必有方。

占

路、三 子曰、南人有言、曰、人而無恆、不可

作巫醫、善夫、不恆其德、或承之羞、子

曰、不占而已矣。

二 諸惡事

爭鬪

佾、七 子曰、君子無所爭、必乎射乎。

衛、三 子曰、君子矜而不爭。

季、七 子曰、君子有三戒、及其壯也、血氣

方剛、戒之在鬪。

力亂

述、二 子不語怪力亂神。

戎戰弑

述、三 子之所慎、齊、戰、疾。

路、元 子曰、善人教民七年、亦可以即戎矣。

同、三 子曰、以不教民戰、是謂棄之。

憲、三 陳成子弑簡公、孔子沐浴而朝、告於哀公曰、

陳恆弑其君、請伐之。

盜

顏、元 季康子患盜、問於孔子。孔子對曰、苟子之

不欲、雖賞之不竊。

陽、三 子曰、色厲而內荏、譬諸小人、其猶穿窬之

盜也與。

同、三 子曰、小人有勇而無義、爲盜。

稼圃の事を拒けたるは、孔子が貴族的雰圍氣中にありしを知るべく、漁獵上の注意は其の動物愛

ありしを知るべく、博奕小道に對しても一片の同情を有し、又た占筮を拒けたるは、如何に其の活動主義的なりしかを知るべく、又た遠く遊ばざるべき教訓は、其の農業的民族の孝主義を知るべきなり。

偽善を咎めて之れを穿窬之盜に譬へし(陽、一二)は、最も痛快適切を覺ゆるなり。

一般に争鬪を非とし、従つて暴力行使を拒けし一事に就ては別項に之を論ず。

4 物件

「器」

爲、三 子曰、君子不器。

公、四 子貢問曰、賜也何如、子曰、女器也、曰、何

器也、曰、瑚璉也。

「富」(「貧」「祭」)

(甲) 富の所有

學、五 子貢曰、貧而無詔、富而無驕何如、子曰、可也、未若貧而樂、富而好禮者也。

爲、六 子張學于祿、子曰、……言寡尤、行寡悔、

祿在其中矣。

里、五 子曰、富與貴、是人之所以欲也、不以其道

得之、不處也、貧與賤、是人之所以惡也、不

以其道得之、不也。

雍、四 子曰、……吾聞之也、君子周急不繼富。

同、二 子曰、賢哉回也、一簞食、一瓢飲、在陋巷、

人不堪其憂、回不改其樂、賢哉回也。

述、二 子曰、富而可求也、雖執鞭之士吾亦爲之、

如不可求、從吾所好。

述、五 子曰、飯疏食、飲水、曲肱而枕之、樂亦

在其中矣、不義而富且貴、於我如浮雲。

泰、〇 子曰、好勇疾貧、亂也、人而不仁、疾之

已甚、亂也。

同、三 子曰、三年學、不致於穀、不易得也已。

同、三 子曰、……邦有道、貧且賤焉恥也、邦無道、

富且貴焉恥也。

先、元 子曰、……賜不受命、而貨殖焉、億則屢中。

顏、三 ……子夏曰、……死生有命、富貴在天。

路、九 子適衛、冉有僕、子曰、庶矣哉、冉有曰、既

庶矣、又何加焉、曰、富之。

憲、二 子曰、貧而無怨難、富而無驕易。

衛、三 子曰、……君子憂道、不憂貧。

季、七 孔子曰、君子有三戒、……及其老也、血氣

既衰、戒之在得。

張、一 子張曰、……見得思義。

(乙) 富の使用

學、五 子曰、道千乘之國、敬事而信、節用而愛人、使民以時。

脩、四 子曰、……禮與其奢也、寧儉。

同、三 或人曰、管仲儉乎、曰、管氏有三歸、官事不攝、焉得儉。

述、三 子曰、奢則不孫、儉則固、與其不孫也、寧固。

泰、三 子曰、禹吾無間然矣、非飲食、而致孝乎鬼神、惡衣服、而致美乎黻冕、卑宮室、而盡力乎溝洫。

罕、三 子曰、麻冕禮也、今也純儉、吾從衆。

右解説批評

・「器」は道具なり。而るに人は自由意志ありて、時と所によりて其の宜しきを制せざるべからず。

是れ君子は器ならずと言はるる所以なり。子貢は辯論家として極めて有能の士なれども、尙ほ此の人たるの本領に於て遺憾なる所あるを以て、孔子は之れに許すに貴重なる道具たる瑚璉を以てしたるに止まる。蓋し其れをして、人たるの根本骨髄を修養せしめんが爲めの激勵に外ならざるなり。

「富」の欲求すべきものたることは、孔子も之を否定せず（路、九）。戲談とは言へ、求めて得らるるものならば、執鞭の士となるとも富を求めんと言へり（述、一五）。又た必らずしも貧にして楽しむべきを説かずして、富んで禮ある者をも貴びたり（學、一五）。されど人の貧富となるには自ら其の道ありて之れに因らざれば富も永く有する能はず、貧も何日までも去ることなしとす。然らば其の道なるものは何ぞや。其は文勢上經濟の道なるが如く聞ゆるも、特別な其れにてはなく、依然として倫理上の道なるが如し。即ち、道德を行へば富は自ら到ると説けるに似たり。子張の祿を干むる道を問ひたるに答へて、言寡尤、行寡悔ければ祿は其の中に在り（爲、一八）と言ひたるは是れなり。是に於て富の取捨は一に義と不義とによるべく（季、一七）、又た其の授受も亦た之れに同じ。富は漫りに富者に與ふべからず（雍、三）、貧なればとて漫りに取るべからず（張、一）。されど果して富は徳者に與へらるるやといふに、事實上決して然りといふ能はず。然あり得るは、唯だ邦家に道の十分行はれたる時のことのみ、道の行はれ居らざる場合は、徳と富とは當然離るるを常とす。従つて富が

恥づべき時勢あり、貧が貴むべき時代あり（泰、一三）。而して孔子の時代は、徳と福とは一致せずして、君子は寧ろ貧にして樂しむべき時なりとす（學、一五）（雍、九）（述、一五）（憲、一一）（衛、二二）。たとへ勇ありとも、貧を疾むの餘り、亂に陥る如きは最も慎しむべしとせられたり（泰、一〇）。此所にも亦た孔子の溫柔性を見るなり。此くて理想を離れ、當代に即して言へば、人の上に富の來ると否とは偶然のこととなる、即ち富貴は天に在るなり（顔、五）。

「泰、一二」及び「先、一七」は共に異解多く、又た然まで重大なる意義を有せりとも考へられざるを以て、今暫らく之れを措く。

要するに、物質的幸福に關する限り、孔子の教が適切なる克己主義には非るも、實際上其れに近かりしは疑を容れざるなり。

富の使用に當りても、爲政者が節約を重んずべきは固よりのこと、又た個人にありても、孔子が儉約の必要を説き、場合によりては古禮に反くも可なりとせること、各章の趣旨に於て明らかなり。されど墨子の徒が、非儉主義たる點に於て儒者を論難せるも亦た理由なきに非ず。蓋し孔子の古禮を重んずるの甚しきや、思ふ存分、之れを改革することを敢てせず、随つて時勢の必要上よりすれば、尙ほ繁文縟禮、無用の費用を惜しまざる傾向少からず之ありたればなり。

5 精神修養

イ 修養過程 人が立派なる人となるに當りては、(1)他人の指導誘掖による、即ち教育なり。されど其は同時に、(2)各自の努力勉強による、即ち修養なり。前者は家庭國家の司る所なるが、後者は各人の爲すべき所なり。故に前者は國家の部に於て之を論じ、後者は個人の部に於て之れを説くを可なりとすべきも、其れ等は密接に相關聯するを以て、相連續して之を掲ぐることにす。

先づ精神修養の過程に就きて一言しておかん。孔子は些々たる知識の分析よりも、主として道の實行を重んじたり。随つて論語一卷殆んど修養が其の全部なりと言ふも過言に非ず。蓋し徒らに口舌を弄するは易し。而かも實行に至りては、何れは眞劍なる發憤努力を要す。即ち、進脩自彊の精神なり。而して其れには歩々克己の作用なくば成立せざるなり。是れ故に、孔子は機會あるごとに、弟子をして先づ一般的に(1)道の重要性を説き、又た(2)人々は其の實行の可能性あるを自覺せしめて、之れを獎勵し、更に(3)もし一旦之れを己れに得たる曉、如何に有りがたき効驗の吾人にもたらせらるるかを悟らしむるを怠らざりき。即ち悠悠々自足の境涯是れなり。

此くて人々に道に對する興味の湧くに從ひ、大體次の諸作用によりて、道を己れに得るに至るこ

とを説けるを見る。

第次法方の養修

- (イ) 學 (1)道及び (2)藝
- (ロ) 習
- (ハ) 思
- (ニ) 自 彊
- (ホ) 克 己
- (ヘ) 自 足
- (ト) 外面的諸注意

□ 一般的激勵

- 里、四 子曰、苟志於仁矣、無惡也。
- 同、六 子曰……有能一日用其力於仁矣乎、我未見力不足者、蓋有之矣、我未之見也。
- 同、八 子曰、朝聞道、夕死可矣。
- 雍、三 冉求曰、非不說子之道、力不足也。子曰、力不足者、中道而廢、今女畫。
- 同、七 子曰、誰能出不由戶、何莫由斯道也。
- 述、二 子曰、仁遠乎哉、我欲仁、斯仁至矣。
- 罕、三 子曰、苗而不秀者有矣夫、秀而不實者有矣夫。
- 同、三 子曰、後生可畏、焉知來者之不如今也、四十五十、而無聞焉、斯亦不足畏也已矣。
- 同、三 唐棣之華、偏其反而、豈不爾思、室是遠而、子曰、未之思也夫、何遠之有。
- 憲、三 子曰、不患人之不己知、患其不能也。

陽、二 子曰、年四十而見惡焉、其終也已。  
張、二 子張曰、執德不弘、信道不篤、焉能為有、焉能為亡。

ハ 修養の次第

學

學、一 子曰、學而時習之、不亦說乎。  
同、六 子曰、弟子入則孝、出則弟、謹而信、汎愛衆而親仁、行有餘力、則以學文。  
同、七 子夏曰、賢賢易色、事父母、能竭其力、事君、能致其身、與朋友交、言而有信、雖曰未學、吾必謂之學矣。  
同、八 子曰、君子不重、則不威、學則不固、主忠信、無友不如己者、過則勿憚改。  
同、四 子曰、君子食無求飽、居無求安、敏於事、而慎於言、就有道而正焉、可謂好學也已。  
為、四 子曰、吾十有五、而志於學。

為、五 子曰、學而不思則罔、思而不學則殆。  
公、五 子貢問曰、孔文子何以謂之文也、子曰、敏而好學、不恥下問、是以謂之文也。  
同、六 子曰、十室之邑、必有忠信如丘者焉、不如丘之好學也。

雍、三 哀公問、弟子孰為好學、孔子對曰、有顏回者、好學、……今也則亡、未聞好學者也。  
同、七 子曰、君子博學於文、約之以禮、亦可以弗畔矣夫。  
述、二 子曰、默而識之、學而不厭、誨人不倦、何有於我哉。  
同、三 子曰、德之不脩、學之不講、聞義不能徙、不善不能改、是吾憂也。  
泰、三 子曰、三年學、不至於穀、不易得也已。  
同、三 子曰、篤信好學、守死善道。  
同、七 子曰、學如不及、猶恐失之。

罕、二 達巷黨人曰、大哉孔子、博學而無所成名。  
同、二 顏淵喟然嘆曰、……夫子循循然、善誘人、博我以文、約我以禮。

同、元 子曰、可與共學、未可與適道、可與適道、未可與立、可與立、未可與權。

先、七 季康子問、弟子孰為好學、孔子對曰、有顏回者、好學、不幸短命死矣、今也則亡。

同、三 子路使子羔為費宰、子曰、賊夫人之子、子路曰、有民人焉、有社稷焉、何必讀書、然後為學、子曰、是故惡夫佞者。

顏、五 子曰、博學於文、約之以禮、亦可弗畔矣夫。

憲、三 子曰、古之學者、為己、今之學者、為人。  
同、三 子曰、不怨天、不尤人、下學而上達、知我者其天乎。

衛、二 子曰、賜也、女以予為多學而識之者與、對曰、然、非與、曰、非也、予一以貫之。

衛、三 子曰、吾嘗終日不食、終夜不寢、以思、無益、不如學也。

季、九 孔子曰、生而知之者、上也、學而知之者次也、困而學之、又其次也、困而不學、民斯為下矣。  
知能ノ段階

陽、四 子之武城、……子游對曰、昔者、偃也聞諸夫子、君子學道、則愛人、小人學道、則易使也。

同、八 子曰、由也、女聞六言六蔽矣乎、對曰、未也、曰、居、吾語女、好仁不好學、其蔽也愚、好知不好學、其蔽也蕩、好信不好學、其蔽也賊、好直不好學、其蔽也絞、好勇不好學、其蔽也亂、好剛不好學、其蔽也狂。  
張、五 子夏曰、日知其所亡、月無忘其所能、可謂好學也已矣。

同、六 子夏曰、博學而篤志、切問而近思、仁在其



中矣。

張、七 子夏曰、百工居肆以成其事、君子學以致其道。

同、三 子夏曰、仕而優則學、學而優則仕。

同、三 衛公孫朝、問於子貢曰、仲尼焉學、子貢曰、

文武之道、未墜於地、在人、賢者識其大者、不賢者識其小者、莫不有文武之道焉、夫子焉不學、而亦何常師之有。

藝能

雍、八 子曰……求也藝、於從政乎、何有。

述、六 子曰、志於道、據於德、依於仁、游於藝。

罕、二 達巷黨人曰、大哉孔子、博學而無所成名、

子聞之、謂門弟子曰、吾何執、執御乎、執射乎、吾執御矣。

同、六 大宰問於子貢曰、夫子聖者與、何其多能也、

子貢曰、固天縱之、將聖、又多能也、子聞之曰、大宰知我乎、吾少也賤、故多能鄙事、

君子多乎哉、不多也。

罕、七 牢曰、子云、吾不試、故藝。

張、四 子夏曰、雖小道、必有可觀者焉、致遠恐泥、是以君子不為也。

習

學、一 子曰、學而時習之、不亦說乎。

同、四 曾子曰、吾日三省吾身、為人謀而不忠乎、與朋友交而不信乎、傳不習乎。

陽、二 子曰、性相近也、習相遠也。

張、三 子游曰、子夏之門人小子、當洒掃應對進退、

則可矣、抑末也、本之則無、如之何、子夏聞之曰、噫言游過矣、君子之道、孰先傳焉、孰後倦焉、譬諸草木區以別之矣、君子之道、焉可訛也、有始有卒者、其惟聖人乎。

同、三 子夏曰、仕而優則學、學而優則仕。

自彊

學、四 曾子曰、吾日三省吾身、為人謀而不忠乎、

與朋友交而不信乎、傳不習乎。

里、四 子曰、不患無位、患所以立、不患莫己知、求為可知也。

同、七 子曰、見賢思齊焉、見不賢、而內自省也。

公、六 子使漆雕開仕、對曰、吾斯之未能信、子說。

同、四 子路有聞、未之能行、唯恐有聞。

同、三 子曰、已矣乎、吾未見能見其過、而內自訟者也。

述、三 子曰、德之不脩、學之不講、聞義不能徙、不善不能改、是吾憂也。

同、五 子曰、甚矣、吾衰也、久矣、吾不復夢見周公。

泰、四 曾子有疾、孟敬子問之、曾子曰、……君子所貴乎道者三、動容貌、斯遠暴慢矣、

正顏色、斯近信矣、出辭氣、斯遠鄙倍矣。

同、七 曾子曰、士不可不弘毅、任重而道遠、仁

以為己任、不亦重乎、死而後已、不亦遠乎。

罕、七 子在川上曰、逝者如斯夫、不舍晝夜。

同、元 子曰、譬如為山、未成一簣、止、吾止也、譬如平地、雖覆一簣、進、吾往也。

同、二 子曰、法語之言、能無從乎、改之為貴、

異與之言、能無說乎、繹之為貴、說而不繹、從而不改、吾末如之何也已矣。

同、三 子曰、主忠信、毋友不如己者、過則勿憚改。

顏、一 顏淵問仁、子曰、克己復禮、為仁、一日克己復禮、天下歸仁焉、為仁由己、而由人乎哉。

憲、三 子曰、古之學者為己、今之學者為人。

衛、九 子貢問為仁、子曰、工欲善其事、必先利其器、居是邦也、事其大夫之賢者、友其士之仁者。

衛、六 子曰、君子病<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>能焉、不<sub>レ</sub>病<sub>レ</sub>人之不<sub>レ</sub>已知<sub>レ</sub>也。

同、二 子曰、君子求<sub>レ</sub>諸己。

季、二 孔子曰、見<sub>レ</sub>善如<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>及、見<sub>レ</sub>不善如<sub>レ</sub>探<sub>レ</sub>湯、

吾見<sub>レ</sub>其人<sub>レ</sub>矣、吾聞<sub>レ</sub>其語<sub>レ</sub>矣、隱居以求<sub>レ</sub>其

志、行<sub>レ</sub>義以達<sub>レ</sub>其道、吾聞<sub>レ</sub>其語<sub>レ</sub>矣、未見<sub>レ</sub>

其人<sub>レ</sub>也。

陽、三 子曰、飽食終日、無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>心、難<sub>レ</sub>矣哉。

克 己

學、四 子曰、君子食無<sub>レ</sub>求<sub>レ</sub>飽、居無<sub>レ</sub>求<sub>レ</sub>安。

同、二 子曰、不<sub>レ</sub>患<sub>レ</sub>人之不<sub>レ</sub>已知<sub>レ</sub>、患<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>人也。

里、九 子曰、士志<sub>レ</sub>於道、而恥<sub>レ</sub>惡衣惡食者、未<sub>レ</sub>足<sub>レ</sub>

與<sub>レ</sub>議<sub>レ</sub>也。

雍、二 子曰、賢哉回也、一簞食、一瓢飲、在<sub>レ</sub>陋巷、

人<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>堪<sub>レ</sub>其憂、回也、不<sub>レ</sub>改<sub>レ</sub>其樂、賢哉回也。

同、三 子貢曰、如有<sub>レ</sub>博施<sub>レ</sub>於民、而濟<sub>レ</sub>衆、何如、可<sub>レ</sub>

謂<sub>レ</sub>仁乎。子曰、何事<sub>レ</sub>於仁、必乎聖乎、堯舜其

猶病<sub>レ</sub>諸、夫仁者、已欲<sub>レ</sub>立而立<sub>レ</sub>人、已欲<sub>レ</sub>達而達<sub>レ</sub>人、能近取<sub>レ</sub>譬、可<sub>レ</sub>謂<sub>レ</sub>仁之方<sub>レ</sub>也已。

述、五 子曰、飯<sub>レ</sub>疏食、飲<sub>レ</sub>水、曲<sub>レ</sub>肱而枕<sub>レ</sub>之、樂亦

在<sub>レ</sub>其中<sub>レ</sub>矣。

同、六 子曰、女奚不<sub>レ</sub>曰、其爲<sub>レ</sub>人也、發憤忘<sub>レ</sub>食、樂

以忘<sub>レ</sub>憂、不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>老之將<sub>レ</sub>至、云<sub>レ</sub>爾。

泰、三 孔子曰、三分天下<sub>レ</sub>、有<sub>レ</sub>其二<sub>レ</sub>、以服<sub>レ</sub>事殷、

周之德、其可<sub>レ</sub>謂<sub>レ</sub>至德<sub>レ</sub>也已矣。

罕、四 子絕<sub>レ</sub>四、毋<sub>レ</sub>意、毋<sub>レ</sub>必、毋<sub>レ</sub>固、毋<sub>レ</sub>我。

同、三 子曰、衣<sub>レ</sub>敝緼袍、與<sub>レ</sub>衣<sub>レ</sub>狐貉者<sub>レ</sub>立、而不<sub>レ</sub>

恥者、其由<sub>レ</sub>也與。

顏、一 顏淵問<sub>レ</sub>仁、子曰、克<sub>レ</sub>己復<sub>レ</sub>禮、爲<sub>レ</sub>仁。

衛、三 子曰、君子謀<sub>レ</sub>道、不<sub>レ</sub>謀<sub>レ</sub>食。

自足

學、一 子曰、人<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>知而不<sub>レ</sub>慍、不<sub>レ</sub>亦君子<sub>レ</sub>乎。

同、二 子曰、不<sub>レ</sub>患<sub>レ</sub>人之不<sub>レ</sub>已知<sub>レ</sub>、患<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>人也。

里、二 子曰、仁者安<sub>レ</sub>仁。

里、八 子曰、朝聞<sub>レ</sub>道、夕死可<sub>レ</sub>矣。

同、四 子曰、不<sub>レ</sub>患<sub>レ</sub>莫<sub>レ</sub>己知<sub>レ</sub>、求<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>知也。

公、二 顏淵曰、願無<sub>レ</sub>伐<sub>レ</sub>善、無<sub>レ</sub>施<sub>レ</sub>勞。

述、四 子之燕居、申申如也、夭夭如也。

同、五 子曰、飯<sub>レ</sub>疏食、飲<sub>レ</sub>水、曲<sub>レ</sub>肱而枕<sub>レ</sub>之、樂亦

在<sub>レ</sub>其中<sub>レ</sub>矣。

同、二 子曰、君子坦蕩蕩。

同、三 子溫而厲、威而不<sub>レ</sub>猛、恭而安。

先、二 子路、曾皙、冉有、公西華侍坐、……點(曾

皙)爾何如……曰、莫<sub>レ</sub>春者、春服既成、冠者

五、六人、童子六、七人、浴<sub>レ</sub>乎沂、風<sub>レ</sub>乎舞雩、

右解説批評

修養方法の順序は略ぼ前述の如し。されど嚴密に言ふ時は、既に(イ)の學と、(ロ)の習との前後さへ、

論議の問題たるべきものにして、子夏子游の異見は正に此點にあり(張、一二)。子游の見によれば、

子夏の門人等は日常些末の儀禮には熟達するも、更に根本義を知ることなければ取るに足らず。然

るに子夏によれば、此見大に誤る。根本原理を教へざるに非ず、日常の些事なればこそ先とするに

詠而歸、夫子喟然嘆曰、吾與<sub>レ</sub>點也。

憲、三 子曰、古之學者爲<sub>レ</sub>己、今之學者爲<sub>レ</sub>人。

同、三 子曰、不<sub>レ</sub>患<sub>レ</sub>人之不<sub>レ</sub>已知<sub>レ</sub>、患<sub>レ</sub>其不<sub>レ</sub>能也。

同、三 子曰、莫<sub>レ</sub>我知<sub>レ</sub>也夫、子貢曰、何爲<sub>レ</sub>其莫<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>

子也、子曰、不<sub>レ</sub>怨<sub>レ</sub>天、不<sub>レ</sub>尤<sub>レ</sub>人、下學而上

達、知<sub>レ</sub>我者其天乎。

衛、三 子曰、君子求<sub>レ</sub>諸己、小人求<sub>レ</sub>諸人。

季、二 孔子曰、……隱居以求<sub>レ</sub>其志、行<sub>レ</sub>義以達<sub>レ</sub>其道、

吾聞<sub>レ</sub>其語<sub>レ</sub>矣、未<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>其人<sub>レ</sub>也。

陽、九 ……子曰、天何言<sub>レ</sub>哉、四時行焉、百物生焉、

天何言<sub>レ</sub>哉。

非ず。草木に種類大小ある如く、人には各力量の次第あり。末の外は教ふる能はざる者には末を、本を教へ得べき者には本を教ふるなり。末も本も兼ねて明らかなるは聖人の外にはなしといふ。

眞に、子夏の言へる如く、道を人に得しむるは、言語文字、或は思索より始むと言ふべからず。先づ兒童をして、知らず識らずの間に、道の形を習はしむるより始めざるべからず。明白に之を言はざる點に於て、子夏の説明は適切ならざるも、其の狙ひ所は道理ありといふべし。「張、一三」に、「事へて優なれば則ち學ぶ」の意又た相同じ。されば修養の第一門は習なりと言はざるべからず。是れ孔子が、常に實行第一を主張すると相應す。されど論語の文面に現はれたる所によれば、學こそ第一らしく見ゆるなり。是に於て吾人も亦た「學」第一、「習」第二とし、やがて其の學びたる所、習ひたる所の内面的意義を悟るに至る「思」を第三としたり。而して一旦道の形を習ひ道の心を知り得て、之れを實行に移すに至るには、始終自彊の精神旺盛なるを要す。大抵の場合、又大抵の人にあつて、其は即ち克己の精神に外ならず。是れ眞に貴ぶべき自修の精神にして、其の完成の曉は、即ち自足の境涯に到り得るなり。されど結局、修養の方法論を知的に把握せんとすれば、論語は尙ほ不明確なり。孟子は更に頗る其の研究を進めたれども、其の組織的叙述は「大學」の整備なるに及ばず。是れ儒教の理論的完成者たる朱子が、特に重きを此書に置きし所以なり。従つて今、

多少の曖昧の點あるを顧みず、前述の次第によりて之れを略論すべし。

孔門にありて、學とは單に知ること非ずして同時に行ふことなり。されば子夏は、「賢を賢として色に易へ、父母に事へて能く其の力を竭し、君に事へて能く其の身を致し、朋友と交りて言うて信あらば、未だ學ばすと曰ふと雖も、吾は必らず之を學びたりと謂はん」(學、七)と言ひ、孔子は「君子は、食は飽かんことを求むるなく、居は安からんを求むるなく、事に敏にして、言を慎しみ、有道に就て正す、(是れ)學を好むと謂ふべき也已」(學、一四)と言ひし等を見て、之を知るべきなり。是れ後進は先輩に就て其の指導を受け、又た學問して古の道を知りて、共に此れ等を忠實に實行することの意味す。即ち學には、知と行との二義ありて、行こそ寧ろ重大なりといふなり。故に「行うて餘力あれば、則以て文を學ぶ」(學、六)なり。少くとも初學者にありては、適切に云へば、學の字には、當時既に知の意義と、行を兼ねたる意義との別ありしこと、「未だ學ばすと雖も、義は必らず之を學びたりと言はん」の言に觀て明らかなり。即ち「未だ學ばず」の學の字は知の意義、「之れを學びたり」との學の字は、行を兼ねたるものなり。されど本來を以て云へば、學の目的は行に在るは勿論なれども、學の意義は知にあり。唯だ之れを實踐的知といふべきのみ。而して論語にありても、多くの場合、學を知の意義として用ゐられたり。

かくて教育の始は、學にありといふも實は先づ道を習ふにあり、行を本とす。習ふとは道の何たるやを知らざるも、無意識の間に、指導者の模範を模倣することなり。故に有道者の傍にあれば、學ばずして孝弟も行はるる筈なり。されど教養の度進むに従ひ、道の何たるやを意識して、之れに向つて努力する過程必要となる、即ち修養是れなり。而して道の何たるやは、父母師友の指導によりて之れを知り、又た古來定まりたる道、即ち禮は、學問によりて之を學び知るなり。蓋し論語一卷の教訓は殆んど全部孔子てふ教師の指導にして、間々禮の示教を交へたるものと見るを得べし。但だ、孔子は何人に就て學ぶべきかと言へば、師に就くは勿論、又た友による(學、八、一四)(衛、九)と雖も、亦た何れの師、何れの友といふことなく、何人に就ても學ぶことを辭せざるべし(張、三三)とす。而して一旦道の何たるやを知りたる以上は、各自が十分の勉勵を以て、忠實に之れを實行せざるべからず、即ち自己が自己を鞭撻するの作用、即ち自彊自修の精神を要す。自彊自修の精神は、人々の天性によりて自然的に發し得ることも之れあれども、道に對する興味は之れを有つべくして、實は有ち得ざるを普通人の惱みとす。而して其の有ち得ざるを強ひて有たんとする意志の努力は、即ち克己の作用なり。是に於て自彊自修の精神は主として克己の作用となる。蓋し眞に師友の指導と言ひ、古來の禮と言ひ、此くくなりと示されたる以上、一應の理解は容易なる如くなれども、言

はば、其は其の始め一片の言語たるに止まる。其の言語が各自の身となり肉とならんが爲めには密接に其れと自我との關係を見窮めざるべからず、即ち其の自我的意義を悟らざるべからず。委しく言へば、道徳的教育、即ち習によりて不識不知の間に、高等の自我を養成し、其の自我的意義を明らかにするに非んば、師友の指導も古來の禮も、我が眞に之れを實行せざるべからざる所以を悟る能はざるなり。此くて學を爲すの動機は、賣らんが爲めに非ずして、全く己れが爲めにするにあり、賣らんが爲めの學ならば、賣らざる場合之れを行ふこと有り得べからざればなり。

然るに此の意義判明せずして徒らに他人の言語に従ふものあれば、是れ所謂口耳三寸の學に外ならず。其の如何に道徳を害するかは、「道に聽きて塗に説くは徳を棄るなり」(陽、一四)の言、最も明快に不消化の智識の鵜呑を攻撃せるを見る。然らば口と耳と三寸の間に、何物の介在するか。是れ即ち「思」の作用なり。實に思の作用により、他人よりの命令なるかの如き言語も、實は自己が自己に下す命令に外ならざるを知るに至る。換言、他律主義的教訓が、自律主義的意義あるを悟るは、思の作用による。既に自律主義的意義を悟れば、一見卑下なる如く見ゆる自我も、實は高大にして直に天に接する意義あるを悟るに至る。人一旦眞自覺の域に至れば、凡ては自我に根柢するが故に、「天を怨みず、人を尤めず、下學して上達す、我を知る者は、其れ天か」と考ふるを得るなり。

「思」の作用の重要なこと此の如し。されど孔子は自ら思ひしことは十分なりしも、其の作用の研究には著手せざりき。(思の作用に就ては心性の部参照)

此くて習と學と思とは、相因り相合して一心の修養を完成するものなり。又た藝能も亦た孔子の輕んぜざりし所なるは、「求也藝あり、政に従ふに於て何かあらん」と言ひたるを以て明らかなり。

「遊於藝」と云ひ、且つ孔子自ら鄙事を能くすとして得意なりしを見ても、孔門に於ける藝能の修得を重んぜしを知る。

此くて道を學び習ふと併行して、藝能を學び習ふことも有り得たるも、當時既に射御は道を修得せんが爲めの手段たるに外ならずして、道其の物とは輕重を異にせるを見るなり。

修養約論

右は修養の順序方法に就ての一般論なるが、尙ほ各項の要旨を約言すれば次の如し。

修養に就ての激勵

- (1) 道の重要性より説く(里、四八)
- (2) 其の可能より説く(里、六)(雍、一二)(述、二九)

(罕、二三)

學

學に就ての諸言を分類すれば次の如し、

- (1) 學の意義(學、七、一四)(公、一五)(先、二五)(憲、二五、三七)(張、七)
- (2) 學 文(學、六)(雍、二七)(罕、二、一一、二九)

修養の諸方法要約

- (3) 學への志(爲、四)(顔、一五)(衛、二)(張、六、一四)
- (4) 學の好み(公、二八)(雍、三)(述、二)(泰、一三)(先、五)(陽、八)(張、五)
- (5) 學の勉強(述、二、三)(泰、一七)
- (6) 學の樂み(爲、一〇)
- (7) 學ぶ態度(爲、八)
- (8) 學と思(爲、一五)
- (9) 學の効(陽、四)
- (10) 學の方法(爲、一五)(張、二)(二)

習

- (1) 習の樂み(學、一)
- (2) 習の重要(學、四)(陽、二)(雍、七)
- (3) 輕 重(張、一一、一三)
- 自彊
- (1) 自彊の簡條(學、四)(述、三)(泰、四)(罕、二、四、二五)(顔、一)(憲、二五)(衛、九、一八、二〇)

(季、一一)

- (2) 熱心の程度(述、五)(泰、七)(罕、一七、一九)

(陽、二二)

克己

- (1) 衣食住に就て(學、一四)(里、九)(雍、一一)(述、一五、一八)(罕、二七)(衛、三一)
- (2) 所有に就て(泰、二〇)
- (3) 名譽に就て(學、一六)
- (4) 欲望に就て(雍、三〇)(罕、四)(顔、一)

自足

- (1) 内心の奥底(學、一、一六)(里、二、八、一四)(述、一五)(憲、二五、三二、三七)(衛、二〇)(季、一一)
- (2) 名譽に就て(公、二六)
- (3) 自足の外形(述、四)(述、三六、三七)(先、二六)(陽、一九)

之を要するに修養は何に始りて何に終るや。換言、修養の根本要諦は何か。第一著眼點は何處に置くべきや。孔子は一般論を爲さず。多く人に即し、時に即して訓戒を與へしのみ。故に此れ等に就て明確なる言辭なしと雖も、固より道、仁を根本とせしは言を待たず、即ち造次顛沛忘るべからざるものは之れなり(里、五)。而して其の間種々の工夫次第あること上述の如し。されど凡ての段階を経て後遂に到達し得る所はと言へば、結局自我の完成、即ち自足に外ならずといふべし。

自我的歸著點

- 學、一 子曰……人不知而不愠、不亦君子乎。
- 同、二六 子曰、不患人之不己知、患不知人也。
- 里、四 子曰、不患無位、患所以立、不患莫己知、求爲可可知也。
- 述、二〇 子謂顏淵曰、用之則行、舍之則藏、惟我與爾、有是夫。
- 泰、六 曾子曰、士(我)不可不弘毅、任重而道遠。
- 顏、一 子曰……爲仁由己、而由人乎哉。
- 憲、二五 子曰、古之學者爲己、今之學者爲人。
- 憲、三 子曰、不患人之不己知、患其不能也。
- 同、毛 子曰、不怨天、不尤人、下學而上達、知我者、其天乎。
- 衛、四 子曰、無爲而治者、其舜也與、夫何爲哉、恭己正南面而已矣。
- 同、一六 子曰、君子病無能焉、不病人之不己知也。
- 同、二〇 子曰、君子求諸己、小人求諸人。
- 同、二六 子曰、人(我)能弘道、非道弘人也。

二 孔子の自我の概念

蓋し人の徳不徳の分るるは、種々の原因事情あるに相違なきも、之れを精査するに従つて、其の最大最深の根柢の自我に存するは疑ふべからず。勿論人は自我以外の環境、天性、或は他人等によりて動かさるるも、其の動かさるることの多ければ多きだけに、其の人の徳の未熟なりと言はざるべからず。是に於て達人は現世に於ける善惡一切の結果を擧げて之れを己れに歸せんとするなり。眞に我が努力勉強は、名譽を求め、利益を得んが爲めとも考へられ、又た事實然く動行する者比々皆な然りと雖も、達觀すれば、其は自我以外の人と物との奴隷たるものにして、俗人たるを免れず。孔子の聰明は、よく之れを知る。故に人の價値は全部を擧げて人其れ自身の内面にありと爲す、即ち徳は徳自身に於て自己充足する自慊的のものとするなり。さればこそ、他人の價値を認めざるは我が不徳なれども、他人の我が價値を認めざるは、達人の意とすべきに非すと爲す。我が價値は我れ自ら之れを認むることによりて、既に十分なり(學、一、一六)(里、一四)(述、一〇)(憲、三二)(衛、一八)。我が眞價値たるや、決して之れを他人より與へ得べからざる底のものにして、飽くまでも自業自得のもの、自己創造的のものなればなり。即ち其は由己的(顏、一)、爲己的(憲、二五、三七)、求諸己的(衛、二〇)のものなればなり。

自己の内面に、果して然る絶大の價値あるものありや。蓋し自我の自我たる價値を有する所以の

ものは、一に道を體認し體得するに外ならず。道こそ不朽不滅にして絶對的價值あるものなればなり。されば道の實現を使命とする人間の、自尊自重せざるべからざるは自ら明らかなり。故に曾子の言あり(泰、六)、又た道を實現する努力其の物に於てこそ、始めて人の徳あり。もし道なるものが、人の努力を待たず、寧ろ人を驅つて自ら行はるるものならば、是れ徳てふ崇嚴の價值は之れなきなり。故に人能く道を弘む、道は人を弘むるに非ずといふ(衛、二八)。

孔子の直覺に於て、自我の價値を認識せるは、十分に之れを知り得るなり。されど人知らざるも慍らず、或は我れは人を知るべきも、人は我れに地位を與へず、我れを認識せざるも意と爲すべからずとは、孔子にありて恐らく弟子の修養の爲めにする激勵の辭たるにも似たり。而して我れもし世に用ゐられざれば、尊貴限りなき價値を抱きて、安然として獨り藏れ居らざるべからざるや。又た果して人間として藏れ居られべきや。孔子が然かく藏れ居らざるべからずとせしは明らかなるも、果して然かく藏れ得るとせし明證は之れなきが如し。世は我れを容れず、我れ又世を容れず、兩者全然隔離せる淋しき生活に人は果して堪へ得べきや。もし其の事の十分になし得るとせば、其は一切の世間を對手とせずして、世間以上の靈を相手とするものにして、始めてよく爲し得べきなり。固より孔子には天の信仰あり。天の照鑒の下にありてこそ、然る搖ぎなき安然たる自得の境涯に入

り得るなれ。孔子の教が果して社會的なりしか又た超社會的なりしか、是れ大問題なり。思ふに、人知らざるも慍らざるは、自我の獨立を指示するに相違なきも、要するに論語前篇に於ては激勵的に自我の自慊を説けるに似たり、而るに後篇に於ては、斷じて不怨天、不尤人と云ふ、従つて「知我者、其天乎」といふ。是れ自我の認識に於て別段の變化をなしたるものと見るを得るなり。此く論語の前後兩篇の間に於て、自我の認識の程度を區別するは、或は不當無益なるに似たりと雖も、實は大に然らず。蓋し倫理學上の智識の精進は、一に自我の認識程度によると言ひ得べければなり。而して此の方向に沿うて、儒家者流の思想の發展は頗る著しきものあり。其れとして這般智識の向上に於ては、孟子を推さざるべからず。

而して孟子の自我意識の高調は、次の諸章之れを現はして十分なりといふべし。

夫仁天之尊爵也、人之安宅也、……仁者如射、射者正己而後發、發而不中、不怨勝己者、反求諸己而已矣。(公、上)

孟子曰、愛人不親、反其仁、治人不治、反其智、……行有不仁者、皆反求諸己。(離、上)

孟子曰、……孔子曰、小子聽之、清斯濯纓、濁斯濯足矣、自取之也。(離、上)

孟子曰、有天子爵者、有人爵者……既得人爵、而棄其天爵、則惑之甚者也、終亦必亡而已。(告、上)

而して

居天下之廣居、立天下之正位、行天下之大道、得志、與民由之、不得志、獨行其道、富貴不能淫、貧賤不能移、威武不能屈、此之謂大丈夫。(滕、下)

孟子曰、欲貴者、人之同心也、人人有貴於己者、弗思耳、人之所貴者、非良貴也、趙孟之所貴者、趙孟能賤之。(告、上)

に至つて正に其の極に達せるものにして、意氣天を衝くといふべし。

此くて禮記中に雜纂せられたる儒家も、亦た此かる思想を展開し、哀公問篇に於ては、自ら尊み、同時に他を尊み、妻と子に至るまで之れを尊敬せざるべからざることを認識するに至れり。是れ明らかに、人の人格の概念を得て、其の我のみならず等しく他人、妻子を通じて之れあることを發明したるものにして、人間本質の認識に於て論孟以上の域に達せりといふべし。

孔子遂言曰、昔三代明王之政、必敬其妻子也、有<sub>レ</sub>道、妻也者親之主也、敢不<sub>レ</sub>敬與、子也者親之後也、敢不<sub>レ</sub>敬與、君子無<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>敬也、敬<sub>レ</sub>身爲<sub>レ</sub>大、身也者親之枝也、敢不<sub>レ</sub>敬與。(哀公問)

更に儒行篇に至りては、自我意識愈々明確となりて儒者の獨立獨行を力説して至れり盡せるものあり。

儒有(又)委<sub>レ</sub>之以<sub>レ</sub>貨財、淹<sub>レ</sub>之以<sub>レ</sub>樂好、見利不<sub>レ</sub>虧其義、劫<sub>レ</sub>之以<sub>レ</sub>衆、沮<sub>レ</sub>之以<sub>レ</sub>兵、見死不<sub>レ</sub>更其守、鷙蟲攫搏不<sub>レ</sub>程勇者、引<sub>レ</sub>重鼎不<sub>レ</sub>程其力、往者不<sub>レ</sub>悔、來者不<sub>レ</sub>豫、過言不<sub>レ</sub>再、流言不<sub>レ</sub>極、不<sub>レ</sub>斷其威、不<sub>レ</sub>習其謀、其特立有<sub>レ</sub>如此者。(程猶量也、搏、猛、引、重、不<sub>レ</sub>量、勇力推<sub>レ</sub>之與否)

大學篇は此れ等と比較して聊か穩かなりと雖も、自我は判然他の道德意識より超出して、「獨」の思想を展開し慎獨の道德主義を立てたり。

中庸篇も、亦た明らかに社會と對立せる自我を認識し、内面的價值を力説せり。

子曰……君子依<sub>レ</sub>乎中庸、遯<sub>レ</sub>世不見<sub>レ</sub>知而不<sub>レ</sub>悔、唯聖者能<sub>レ</sub>之。

子曰、射有<sub>レ</sub>似<sub>レ</sub>乎君子、失<sub>レ</sub>諸正鵠、反求<sub>レ</sub>諸其身。君子戒<sub>レ</sub>慎乎其所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>睹、恐<sub>レ</sub>懼乎其所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>聞。

蓋し進展限なからんとする自我が、不如意の社會てふ大障壁に遮ぎられて、一步も前進を許されざる社會に於ては、其は勢ひ深く自己の内面に喰ひ入りて、其の新領土を開拓せざるべからず。而して客觀界のみならず、主觀界も亦た無限の未開地を供給するものなり。深刻なる自覺の進歩は此くして成るものなるが、春秋以後の支那思想界は即ち其れにして、孔子は正に其の出發點推進力たりしなり。

要するに此所に、自我思想に取りて考慮を要する重要な點は、自我を全然個人的に考ふると、社會的に考ふるとの相違即ち是れなり。もし自我が、果して全然社會及び環境と關係なく、獨自に完成するものならしめば、身は嚴重に鐵鎖に繋がれても、尙ほ却つて時の大暴君ネロの不自由を憐れむと傲語するエピンテタスの如きものも有り得るなり。而して多少退嬰的なりとも、支那古代に



於て老莊の狙ひし所も亦た此所にありしなり。而して儒者が次第に落ち着きし點も亦た殆んど之れと同じ傾向ありしに似たり。唯だ其の懷抱する理想は、其の初め飽く迄社會的にして、老莊の其れは初めより個人的たる所に相異なるのみ。されど其の實際は兎にも角にも、其の理窟より云へば、老莊は個人的自我の獨立に満足し得たりしならんも、社會的なる道を抱きながら、事實上社會との隔離を餘儀なくせられたる儒家者流は、賣らんとして賣れざる憾は深刻に何處迄も附き纏はざるべからず。勿論其れ等の人々も、個人的には各人が出來得べき丈の満足は得らるべく、又た然かせざるは其の人の罪といはざるべからずと雖も、個人的満足は社會的大不満と併行することも有り得べく、孔子の場合は即ち其れならざるべからず。されば其の自足といふは、個人的に關する限りにして、一私の憾はなきも、天下の憂なき能はざりしなり。而して孔子は修養の爲めには、弟子をして個人的満足を以て十分なりとすべしとせしも、彼れ自らの行動としては、魯を去りて後十幾年、不遇の身を陳蔡の間に浪々したるを見ても、其の飽く迄社會的自我の實現を求めんとせしを見る。唯だ孔子の之れに關する理論的説明は十分ならず。且つ政治的にも社會的にも、其の實現の方法を發見し得ず、晩年著述によりて此の事を後進に委託するに至る。而して爾來百有餘年孟子に至りても、其の政治的進出の成らざるに及びては、唯だ天下の英才を得て之れを教育するに止まる。而し

て孔孟以後の所謂英才は何を爲し得たるか。蓋し暴力によりて其の社會的活動を全然阻止されたる彼れ等が、事實上老莊と行き方を同じくし、遂に思想其の物までも相區別するなきに至りしも亦た止むを得ざりしならん。吾人は此かる傾向は既に論語中にも之れあるを認むるなり。禮記諸篇に至りては既に明らかに然りしこと前既に述べしが如し。

更に吾人は秦漢以後に至りても學者尙ほ曖昧糊塗を事とし、此の間の理論を明らかにせず、又た更に這般の實行を缺きたることが、古來支那倫理の大缺陷なりしことを疑はざるなり。即ち、支那第一の哲學者たる朱子によりて絶讃されたる「大學」の書が、平天下治國が結局格物致知誠意正心の個人的修養に基くべきを説きたるは、孔子の徳政主義の合理的組織的一發展となすべきも、逆に、眞正の個人的修養は、亦た強く正しき國家の樹立發展を待つことを説かざる點にこそ、儒教の老莊化し、支那國民の利用主義化したる最大の原因ありしを思はざるを得ざるなり。

## ホ教 科

詩

佻、八 子夏問曰、巧笑倩兮、美目盼兮、素以爲絢兮、何謂也。

學、二五 子貢曰、詩云、如切如磋、如琢如磨、其

斯之謂與。

同、二〇 子曰、關雎樂而不淫、哀而不傷。述、一七 子所雅言、詩書執禮、皆雅言也。

爲、二 子曰、詩三百、一言以蔽之、曰、思無邪。

泰、三 會子有疾、……詩云、戰戰兢兢、如臨深淵、

如履薄冰。

泰、八子曰：興於詩，立於禮，成於樂。

罕、云子曰：不伎不求，何用不臧。

同、三子曰：唐棣之華，偏其反而，豈不爾思，室

是遠而，子曰：未之思也夫，何遠之有。

路、五子曰：誦詩三百，授之以政不達，使於四

方，不能專對，雖多亦奚以為。

季、三陳亢問於伯魚曰：子亦有異聞乎，對曰：

未也，嘗獨立，鯉趨而過庭，曰：學詩乎，

對曰：未也，不學詩，無以言，鯉退而學

詩。

陽、九子曰：小子何莫學夫詩，詩可以興，可以

觀，可以羣，可以怨，邇之事父，遠之事

君，多識於鳥獸艸木之名。

同、二子曰：伯魚曰：女為周南召南矣乎，人而不

為周南召南，其猶正牆面而立也與。

為、三子曰：書云，孝乎惟孝，友于兄弟，施於有

政，是亦為政也，奚其為為政。

述、七子曰：子所雅言，詩書執禮，皆雅言也。

堯、一堯曰：咨，爾舜，天之歷數在爾躬，允執其

中，四海困窮，天祿永終，舜亦以命禹（湯）

曰：予小子履敢用玄牡。

易

述、云子曰：加我數年，五十以學易，可以無大

過矣。

路、三子曰：南人有言，人而無恆，不可以作巫

醫，善夫，不恆其德，或承之羞，子曰：

不占而已矣。

憲、元子曰：曾子曰：君子思不出其位。

禮（德ノ部ニ別出）

樂

佞、三子曰：人而不仁，如禮何，人而不仁，如樂

何。

佞、三子語魯大師樂曰：樂其可知也，始作翕如

也，從之純如也，噉如也，繹如也，以成。

同、二子謂韶，盡美矣，又盡善也，謂武，盡美

矣，未盡善也。

述、三子在齊聞韶，三月不知肉味，曰：不圖

為樂之至於斯也。

同、三子與人歌而善，必使反之，而後和之。

泰、八子曰：興於詩，立於禮，成於樂。

同、五子曰：師摯之始，闕雎之亂，洋洋乎盈耳哉。

罕、五子曰：吾自衛反魯，然後樂正，雅頌各得

其所。

先、一子曰：先進於禮樂，野人也，後進於禮樂，

君子也，如用之，則吾從先進。

路、三子曰：野哉由也，君子於其所不知，蓋闕

如也，名不正，則言不順，言不順，則事

不成，事不成，則禮樂不興，禮樂不興，

則刑罰不中。

衛、二子曰：樂則韶舞，放鄭聲。

季、二子曰：天下有道，則禮樂征伐自天子出，

天下無道，則禮樂征伐，自諸侯出。

陽、二子曰：禮云，禮云，玉帛云乎哉，樂云，樂云，

鐘鼓云乎哉。

同、六子曰：惡紫之奪朱也，惡鄭聲之亂雅樂

也，惡利口之覆邦家者。

同、三宰我問：三年之喪，期已久矣，君子三年不

為禮，禮必壞，三年不為樂，樂必崩。

微、九子曰：大師摯適齊，亞飯干適楚，三飯繚適蔡，四

飯缺適秦，鼓方叔入於河，播鼗武入於漢，

少師陽，擊磬襄入於海。

右解說批評

孔子は弟子の教育に當つて詩、書及び禮等を用ゐたり（述、一七）。此の外に樂をも併用したること  
も亦た勿論なり。されど此れ等は今日の教科書の如きには非ず。當時書籍は竹木に刻みたる簡にし  
て得易からず、又た使用し易からず。紙に字を書するは漢代以後なれば、多くは記誦によりしこと  
想像すべきなり。詩書の構成に就き、史記には、孔子が詩書を刪定せることを言ふも、崔述は「古  
來孔子に至るまでに詩書の逸失せる者多きなり、孔子が之れを刪りしに非ず」と考證せり、或は然  
らん。此く所謂詩書の量に就ては、種々の異解之れあらんも、孔子が之れを利用したるは前紹介の  
章句之れを明示せり。

禮に就ては別に記する所あり。今更めて説かず。樂は事態の性質上記する所なし。樂經など言へ  
るものありとも言はるれど、信すべからず。

易に就ては、唯だ一たび（述、一六）之れに論及せられたり。されど此の本文に於て、「加」は假なり  
とせられ、又た「五十」は「卒」なりともせらるる等、既に曖昧の點あるのみならず、種々疑惑な  
き能はず。史記世家には、孔子晚年易を喜び、彖、象、繫辭、説卦、文言を序すとあり。而して班  
固以來、諸儒皆な繫辭傳は孔子の作となす。されど歐陽修は、夙に「易童子問」を著して、之れを  
否定したり。又我邦に於ても、伊藤東涯は、左傳等の考證により、最も確實に孔子の作と言はるる

繫辭さへも、其の作に非ることを考證せしのみならず、尙ほ思想上、易の消極主義、退嬰主義、利  
己主義なる點孔子の其れと一致せずとせり。支那に於ても、近く崔述も

- (1) 其の文體は論語の簡古に似ず、繁にして文なりとし、
- (2) 其の文中「子曰」の文字あるあり、無きありて、同一作者のものに非るを示す、
- (3) 孟子も曾て易に論及せず、

として、易は孔子の作にもあらず、又た其の諸篇は一人の作にも非ずとしたり。荀子は幾たびか易  
に論及したれども、決して之れを孔子の大乗義としたるに非ず。尙ほ内面的に見るに、論語の天は  
人格的なるに、易の太極は非人格的、汎神論的なるを思ひ合すれば、孔子が弟子の教育に易を用ゐ  
ざりしは勿論、宋儒の主張せしが如く、孔子自らも多大の價值を之れに與へしとは考へ得べから  
ず。唯だ當時の智識を集大成して、其の上に大人格を築き上げたる孔子が、易を參考し時に之れを  
利用したることは「路、二二」「憲、二八」の易の語あるによりても之れを知り得べきなり。

## 6 教育 教授

雍、二七 子曰、君子博學於文、約之以禮、亦可

弗畔矣夫。

述、六 子曰、志於道、據於德、依於仁、游於藝。

同、七 子曰、自行束脩以上、吾未嘗無誨焉。

同、八 子曰、不憤不啓、不悱不發、舉一隅不以

以三隅反、則不復也。

同、二 子曰、文、行、忠、信。

秦、八 子曰、興於詩、立於禮、成於樂。

同、二 子曰、……人而不仁、疾之已甚、亂也。

罕、八 子曰、吾有知乎哉、無知也、有鄙夫問

於我、空空如也、我叩其兩端而竭焉。

同、二 顏淵喟然嘆曰、……夫子循循然善誘人、博

我以文、約我以禮、欲罷不能、既竭吾

才、如有所立卓爾、雖欲從之、末由

也已。

先、三 子路問、聞斯行諸、子曰、有父兄在、如之

何、其聞斯行之、冉有問、聞斯行諸、子曰、

聞斯行之、公西華曰、由也問、聞斯行諸、

子曰、有父兄在、求也問、聞斯行諸、子曰、

聞斯行之、赤也惑、敢問、子曰、求也退、

故進之、由也兼人、故退之。

路、九 子適衛、冉有僕、子曰、庶矣哉、冉有曰、既

庶矣、又何加焉、曰、富之、曰、既富矣、又

何加焉、曰、教之。

同、二 子曰、苟有用我者、期月而已可也、三年有

成。

同、二 子曰、善人爲邦百年、亦可勝殘去殺矣、

誠哉是言也。

同、三 子曰、如有王者、必世而後仁。

憲、八 子曰、愛之、能勿勞乎、忠焉、能勿誨乎。

同、哭 原壤夷俟、子曰、幼而不孫弟、長而無述焉、

老而不死、是爲賊、以杖叩其脛。

同、哭 闕黨童子將命、或問之曰、益者與、子曰、

吾見其居於位也、見其與先生並行也、

非求益者也、欲速成者也。

衛、五 子曰、不曰如之何、如之何者、吾末如

之何也已矣。

同、元 子曰、有教無類。

陽、四 子之武城、聞絃歌之聲、夫子莞爾而笑曰、

割雞焉用牛刀、子游對曰、昔者偃也、聞

諸夫子、曰、君子學道、則愛人、小人學

道、則易使也、子曰、二三子、偃之言是也、

前言戲之耳。

陽、四 子曰、道聽而塗說、德之棄也。

張、三 子游曰、子夏之門人小子、當洒掃應對進退、

則可矣、抑末也、本之則無、如之何、子夏

聞之曰、噫、言游過矣、君子之道、孰先傳

焉、孰後倦焉、譬諸草木區以別之矣、君子之

道、焉可誣也、有始有卒者、其惟聖人乎。

右解說批評

學記によれば

古之教者、家有塾(門側室)、黨有庠(術當作遂)、術(術當作遂)、有序、國有學(周禮五百家爲黨、萬二千五百家爲遂、黨屬鄉、遂在遠郊之外)

といふ。之れによれば學校の大小高低備はりある如きも、許魯齋は曰ふ、始皇が書を焚てより以後聖人の經籍全からず、古人學を爲すの次第を考校するに由なし。班孟堅が漢史に、小學、大學の規模の大略を説くと雖も、然も亦た其の間節目の詳を見ざること千有餘年、學者各々己が意を以て學と爲すと。

尙ほ内則篇によれば、生れて十歳に至るまでの家庭教育の概略と、十年後家庭外に居宿して外傳

に就き、二十にして冠し、始めて禮を學ぶ……三十にして室あり、始めて男事を理む、……四十にして始めて仕ふ、物を方(衡)り謀を出し慮を發す。道合へば則ち服従し、不可なれば則ち去る。五十命ぜられて大夫となり、官政に服し、七十事を致(還)す。女子十年まで出でず、……十有五年にして笄し、二十にして嫁す……とあり。以て大體の教育制度を想像し得べしと雖も、小學——大學の詳は明らかならず。朱子に「小學」の著あるも、亦た貧弱なる記述あるに過ぎず。唯だ家庭教育と家庭外の教育と、不完全ながら國に大學と名くるものありしが如きも、固より其所に強制などありしに非れば、其の實施の程度は甚だ心許なきものなるを疑はず。家庭教育、即ち周代の習慣上行はれたる兒童の訓育の實際は、其の父母次第によりしことにして、其れ以上所謂外傳に就かしむる如きは、其の家の經濟力にもよることたる勿論にして、更に大學への進入に至りては仕官に望みある特別なる篤志者に限られたりといふべし。而して孔門子弟の如きは、此の限られたる階級の人たること勿論なり。

此所に注意を要するは、二十にして始めて禮を學ぶといふことなるが、禮記諸章に示す如く、當時の家庭の諸習慣、即ち曲禮も亦た禮に相違なければ、限られたる人々の高年に至りて、學ぶの禮は仕官に必要なものをいふが如し。

教育の全體に就き、其の方法を組織立てて之れを表明するは孔子の曾て試みざりし所なり。且つ時により、目的により、種々の説明を爲して殆んど連絡統一を缺くの憾なきを得ず。されど其れ教育の大方針とも見らるべき言大凡そ二あり。「述、六」及び「泰、八」即ち是れなり。今強ひて兩者の關係を窺はんには、兎にも角にも孔子が子弟をして禮を講習せしむるを以て主眼とせしは尤も明らかなり。されど禮は我儘を抑ふる必要あり、子弟は之れを喜ばざる傾向なきに非ず。されば教育上最先の重要事は、道に對して興味を感ぜしむることならざるべからず。故に興於詩(泰、八)とも、又た志於道(述、六)とも言はる。而して此の他孔子が道に向つて發憤せしむる爲めに反復丁寧に激勵の辭を與へ、(里、六、八)(雍、一七)(述、二九)(罕、三二)、又た躊躇の色ある者に對しては嚴戒を加へたりき(雍、二二)。かくて篤く道を信じ道に志すは道を行ふの端緒なり(里、八)(張、二、六)。次は立於禮を重要とす。禮の中にも難易高低の別ありて、初學者は先づ孝弟の實習を第一とし(學、二)、子夏の爲せし如く(張、一三)洒掃應對より始めたるに相違なかるべし。されど其れ將た外形的形の上に止まらず、必らず其れと平行して精神的態度なかるべからず。其れとして忠信は第一なり(學、二、八)。更に其の次第に進むに従つて、文を學ぶの事あるは反復言はれたる所なり(述、一七、二四)(雍、二七等)。立於禮とは仔細に之れを言へば、恐らく學ぶことと思ふことと、兼て又た勿論學び思ひし事を實行

することを意味せしならん。此の學び思ふは上級子弟のことにして、此は子張の力説せし所なり（張、一三）。孔子は子夏子張の何れにも與せず、何れをも必要とせしは疑を容れず。唯だ此の實力は何處に之れを求むべきやと言ふに、各自の過去に修得し得たる徳力に據るの外なかるべし。是れ據於徳と云ふ所以なり、即ち據るとは之れを足の踏み場所とする意味なり。此の踏み場所ある上は、更に行有餘力則以學文なるが、唯だ文を學ぶのみならず、其れに思の作用を加へて、眼の著け場所、即ち目的を定むるを要す。即ち依於仁なり。依るとは眼を其れに著けて離さず、常住坐臥實現に勵むなり。此くて愈々其の實現に成功するに至れば、成於樂、或は游於藝に至るなり。約言（泰、八）は如何なる初步の學習者にも適用せらるる言なるが、「述、六」は上級學者のことに屬すといふべし。

右は教育の大體論なるが、尙ほ少しく細目に就て論ぜんに、孔子の教授の目的は、眞に道の實現にありて、名利の爲めに非ず。隨つて往いて教ふる禮に非すと雖も、入門の禮を執る以上は、何人に對しても之れを誨ふるを躊躇せず（述、七）。教育は仁術ならずんばならず、即ち愛と忠によりて行はるることなり（憲、八）。尙ほ教授の方法に就ても、孔子は別の意味に於て親切なりき。其は密接に各人の理解に適合せしめて、決して不消化の智識を與へんとせざりしこと是れなり。さればこ

そ、一知半解の知識を以て得々たるが如きは正に其の人の徳を放棄するものなりとせり（陽、一七）。即ち注入教授を拒けて、開發教授、寧ろ自發教授を行ひしことに外ならず。勿論、智識には教師の與ふべくして生徒の考へて得らるべからざるもの之れあり。是れ學の必要なる所以なるが、更に教師の與ふべからずして、生徒をして自ら得せしむる思の必要あるものあり。されば生徒の思考作用を催さんが爲め、ソクラテースは自ら無知を告白して、生徒をして既得の知を集め、之れを比較せしめて遂に眞知を發明するの方術を行ひ、之れを其の母の産婆の業と比べて、智識の産婆を以て自ら任じたりき。孔子も亦自ら無知なりとして、鄙人の心の隅々を叩きて眞知を發明するに至らしめたり（罕、八）。眞に、其の心に既に或る程度の觀念の矛盾ありて、其の解決に惑ふ者に非れば、有りがたき眞理の提示も猫に小判の怨なき能はず。されば孔子は疑惑煩悶ありて、質問の力なき者に向つて強ひて提示することなかりき（述、八）（衛、一五）。此れ等の事を爲すに當りても、尙ほ對手により、時によりて宜しきを制し、子路の如きは之れを抑へ、冉有の如きは之れを進め（先、二三）、又た或る場合には速成方法も認めたり（憲、四七）。特に多くの教育者は、惡人に對しては一概に之れを憎むに専らにして、對手をして却つて自暴自棄に陥らしむることも之れあるを免れず。然るに孔子はたとへ不仁者にせよ、之れを疾むこと過甚なれば亂するに至るを知る（泰、一〇）。社會に於ける惡人の惡

は、譬へば吾が身の腫れ物の如し。悪しきものに相違なきも、亦た吾が身のものとの注意なくば、根治は困難なり。孔子は即ち惡も亦た一種社會的のものとの幾微を察したるなり。教育者としての聰明驚くべきものなくばあらざるなり。唯だ孔子が原壤に於けるが如く、體罰を用ゐしことも之れありしや否や、「憲、四六」の章意は之れを明確にしがたきも、却つて之れを親愛の行動と解する者あるも、亦た道理なきに非るを見る。さればこそ最高弟顔回が、夫子は循々然として善く人を誘ひ、博文約禮罷んとするも罷むる能はず、我をして其の全力を盡さしめ、夫子てふ高貴なる目標は、判然たるやう見ゆるも、行きても行きても其の所に到り著く能はず(罕、一一)と讚嘆せしなれ。

此くて孔子は、何人に對しても之れを善化せしめ得ざる者はなし(衛、三八)との信念を有したるが如し。されど教育には先行の條件なきやといふに、富は即ち其れなりとの考も之れありたるが如し(路、九)。何れにせよ、教育の効果は著しきものあり(陽、四)。唯だ其の實効の現はるる時期に至りては、事と人によりて異なるは勿論、社會上國家上に大變革を來さしむるに至りては、固より之れを明確にしがたきに似たり。此れ「路、一〇、一一、一二」の解釋に就ては異論紛々たる所以ならん。

### 第四篇 對 他

#### 1 父 母 (諸徳表中「孝弟」の部を見よ)

#### 2 友

學、一 子曰……有朋自遠方來、不亦樂乎。  
 同、四 曾子曰、吾日三省吾身……與朋友交、而  
 不信乎。  
 同、七 子夏曰、賢賢易色、事父母能竭其力、  
 事君能致其身、與朋友交、言而有信、雖  
 曰未學、吾必謂之學矣。  
 同、八 子曰……無友不如己者。  
 里、二 子游曰……朋友數、斯疎矣。  
 公、七 子曰、晏平仲善與人交、久而敬之。  
 同、三 子曰……匿怨而友其人、左丘明恥之、丘  
 亦恥之。  
 公、二 子曰……子路曰、願車馬、衣輕裘、與朋友共、  
 敝之而無憾、顏淵曰、願無伐善、無施  
 勞、子路曰、願聞子之志、子曰、老者安之、  
 朋友信之、少者懷之。  
 罕、二 子曰、主忠信、毋友不如己者。  
 顏、三 子貢問友、子曰、忠告而善道之、不可則  
 止、毋自辱焉。  
 同、二 曾子曰、君子以文會友、以友輔仁。  
 路、六 子曰、切切偲偲怡怡如也、可謂士矣、朋友  
 切切偲偲、兄弟怡怡。  
 季、四 孔子曰、益者三友、損者三友、友直、友諒、

友多聞、益矣、友便辟、友善柔、友便佞、損矣。

所不容、我之不賢與、人將拒我、如之何其拒人也。

張、三 子夏之門人、問交於子張、子張曰、子夏云、

張、二 子夏曰、君子信、而後勞其民、未信、則以

何、對曰、子夏曰、可者與之、其不可者拒

爲厲己也、信而後諫、未信、則以爲謗

之、子張曰、異乎吾所聞、君子尊賢而容

己也。

衆、嘉善而矜不能、我之大賢與、於人何

朋友との交は兄弟の其れと異れり。たとへ離れんと欲するも離れ能はざる縁あるは兄弟なり。故に兄弟に對しては、和樂を主として其の感情に逆はざるを可しとす。然るに朋友は心合へば交り、心合はざれば離る。相僞らず、互に眞實を以て相對して、相愛すればこそ友たるなり。即ち、信こそ其の交の骨髓なり。

信なくば友愛は成立せず。信なくして友たるらしくするは、不道德も亦た甚し、最も反省せざるべからず。故に曾子の三省中之れある所以なり(學、四)。又た子夏の之れを重んじたる所以(學、七)、又た孔子の本願にてもありし所以(公、一四)、怨ありながら之れ無きが如くして友たるらしくするは恥づべきことなり(公、二三)。

朋友は互に信を以て結びつく。其の結びつかしむるものは何なるべきか。曾子は文を以て友を會

し、友を以て仁を輔くといふ(顔、二四)。是れ如何にも道德的交際なるが、世には此かる嚴肅なる結び付きのみはあらずして、或は詩歌を以て、或は狩獵を以て、或は遊戯を以てする等、苟くも相樂しみ得る所あれば、其所に友情の發露を見る。唯だ孔門にありては、一に道德の實行を主眼とするが故に、然か言へるのみ。人々は此かる交際を窮屈視すれども、此くては向上的修養と云ふべからず。寧ろ己れよりも徳の高き人を友とすることこそ肝要なりとす(學、八)(罕、二四)。普通人は氣易く面白き人をこそ友とせんと願ふものなれども、「便辟、善柔、便佞を友とするは損なり」(季、四)として拒けられたり。此くて孔門の友が、如何に道學先生的なりしを思ふべきなり。

唯だ子夏が可なる者は之れに與し、不可なる者は之れを拒くと言ひしを駁して、子張は先方が賢ければ固より我れ之れを尊ぶべく、賢からざれば其の不能を矜れむ。我れ賢なれば、彼れ固より我れを容るべく、我れ賢ならざれば彼れ我れを拒くべければ、人を拒くる必要なしと曰へり(張、三)。されど惡友は之れを憐れむべしと雖も、之れに近づきて其の害を受けざるを得るは、大人のことにして、未熟者の爲し得べき所に非ず。子張は聊か勝を求むるの失あるを免れず。

友愛は人々相互信實を以て交りながら、其の間自ら生じ來る美はしき感情なり。されば其の發露は自然自由ならざるべからずして、強要を許さざるものあり。是れ故に、信實のみが友愛發露の條



件にあらずして、人々各自の内面に、一種共鳴する或る物無かるべからず。たとへ其の或る物有りとするも、其の有る程度は幾何なりや。我れに多くとも、彼れに少き場合は我れ如何に之れを希望するも、彼の友愛は求め得べからざるのみならず、彼れは却つて馴れ近づき過ぎたりとして、我れを輕蔑すべし。即ち數々すれば斯に疎んぜらるるなり(里、二六)。朋友に近づくは最も苦心を要す。もし此の苦心を拂はず、輕々に相互の認識不足より、發露せる友情の如きは、忽ち雲散霧消するを常とす。然るに相互の正確なる認識に基きて、生じたる同情は、何日までも渝ることなし。是れ晏子の敬の推稱せらるる所以なり(公、一六)。苦心を拂つて後、一旦之れを贏ち得たる友愛は最も貴重なり。然るに遠く離れたる人にして、何等かの機縁によりて、蔭ながら友情を有ちたる者ありて、不意に訪問する如きことも之れなきにあらず。然る場合の愉快は亦た格別なることを待たず(學、一)。論語の友に於ける認識は孟子に及ばず。孟子は友たるに必要な條件として彼我の平等を説けり。即ち友とは、貴を挾まず、長を挾まずして友たりとしたり。是れ眞に然り。友たるの有り難さ、樂しさは其の我れを壓迫せざるに基く。彼れと我れとは、同一水準上に立つのみならず、同情を以て相合一するに至る。故に友情の結果は、彼れの物我れの物の區別を没するに至る。子路が車馬輕裘も朋友と共にして之れを敝るも憾みなしといふ所以なり(公、二六)。

肉親たらずして、時に肉親以上の親愛ある者は友なり。友を有するの幸福知るべきなり。されば友の長短、徳不徳は亦た我れの長短、徳不徳なれば、もし友に過惡ある場合、之れを諫めざるべからず。されど此所に人情の弱點として、無意識の間に、我れの優越感、或は私利私欲等の侵入することあり。然る場合彼れも亦た我れに疑念を抱くを免れず。彼れの我れを信ぜざるに、我れが敢て諫むれば、彼れは謗となす(張、一〇)。又た友に過惡あれば忠告して善導するを以て道とすと雖も、或る限度に至れば、友の我れに聽かざることあり。然る場合尙ほ強ひて諫むれば、彼れは怒りて我れを辱しむることあり得べければ、是れ亦た注意を要す(顔、二四)とせられたり。

3 女 (妻、婦、母)

學、七 子夏曰、賢<sub>レ</sub>賢易<sub>レ</sub>色、事<sub>二</sub>父母<sub>一</sub>能竭<sub>二</sub>其力<sub>一</sub>。

爲、六 孟武伯問<sub>レ</sub>孝、子曰、父母唯其疾之憂。

里、八 子曰、事<sub>二</sub>父母<sub>一</sub>幾諫、見<sub>二</sub>志不<sub>レ</sub>從、又敬不<sub>レ</sub>違、勞而不<sub>レ</sub>怨。

同、元 子曰、父母在、不<sub>レ</sub>遠游、游必有<sub>レ</sub>方。

同、三 子曰、父母之年、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>知也、一則以喜、

一則以懼。

公、一 子謂<sub>二</sub>公冶長<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>妻也、雖<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>縲紲之中<sub>一</sub>、非<sub>二</sub>

其罪<sub>一</sub>也、以<sub>二</sub>其子<sub>一</sub>妻<sub>レ</sub>之。

同、二 子謂<sub>二</sub>南容<sub>一</sub>、邦有<sub>レ</sub>道不<sub>レ</sub>廢、邦無<sub>レ</sub>道免<sub>二</sub>於刑

戮<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>其兄之子<sub>一</sub>妻<sub>レ</sub>之。

雍、四 子華使<sub>二</sub>於齊<sub>一</sub>、冉子爲<sub>二</sub>其母<sub>一</sub>、請<sub>レ</sub>粟。

泰、二 孔子曰、才難、不其然乎、唐虞之際、於斯 陽、三 子曰、唯女子與小人、爲難養也、近之則

爲盛、有婦人焉、九人而已。

不孫、遠之則怨。

先、六 南容三復白圭、孔子以其兄之子妻之。

長幼

憲、六 子曰、管仲相桓公、……豈若匹夫匹婦之爲

公、二 顏淵季路侍、……子路曰、願聞子之志、子曰、

諒也、自經於溝瀆、而莫之知也。

老者安之、朋友信之、少者懷之。

季、四 邦君之妻、君稱之曰夫人、夫人自稱曰小

陽、九 子曰、小子何莫學夫詩、

童、邦人稱之曰君夫人、稱諸異邦曰寡

微、七 子路曰、不仕無義、長幼之節、不可廢也、

小君、異邦人稱之亦曰君夫人。

君臣之義、如之何其廢之。

陽、三 子曰、(宰)予之不仁也、子生三年、然後免

張、三 子游曰、子夏之門人小子。

於父母之懷、夫三年之喪、天下之通喪也、予

堯、一 (湯)曰、予小子履。

也、有三年之愛於其父母乎。

當時の社會的秩序に於て女子の地位は未だ認められず。一般に女子は賤しめられたり(陽、二五)。随つて人の子としての女子は、父の意志の儘に嫁せしめられたり(公、一、二)(先、六)。唯だ母としては相當の尊敬を拂はれたること、父母と熟字して、父と同格に取扱はれたるを以ても之れを知り得べし。是れ原則としては賤しき女子も、其の實際上の功績によりて認識を得るに至りしものならん。されば「君夫人」が一定の尊敬を拂はれたる(季、一四)如く、各の家庭にありても、實際上母の地位

は高きものもありしならんと雖も、唐虞の際にありしといふ亂臣十人の中、一人の婦人あり(泰、二〇)といはれたるは、例外といふの外なからん。

長幼の序も、亦た確然嚴肅なるものなりしは言を待たず。幼者に對する敬愛は、未だ甚だ明らかならずと雖も、流石に孔子は之れに對する愛情を有したり(公、二四)。是れ特に孔子の私願なるを見れば、當時普通人になかりしを知るあり。されど此の思想やがて禮記に至りて、妻と子とに對する愛敬論に導きたるものならん。哀公問に曰ふ、「孔子遂言曰、昔三代明王之政、必敬其妻子、也有道、妻也者親之主也、敢不敬與、子也者親之後也、敢不敬與。」と。唯だ此の「孔子」は、論者の孔子に外ならず。

尙ほ此所に注意すべきは、論語に夫婦關係に就ての教訓なきことなり。書經の舜典には、五典或は五教の語あり。之を孔傳にては、左傳の父義、母慈、兄友、弟恭、子孝として解釋せしも、孔傳の僞なるは固よりのこと、書經の製作年代さへ疑はしければ暫らく措くとして、孟子は始めて五倫を説き、「父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信。」(滕文)と爲せり。

されば孔子時代には未だ立てられざりし夫婦間の道德が、孟子に至る迄の間に唱へらるるに至りしと見ゆ。されど有別主義は、夫婦の間にのみ限られず、更に推し廣められて男女一般の間に及ぼさ

れ、遂に嚴重不自然なる規定が支那に成りしも、是れ其の初めに無かりしことなるを知るべきなり。

4 祖先 鬼神 (葬、喪、齊、祭)

葬

爲、五 孟懿子問孝、……子曰、生事之以禮、死葬之以禮、祭之以禮。

不可徒行也。

先、二 顏淵死、門人欲厚葬之、子曰、不可、門人厚葬之、子曰、回也視予猶父也、予不得視猶子也、非我也、夫二三子也。

憲、四

子張曰、書云、高宗諒陰、三年不言、何謂也、子曰、何必高宗、古之人皆然、君薨、百官總已、以聽於冢宰、三年。

視猶子也、非我也、夫二三子也。

陽、三

宰我問、三年之喪、期已久矣、君子三年不爲禮、禮必壞、三年不爲樂、樂必崩、舊穀既沒、新穀既升、鑽燧改火、期可已矣、子曰、食夫稻、衣夫錦、於女安乎、曰、安、女安則爲之、夫君子之居喪、食不甘、聞樂不樂、居處不安、故不爲也、今女安則爲之、宰我出、子曰、予之不仁也、子生三年、然後免於父母之懷、夫三年之喪、天下之通喪也、予也有三年之愛於其父母乎。

喪

佾、四 子曰……喪與其易也、寧戚。

同、二 子曰、居上不寬、爲禮不敬、臨喪不哀、吾何以觀之哉。

述、九 子食於有喪者之側、未嘗飽也。

先、八 顏淵死、顏路請子之車以爲之槨、子曰、才不才、亦各言其子也、鯉也死、有棺而無槨、吾不以爲之槨、以吾從大夫之後、

張、一 子張曰……祭思敬、喪思哀。

張、一

子張曰……祭思敬、喪思哀。

張、二 子游曰、喪致乎哀而止。

同、一 曾子曰、吾聞諸夫子、人未有自致者也、必也親喪乎。

齊

佾、六

季氏旅於泰山、子謂冉有曰、女弗能救與、對曰、不能、子曰、嗚呼、曾謂泰山不如林放乎。

述、三 子之所慎、齊、戰、疾。

罕、一〇 子見齊衰者、冕衣裳者、與替者、見之雖少必作、過之必趨。

少必作、過之必趨。

鄉、七 齊必有明衣、布、……齊必變食、居必遷坐。

同、五 子見齊衰者、雖狎必變。

祭

同、三 哀公問社於宰我、宰我对曰、夏后氏以松、殷人以柏、周人以栗、曰、使民戰栗。

學、九 曾子曰、慎終追遠、民德歸厚矣。

爲、五 孟懿德問孝、……子曰、生事之以禮、死葬

張、一 子張曰……祭思敬、喪思哀。

葬、喪、齊、祭 後世或は古禮を破らんとする傾向ある者、或は祖先崇拜の古俗を有し、殆んど之れを以て其の唯一の信仰と爲したる支那民族中に於て、人の死に關し、又た死後に關する儀禮の重んぜられたるは當然なり。而して孔子はよく之れを保存せんとせり(爲、五)。されば、古禮に従へども、誠意の伴はざる者(佾、六、一二)に對しては、嚴しく之れを戒しめたること固よりなり。

されど古禮を其の儘後世に行はんとするは、時勢の變化を知らざるの謬なきか。孔子も亦た葬禮は成るべく簡にせんとしたるが如きも(先、八、一二)、亦た餘りに悠長なる古禮を其の儘是認したるが如き失ありしに似たり(憲、四三)(陽、二二)。有喪者の側に於て食すれば飽くことなき如き(述、九)、齊衰者瞽者等を見れば必らず起ち、其れ等を通り過ぐれば必らず趨る如き(罕、一〇)と雖も、聊か作爲に涉るの趣なきか。儒教の型式に拘泥するは故ありといふべし。此れ等宗教的側面は別に之れを考察せんとす。

5 師 (儒) 弟

爲、二 子曰、溫故而知新、可<sub>レ</sub>以爲<sub>レ</sub>師矣。

述、三 子曰、若<sub>レ</sub>聖與<sub>レ</sub>仁、則吾豈敢、抑爲<sub>レ</sub>之不<sub>レ</sub>厭、

雍、三 子謂<sub>レ</sub>子夏曰、女爲<sub>レ</sub>君子儒、無<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>小人儒。

誨人不<sub>レ</sub>倦、則可<sub>レ</sub>謂<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>爾已矣、公西華曰、

述、二 子曰、默而識<sub>レ</sub>之、學而不<sub>レ</sub>厭、誨人不<sub>レ</sub>倦、

正唯、弟子不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>學也。

何有<sub>レ</sub>於我<sub>レ</sub>哉。

罕、三 子疾病、……且予與<sub>レ</sub>其死<sub>レ</sub>於臣之手<sub>レ</sub>也、寧死<sub>レ</sub>

同、七 子曰、自<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>束脩<sub>レ</sub>以上、吾未<sub>レ</sub>嘗無<sub>レ</sub>誨焉。

於二三子之手<sub>レ</sub>乎、且予縱不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>大葬、予死<sub>レ</sub>

同、三 子曰、三人行、必有<sub>レ</sub>我師<sub>レ</sub>焉、擇<sub>レ</sub>其善者<sub>レ</sub>、而

於道路<sub>レ</sub>乎。

從<sub>レ</sub>之、其不善者而改<sub>レ</sub>之。

先、三 德行顏淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓、言語宰我、

同、三 子曰、二三子、以<sub>レ</sub>我爲<sub>レ</sub>隱乎、吾無<sub>レ</sub>隱乎爾、

子貢、政事冉有、季路、文學子游、子夏。

吾無<sub>レ</sub>行而不<sub>レ</sub>與<sub>レ</sub>二三子<sub>レ</sub>者、是丘也。

同、九 顏淵死、子曰、噫、天喪<sub>レ</sub>予、天喪<sub>レ</sub>予。

先、二 顏淵死、子哭<sub>レ</sub>之慟、從者曰、子慟矣、曰、有<sub>レ</sub>

衛、壹 子曰、當<sub>レ</sub>仁、不<sub>レ</sub>讓<sub>レ</sub>於師。

慟乎、非<sub>レ</sub>夫人之爲<sub>レ</sub>慟、而誰爲。

張、三 衛公孫朝、問<sub>レ</sub>於子貢曰、仲尼焉學、子貢曰、

同、一七 季氏富<sub>レ</sub>於周公、而求也爲<sub>レ</sub>之聚斂、而附<sub>レ</sub>益<sub>レ</sub>之、

文武之道、未<sub>レ</sub>墜<sub>レ</sub>於地、在<sub>レ</sub>人、賢者識<sub>レ</sub>其大

子曰、非<sub>レ</sub>吾徒<sub>レ</sub>也、小子鳴<sub>レ</sub>鼓而攻<sub>レ</sub>之可也。

者、不<sub>レ</sub>賢者識<sub>レ</sub>其小者、莫<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>文武之道

同、三 子畏<sub>レ</sub>於匡、顏淵後、子曰、吾以<sub>レ</sub>女爲<sub>レ</sub>死矣、

焉、夫子焉不<sub>レ</sub>學、而亦何常師之有。

曰、子在、回何敢死。

右解説批評

人を教ふるを職とする儒は、一種の師なり。(但だ「衛、四一」の師は樂師にして瞽者なり)而して教を受くる者は弟子なり。されど師も弟子も、共に不真面目なる者を生ずるは自然の數なり。従つて此に君子儒と小人儒との別を生ず(雍、一三)。孔子の其の弟子に臨むや、苟くも道を學ばんとする志ある者(述、七)には、親切に之れを教へて倦まざる親切あり(述、二、三三)。随つて親子の情も之れに及ばざる如き愛情其の間に生ず(述、二三)(罕、一二)(先、九、一〇、二三)。

されど此かる情愛も、凡て道によれるものにして、もし其れに反する場合には、愛する弟子も忌憚なく之れを詰責し(先、一七)、其れが爲めなる以上は、師にも讓る必要なし(衛、三五)とするの公正

さを有するものなり。是れ師弟愛の肉親愛と異なる所以なり。如何にせば師たるの資格を有し得べきか。其は修養問題にして、其の部門に於て之れを審にせり(爲、二)(張、三三)。唯だ「述、二二」は何人の解も明確なりと云ふべからず、深く詮索せずして可なり。

諸弟子 (五十音順)

- ア 有 若 (有子、子有)
- カ 高 柴 (字子羔)
- ク 顔 回 (字子淵)
- ケ 顔 由 (字季路)
- コ 琴 牢 (或琴張)(字子開)
- ク 一字子張 (顔孫師ト同視スルモ  
左ノアレド不  
右ノアレド不  
ルモノアレド不)
- 原 憲 (字子思)
- 言 偃 (字子游)
- 公西赤 (字子華)
- サ 公冶長 (字子長)
- 幸 予 (字子我)
- 漆雕開 (字子若)
- 司馬黎耕 (字子牛)
- 冉 耕 (字伯牛)
- 冉 求 (字子有)
- 顔孫師 (字子張)
- 冉 雍 (字仲弓)
- 曾 參 (字子輿)
- 曾 點 (字子皙)
- タ 澹臺滅明 (字子羽)
- 端木賜 (字子貢)
- 仲 由 (字子路・季路)
- 陳 亢 (字子元・子禽)
- ナ 南宮适 (字子容)
- 樊 須 (字子遲)
- 宓 不齊 (字子賤)
- 閔 損 (字子騫)
- 巫馬期 (字子期・或子旗)
- ト 商 (字子夏)

孔子の諸人物評

ア 晏平仲

公、七 子曰、晏平仲善與人交、久而敬之。

夷 逸

微、八 逸民伯夷、叔齊、虞仲、夷逸。

至焉而已矣。

禹

泰、六 子曰、巍巍乎、舜禹之有天下也、而不與焉。

同、三 子曰、禹吾無間然矣、非飲食、而致孝乎

鬼神、惡衣服、而致美乎黻冕、卑宮室、

而盡力乎溝洫、禹吾無間然矣。

カ 顔 淵

爲、九 子曰、吾與回言、終日不違如愚、退而省其私、亦足以發、回也不愚。

其私、亦足以發、回也不愚。

公、九 子謂子貢曰、女與回也孰愈、對曰、賜也何

敢望回、回也聞一以知十、賜也聞一以知

二、子曰、弗如也、吾與女弗如也。

雍、三 哀公問、弟子孰爲好學、孔子對曰、有顔回

者、好學、不遷怒、不貳過、不幸短命

死矣、今也則亡、未聞好學者也。

同、七 子曰、回也、其心三月不違仁、其餘則日月

雍、二 子曰、賢哉回也、一簞食、一瓢飲、在陋巷、人不堪其憂、回不改其樂、賢哉回也。

罕、三 子曰、語之而不惰者、其回也與。

同、三 子謂顔淵曰、惜乎、吾見其進也、未見其止也。

先、二 德行顔淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓。

同、四 子曰、回也、非助我者也、於吾言無所不悅。

同、七 季康子問、弟子孰爲好學、孔子對曰、有顔回者、好學、不幸短命死矣、今也則亡。

同、元 子曰、回也其庶乎、屢空。

公、一 子謂公冶長、可妻也、雖在縲絏之中、非其罪也、以其子妻之。

高 柴

先、六 柴也愚。

公叔文子

憲、二四 子問公叔文子於公明賈曰、信乎、夫子不言、不笑、不取乎、公明賈對曰、以告者過也、夫子時、然後言、人不厭其言、樂、然後笑、人不厭其笑、義、然後取、人不厭其取、子曰、其然、豈其然乎。

同、元 公叔文子之臣大夫僕、與文子同升諸公、子聞之曰、可以為文矣。

孔文子

公、五 子貢問曰、孔文子何以謂之文也、子曰、敏而好學、不恥下問、是以謂之文也。

公西赤

公、八 孟武伯問、赤也何如、子曰、赤也束帶立於朝、可使與賓客言也、不知其仁也。先、三 曾皙曰、唯赤則非邦也與、宗廟會同、非諸侯而何、赤也為之小、孰能為之大。

公子荆

以兵車、管仲之力也、如其仁、如其仁。

憲、六 子貢曰、管仲非仁者與、桓公殺公子糾不能死、又相之、子曰、管仲相桓公、霸諸侯、一匡天下、民到于今受其賜、微管仲、吾其被髮左衽矣、豈若匹夫匹婦之為諒也、自經於溝瀆而莫之知也。

箕子

微、一 箕子為之奴、孔子曰、殷有三仁。

堯

泰、六 子曰、大哉堯之為君也、巍巍乎、唯天為大、唯堯則之、蕩蕩乎、民無能名焉、巍巍乎、其有成功也、煥乎、其有文章。

蘧伯玉

憲、二 蘧伯玉使人於孔子、孔子與之坐而問焉、曰、夫子何為、對曰、夫子欲寡其過、而未也能也、使者出、子曰、使乎、使乎。

衛、六 子曰、君子哉蘧伯玉、邦有道則仕、邦

路、八 子謂衛公子荆、善居室、始有、曰、苟合矣、少有、曰、苟完矣、富有、曰、苟美矣。

處仲

微、八 ……謂處仲、夷逸、隱居放言、身中清、廢中權。

桓公

憲、六 子曰、齊桓公正而不謫。

管仲

脩、三 子曰、管仲之器小哉、或曰、管仲儉乎、曰、管氏有三歸、官事不攝、焉得儉、然則管仲知禮乎、曰、邦君樹塞門、管氏亦樹塞門、邦君為兩君之好、有反坫、管氏亦有反坫、管氏而知禮、孰不知禮。

憲、二 (或)問管仲、曰、人也、奪伯氏駢邑三百、飯疏食、沒齒無怨言。

同、七 子路曰、桓公殺公子糾、召忽死之、管仲不死、曰、未仁乎、子曰、桓公九合諸侯、不

無道則可卷而懷之。

言偃

先、二 文學子游、子夏。

左丘明

公、五 子曰、巧言令色、足恭、左丘明恥之、丘亦恥之、匿怨而友其人、左丘明恥之、丘亦恥之。

宰予

公、二 宰予晝寢、子曰、朽木不可雕也、糞土之牆、不可朽也、於予與何誅。

舜

泰、六 子曰、巍巍乎、舜禹之有天下也、而不與焉。

子桑伯子

雍、二 仲弓問子桑伯子、子曰、可也、簡、仲弓曰、居敬而行簡、以臨其民、不亦可乎、居簡而行簡、無乃大簡乎、子曰、雍之言然。

宓不齊

公、二 子謂子賤、君子哉若人、魯無君子者、斯焉取斯。

子文

公、元 子張問曰、令尹子文、三仕爲令尹、無喜色、三已之、無愠色、舊令尹之政、必以告新令尹、何如、子曰、忠矣、曰、仁矣乎、曰、未知、焉得仁。

申枨

公、二 子曰、吾未見剛者、或對曰、申枨、子曰、枨也慾、焉得剛。

史魚

衛、六 子曰、直哉史魚、邦有道如矢、邦無道如矢。

子產、子西

公、二 子謂子產、有君子之道四焉、其行己也恭、其事上也敬、其養民也惠、其使民也義。

憲、二 或問子產、子曰、惠人也、問子西、曰、彼哉、彼哉。

少連

微、八 謂柳下惠、少連、降志辱身矣、言中倫、行中慮、其斯而已矣。

冉伯牛

雍、二 伯牛有疾、子問之、自牖執其手、曰、亡之命矣夫、斯人也、而有斯疾也。

先、二 德行顏淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓。

冉求

公、八 孟武伯問、……求也何如、子曰、求也千室之邑、百乘之家、可使爲之宰也、不知其仁也。

雍、八 季康子問、……求也可使從政也與、曰、求也藝、於從政乎何有。

同、三 冉求曰、非不說子之道、力不足也。子曰、力不足者、中道而廢、今女畫。

用、山川其舍諸。

先、二 德行顏淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓。

路、二 仲弓爲季氏宰、問政。子曰、先有司、赦小過、舉賢才。

顓孫師

先、二 子貢問、師與商也孰賢、子曰、師也過、商也不及。

同、一 師也辟。

曾參

里、五 子曰、參乎、吾道一以貫之、曾子曰唯。

先、一 參也魯。

曾皙

先、二 ……點爾何如、鼓瑟希、鏗爾、舍瑟而作、對曰、異乎三子者之撰、子曰、何傷乎、亦各言其志也、曰、莫春者、春服既成、冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、風乎舞雩、詠而歸、夫子喟然歎曰、吾與點也。

先、二 政事冉有、季路。

同、二 季氏富於周公、而求也爲之聚斂、而附益之、子曰、非吾徒也、小子鳴鼓而攻之、可也。

同、二 求爾何如、對曰、方六七十、如五六十、求也爲之、比及三年、可使足民、如其禮樂、以俟君子、……子曰、……唯求則非邦也與、安見方六七十、如五六十、而非邦也者。

冉雍

公、五 或曰、雍也仁而不佞、子曰、焉用佞、禦人以口給、屢憎於人、不知其仁、焉用佞。

雍、一 子曰、雍也可使南面。

同、二 仲弓問子桑伯子、子曰、可也、簡、仲弓曰、居敬而行簡、以臨其民、不亦可乎、居簡而行簡、無乃大簡乎、子曰、雍之言然。

四對 他

臧文仲

公、一 子曰、臧文仲居蔡、山節藻梲、何如其知也。  
衛、三 子曰、臧文仲其竊位者與、知柳下惠之賢、而不與立也。

泰伯

泰、一 子曰、泰伯其可謂至德也已矣、三以天下讓、民無得而稱焉。

陳文子

公、一 子曰、……崔子弑齊君、陳文子有馬十乘、棄而違之、至於他邦、則曰、猶吾丈夫崔子也、違之、之二邦、則又曰、猶吾丈夫崔子也、違之何如、子曰、清矣、曰、仁矣乎、曰、未知、焉得仁。

端木賜

學、五 ……子貢曰、詩云、如切如磋、如琢如磨、其斯之謂與、子曰、賜也始可與言詩已矣、告諸往而知來者。

公、四 子貢問曰、賜也何如、子曰、女器也、曰、何器也、曰、瑚璉也。

同、三 子貢曰、我不欲人之加諸我也、吾亦欲無加諸人、子曰、賜也、非爾所及也。

雍、八 季康子問、……(子)曰、賜也達、於從政乎何有。

先、二 言語宰我、子貢。

同、九 子曰、……賜也不受命、而貨殖焉、億則屢中。

憲、三 子貢方人、子曰、賜也賢乎哉、夫我則不暇。張、三 叔孫武叔語、大夫於朝、曰、子貢賢於仲尼、……子貢曰、譬之宮牆、賜之牆也及肩、窺見室家之好、夫子之牆數仞、不得其門而入、不見宗廟之美、百官之富、得其門者或寡矣、夫子之云、不亦宜乎。

仲由

公、七 子曰、道不行、乘桴浮于海、從我者其由與乎、子路聞之喜、子曰、由也好勇過

我、無所取材。

公、八 孟武伯問、子路仁乎、子曰、不知也、又問、子曰、由也、千乘之國、可使治其賦也、不知其仁也。

雍、八 季康子問、仲由可使從政也與、子曰、由也果、於從政乎何有。

述、二 子路曰、子行三軍、則誰與、子曰、暴虎馮河、死而無悔者、吾不與也、必也臨事而懼、好謀而成者也。

罕、三 子曰、衣敝緼袍、與衣狐貉者立而不恥者、其由也與。

先、二 政事冉有、季路。

同、三 閔子侍側、閔如也、子路行行如也、冉有子貢侃侃如也、子樂、曰、若由也、不得其死然。

同、五 子曰、由之瑟、奚爲於丘之門、門人不敬也。子路、子曰、由也升堂矣、未入於室也。

先、六 由也喭。

同、四 季子然問、仲由冉求可謂大臣與。子曰、……所謂大臣者、以道事君、不可則止、今由與求也、可謂具臣矣、曰、然則從之者與、子曰、弑父與君、亦不從也。

同、三 ……子路率爾而對曰、千乘之國、攝乎大國之間、加之師旅、因之以饑饉、由也爲之、比及三年、可使有勇且知方也、夫子哂之、……曾皙曰、……夫子何哂由也、曰、爲國以禮、其言不讓、是故哂之。

顏、三 子曰、片言可以折獄者、其由也與、子路無宿諾。

甯武子

公、三 子曰、甯武子、邦有道則知、邦無道則愚、其知可及也、其愚不可及也。

南宮适

公、二 子謂南容、邦有道不廢、邦無道免於刑



戮、以其兄之子妻之。

先、六 南宮三復曰：「白圭，孔子以其兄之子妻之。」

憲、六 南宮适問於孔子曰：「羿善射，昇盪舟，俱不得其死，然禹稷躬稼而有天下，夫子不答，南宮适出，子曰：「君子哉若人，尚德哉若人。」

ハ 伯夷、叔齊

公、三 子曰：「伯夷、叔齊，不念舊惡，怨是用希。」

述、五 子貢曰：「……伯夷、叔齊，何人也，曰：古之賢人也，曰：怨乎，曰：求仁而得仁，又何怨。」

微、八 子曰：「不降其志，不辱其身，伯夷叔齊與。」

微、一 微子去之，……比干諫而死，孔子曰：「殷有三仁。」

閔子騫

先、二 德行顏淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓。

先、五 子曰：「孝哉閔子騫，人不閒於其父母昆弟之言。」

同、四 魯人爲長府，閔子騫曰：「仍舊貫，如之何，何必改作？」子曰：「夫人不言，言必有中。」

文公

憲、六 子曰：「晉文公譎而不正。」

微生高

公、四 子曰：「孰謂微生高直，或乞醢焉，乞諸其鄰，而與之。」

卜商

佶、八 子夏問曰：「巧笑倩兮，美目盼兮，素以爲絢兮，何謂也？」子曰：「繪事後素，曰：禮後乎，子曰：「起予者商也，始可與言詩已矣。」

先、二 文學子游、子夏。

同、六 子貢問：「師與商也孰賢？」子曰：「師也過，商也不及。」

マ 孟之反

雍、五 子曰：「孟之反不伐，奔而殿，將入門，策其馬，曰：「非敢後也，馬不進也。」

孟公綽

憲、三 子曰：「孟公綽爲趙魏老，則優，不可以爲滕薛大夫。」

ラ 柳下惠

諸人の孔子評

學、〇 子貢曰：「夫子溫良恭儉讓，以得之。」

佶、二 儀封人請見，曰：「君子之至此，於斯也，吾未嘗不得見也，從者見之，出曰：「二三子，何患於喪乎，天下之無道也久矣，天將以夫子爲木鐸。」

罕、二 達巷黨人曰：「大哉孔子，博學而無所成名。」

同、二 顏淵喟然歎曰：「仰之彌高，鑽之彌堅，瞻之在前，忽焉在後，夫子循循然善誘人，博我以文，約我以禮，欲罷不能，既竭」

微、八 謂柳下惠，少連，降志辱身矣，言中倫，行中慮，其斯而已矣。

靈公

憲、二 子言衛靈公之無道也，康子曰：「夫如是，奚而不喪？」孔子曰：「仲叔圉治賓客，祝鮀治宗廟，王孫賈治軍旅，夫如是，奚其喪？」

吾才，如有所立卓爾，雖欲從之，末由也已。

憲、三 子曰：「君子道者三，我無能焉，仁者不憂，智者不惑，勇者不懼，子貢曰：「夫子自道也。」

張、三 叔孫武叔語大夫於朝曰：「子貢賢於仲尼。」子服景伯以告子貢，子貢曰：「譬之宮牆，賜之牆也及肩，窺見室家之好，夫子之牆也，數仞，不得其門而入，不見宗廟之美，百官之富，得其門者或寡矣，夫子之云，不」

亦宜乎。

張、二、叔孫武叔毀仲尼、子貢曰、無以爲也、仲尼不可毀也、他人之賢者丘陵也、猶可踰也、仲尼日月也、無得而踰焉、人雖欲自絶、其何傷於日月乎、多見其不知量也。

子乎、子貢曰、君子一言以爲知、一言以爲不知、言不可不慎也、夫子之不可及也、猶天之不可階而升也、夫子之得邦家者、所謂立之斯立、道之斯行、綏之斯來、動之斯和、其生也榮、其死也哀、如之何其可及也。

孔子の自評

述、一、子曰、述而不作、信而好古、竊比於我老彭。

吾無行而不與二三子者、是丘也。

同、二、子曰、加我數年、五十以學易、可以無大過矣。

述、三、子曰、文、莫吾猶人也、躬行君子、則吾未之有得。

同、六、葉公問孔子於子路、子路不對、子曰、女奚不曰、其爲人也、發憤忘食、樂以忘憂、不知老之將至云爾。

同、元、子曰、我非生而知之者、好古敏以求之者也。

述、三、子曰、二三子、以我爲隱乎、吾無隱乎爾、

微、八、……子曰、不降其志、不辱其身、伯夷、叔齊與、謂柳下惠、少連、降志辱身矣、言中倫、行中慮、其斯而已矣、謂虞仲、夷逸、隱居放言、身中清、廢中權、我則異於是、無可、無不可。

故藝。

罕、七、子曰、吾有知乎哉、無知也、有鄙夫、問於我、空空如也、我叩其兩端而竭焉。

憲、三、子曰、不怨天、不尤人、下學而上達、知我者其天乎。

我者其天乎。

6 價值より見たる人

人の高下を示したる者としては、聖、賢、君子、士、大人、善人、成人等の別を數へ得べし。されど此の内上の四の外、下の三は特別の場合に論及されたるのみ。此かる價值を現はす人の名稱も、もと種々の側面より見て、種々の時に爲されたるものにして、偏成的に成立するを常とす。例へば物的の量より見て、大事業を爲したるを讚嘆して大人と云ひ、或は單に感心すべき行爲を爲したるを善人と云ひ、又た然る讚辭の若干存する上は、衆美を兼ねたる成人等の語の生じ來るも自然にして、又た相互間の比較を現はす必要は次第に感ぜらるるに至るなり。今論語中、單に特別の場合に現はれたる語より始めて、一應其の意義を尋ぬべし。

聖

雍、三 子貢曰、如有博施於民、而能濟衆、何如、可謂仁乎、子曰、何事於仁、必也聖乎、堯舜其猶病諸。

述、三 子曰、聖人、吾不得而見之也矣、得見君子者、斯可矣。

同、三 子曰、若聖與仁、則吾豈敢、抑爲之不厭、誨人不倦、則可謂云爾已矣、公西華曰、正唯、弟子不能學也。

罕、六 大宰問於子貢曰、夫子聖者與、何其多能也、子貢曰、固天縱之將聖、又多能也。

季、八 孔子曰、君子有三畏、畏天命、畏大人、畏聖人之言。

張、三 ……子夏聞之曰……君子之道、孰先傳焉、孰後倦焉、譬諸草木區以別矣、君子之道、焉可誣也、有始有卒者、其惟聖人乎。

賢

學、七 子夏曰、賢、賢易色。

里、七 子曰、見賢思齊焉、見不賢而內自省也。

雍、二 子曰、賢哉回也、一簞食、一瓢飲、在陋巷、人不堪其憂、回不改其樂、賢哉回也。

述、四 子貢曰、……伯夷、叔齊何人也、(子)曰、古之賢人也。

憲、三 子曰、不逆詐、不億不信、抑亦先覺者、是賢乎。

同、三 賢者辟世、其次辟地。

士

里、九 子曰、士志於道、而恥惡衣惡食者、未足與議也。

泰、七 曾子曰、士不可不弘毅、任重而道遠、仁以爲己任、不亦重乎、死而後已、不亦遠乎。

路、二 子貢問曰、何如斯可謂之士矣、子曰、行己有恥、使於四方、不辱君命、可謂之士

矣、曰、敢問其次、曰、宗族稱孝焉、鄉黨稱弟焉、曰、敢問其次、曰、言必信、行必果、硜硜然小人哉、抑亦可爲次矣、曰、今之從政者何如、子曰、噫、斗筭之人、何足算也。

路、三 子路問曰、何如斯可謂之士矣、子曰、切切、惓惓、怡怡如也、可謂士矣、朋友切切、兄弟怡怡。

憲、三 子曰、士而懷居、不足以為士矣。

張、一 子張曰、士見危致命。

善人

述、三 子曰、聖人吾不得而見之矣、得見君子者、斯可矣、子曰、善人吾不得而見之矣、得見有恆者、斯可矣、亡而爲有、虛而爲盈、約而爲泰、難乎有恆矣。

先、三 子張問善人之道、子曰、不踐跡、亦不入於室。

路、二 子曰、善人爲邦百年、亦可勝殘去殺矣、誠哉是言也。

同、三 子曰、善人教民七年、亦可以即戎矣。

大人

季、八 孔子曰、君子有三畏、畏天命、畏大人、畏聖人之言。

成人

憲、三 子路問成人、子曰、若臧武仲之知、公綽之不欲、卞莊子之勇、冉求之藝、文之以禮樂、亦可爲成人矣、曰、今之成人者、何必然、見利思義、見危授命、久要不忘平生之言、亦可爲成人矣。

イ聖

論語正義は大戴禮を引て曰く、「所謂聖人者、知通乎大道、應變而不窮、能測萬物

之情性<sub>二</sub>者也。」とす。是れ聖人は通ぜざる所なし、能く己れを成し物を成すを言ふなり。朱子曰く、「仁以<sub>レ</sub>理言、通乎上下、聖以<sub>レ</sub>地(位)言、則造<sub>二</sub>其極<sub>一</sub>之名也。」仁齋曰く、「至誠之徳、無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>達之謂<sub>レ</sub>聖、蓋聖大而化之謂、而仁者聖中之大徳也。」徂徠曰く、「聖人作者、有<sub>二</sub>聰明睿知之徳<sub>一</sub>、……夫仁人可<sub>二</sub>學而能<sub>一</sub>焉、如<sub>二</sub>聖人<sub>一</sub>、聰明睿知之徳、稟<sub>二</sub>諸天<sub>一</sub>、豈可<sub>レ</sub>與乎。」と。

何れの解釋よりするも聖は人間最上の地位なること明らかなり。されば仁は各人の努力の範圍内にある徳とせらるるに反し、聖は然らずして更に天賦に恵まれることを要す。徂徠の解最も明白なり。但だ之れを必らず作者と爲さんとするは其の餘りに原始的意義に拘泥するを見る。此くて聖人とは道德的天才なり。漫りに世に見はれざる(述、二五)道德的權威者なり(季、八)。仁知の極にありて(張、一二)、博施濟衆の大業を成就するものなり(雍、三〇)。孔子が聖人なるや否、彼れ自らは之れに當らずと雖も、弟子は夙に之れを認めたり(述、三三)(罕、六)。

口賢 鄭注に「賢、有<sub>二</sub>善行<sub>一</sub>也。」とし、説文に「多才也。」とす。聖賢と熟字したるは、易の鼎の卦に「大亨以養<sub>二</sub>聖賢<sub>一</sub>。」とある如し。此くて賢に善と知との二義ありて、聖の次位に置かれあはるは人の多く一致する所なり。而して事毎に人が我れを詐かすやと心配し、我れ裏切られずやと懸念せず、一般的に詐かれず、裏切られざる道を先づ知るを賢なりとする(憲、三三)如きは單に賢の

一側面といふべし。

ハ士 劉寶楠は曰ふ、「士は四民の首に居る、其の學を習ひ徳行道藝ある者、始めて出仕すれば亦た之れを士と謂ふ。」と。思ふに、何れの言葉にも、之れを現實的に言ふと、價值的に言ふとの別あり。即ち、士に就て言へば、當時出仕せる或る地位の士あり(里、九)(泰、七)(憲、三)(張、一)。又た同じ地位にある者の中にも、眞に士らしき士といふ其れあり(路、二〇、二八)。されど士らしき士の解釋は、人らしき人の如く、理想論の全體に關することなれば、當然複雑にして難解なる勿論にして、「路、二八」の孔子の解の如きも、一部分のものに外ならざるなり。

ニ善人 論語正義に、韓詩外傳を引て、善人は聖人の次と爲す。孔安國曰く、「善人は但だに舊跡を循追せざるのみならず、亦た少しく能く業を創めざるも、亦た聖人の奥室に入らず。」と。皇侃の疏に曰く、「善人之稱、亦上通<sub>二</sub>聖人<sub>一</sub>、下通<sub>二</sub>一分<sub>一</sub>。」と。徂徠は曰ふ、「聖人は本と開國先王之稱、善人亦た齊桓秦穆の倫なり。故に迹を踐ますと曰ふ、……是れ大作用有る者にして、亦た世に恆に有らず、豪傑の士管仲が輩の如き是れなり、故に得て之れを見ず。」と。

「述、二五」によれば、善人が有<sub>レ</sub>恆者以上なることは明らかなり。而して其の兩者の相違も亦た解し得るに似たり。而るに「先、二〇」の意義は頗る多義を容るるものにして、もし「迹を踐ます

んば、亦た室に入らず。」と讀まば、先王之道を行はずば其の堂奥に入る能はざることとなる。又たもし迹を踐まずとは、先王の道に循はず、自己の道を行くものとすれば、即ち管仲等の如くなる。而して其の先王の道の堂奥に入らざるは勿論なり。唯だ不<sub>レ</sub>踐<sub>レ</sub>迹<sub>レ</sub>こと、即ち創業が如何計り孔子によりて善きこととされたるや頗る疑はし。随つて皇侃の如く、聖人より部分的善を爲す者までを併稱するとせば、最も無難なれども、其れにては「述、二五」の如きは力なきものとならざるを得ず。「路、一一、二九」は、孔子が古言を引て之れを肯定せりとの註者の言なれど、或は然らん。されど此れにては、善人の政治なるものは甚だ効力の薄きが如くして、孔子の我れを用うる者あらば、期月にして奏効せん自信と一致せざるに似たり。されば此れ等の用語は、前後整合したる組織的言明に非ずとして、餘りに詮索に拘泥せざるを可とすべきなり。

ホ 大人 鄭注に大人とは、天子諸侯の政教を爲す者を謂ふとあるを引て、論語正義には賢徳の君を言ふとす。何晏は大人とは即ち聖人なりとす。我が邦の仁齋は徳望隆重一時の師表たる者とす。徂徠は「大人とは當世を以て言ふ(の聖人)、聖人とは開國の君なり、往世を以て言ふ(の大人)」とす。

是れ等が其の解釋なり。此れ何れも大業を成せる者、即ち君主を指す點相一致せり。唯だ此れには徳の意義の含まれあるや否や。又た含まれありとするも、其の度合如何等は不明なりとす。日本に於ても、「エライ人」は大事業を成せるを意味するも、其れが善良なるか否かは頗る曖昧なるとよく相似たり。獨り徂徠説にては、大即善となるも、此は其の固有の主張より來ることなり。後世の詮議立てによれば、大即善か否かの疑之れなきに非ずと雖も、少くとも古代に於ては、何れの國も政教は一致し、君と聖とは別ならざるを常とするを以て、君子が畏敬するものの一に大人あるべきは固より當然なりとす。即ち大人とは力と徳との大なる者に外ならざるなり。恐らく是れ古代普通の意義にして、易に「利<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>大人<sub>一</sub>」などある之れに外ならず。

へ 成人 論語正義には、説苑を引て成徳の人と爲す。朱子は、「成人とは、猶全人と言ふことし、成就する所有るの人を謂ふ。」とし、仁齋は、「……四子の長を兼ねるに非ず、偏を救ひ、闕を補へば、成人の名に當るに足る。」とし、徂徠は「古は二十にして冠して成人と曰ふ、則ち成人とは猶ほ成器といふがごとし。」とす。

右何れより見るも、成人とは今代語にて完全の人といふが如くならん。論語中唯だ一たび其の何たるやの質問ありて、孔子が之れに解答を與へたるものなるが、是れ固より大問題にして、簡単に盡すべきに非ず。孔子が知と、不欲と、勇と、藝とを有する四子を擧げ、更に之れに禮樂を以て文

るの一資格を加へて答へたるは、如何にも完全なるに似たれど、其は人力の及ぶ限りなるや否や疑はし。朱子の全人の難きを人に求むるの失あるは言を待たず。是れ仁齋の辨解ある所以なり。されど其の四子の長を兼ねるに非ずといふは可なるも、其の一子一子の偏を救ひ、闕を補ふとは、長を兼ねると如何計り相違するや不明なり。徂徠が人の個性を認めて其れに従つて完成を求めんとするは固より可し。されど其れ將た親切著實に之れが概念を與ふるは容易の業に非ず。是れ孔子にありても然らざるを得ず。恐らく孔子も一旦は四子の長に兼ねるに、禮樂の修養を以てして、至高至難の資格を以て之れに擬したりしが、其の架空性を悟り、改めて實行的、特に子路に即したる答を爲したるものならん。利を見て云々、久しき約束にも平生の言を忘れずなどは、一般的説明とは爲しがたし。論語中の單なる一章によりて、餘りに行き過ぎたる解釋を爲すは如何はしといふべし。

ト君子 論語正義は、禮記を引て、「君子とは人の成名なり。」とす。皇侃の疏に、「君子とは有徳之稱なり。」とし、又た「君子之稱は、上は聖人に通じ、下は片善に至る。」といふ。朱子は之を解して、「才徳衆に出る」を云ひ、仁齋も「有徳の通稱」としたるが、徂徠は之れを「民を治むる者の稱にして、大夫以上を包む、下に在りと雖も其の徳以て民に長たるに足る者は亦た之れを君子と謂ふ。」とす。蓋し上古に於ては知徳優秀なる者、同時に權力を得たり。是れ政教一致時代の聖人の原意にして

王者を意味せしならん。王者の下には、大夫、士の如きありて、是れ又た一般民衆とは區別されたる知徳の優秀者たりしを疑はず。故に徂徠の言ふが如く、聖人は創業者、即ち作者にして士君子ともに官位にある者をいふとも解し得べし。されど爲政者の定めたる貴賤、必らずも道德上の貴賤に非る時代の來るは自然の勢なり。換言、偏成的に生じたる聖賢は、次第に普遍的價值づけを受くるに至る。桀紂は王者なれども眞の聖者に非ず、又た桀紂を謳歌する士大夫は、眞の士君子に非ることともなるなり。而して一たび當路の權力者、及び其の配下が道德的に翻譯されて、王らしき王、士大夫らしき士大夫等の概念を生ずるに及べば、官等の如何は既に問題たらずして、問題は一に人らしき人とは何ぞやとなる。蓋し一貫の道の實現の程度によりて、上下の差あるまでにて、官位を以て相別つこと之れあらざればなり。荀子、徂徠等は聖賢士大夫等の古義を捉へるに於て正しきも、新義の發生を知らざるに於て謬まれり。若し夫れ實際の地位階級を離れて理想的に人の貴賤を論ぜんか、賢人も、君子も、士も、善人、成人等も、相區別するなきに至らざるを得ず。唯だ聖人は一段高位にありとせらるるのみ。今君子の概念によりて、孔子が如何に具體的なる理想人を説きしやを次に窺はんとす。

7 君子

本文紹介

學、一 子曰……人不知而不慍，不亦君子乎。  
 同、二 有子曰……君子務本，本立而道生，孝弟也者，其爲仁之本與。  
 同、八 子曰、君子不重，則不威，學則不固。  
 同、四 子曰、君子食無求飽，居無求安，敏於事，而慎於言，就有道而正焉，可謂好學也已。  
 爲、三 子曰、君子不器。  
 同、三 子貢問君子，子曰、先行，其言而後從之。  
 同、四 子曰、君子周而不比，小人比而不周。  
 同、七 子曰、君子無所爭，必也射乎，揖讓而升下，而飲，其爭也，君子。  
 同、四 儀封人請見曰、君子之至於斯也，吾未嘗

不得見也，……天將以夫子爲木鐸。  
 里、五 子曰……君子去仁，惡乎成名，君子無終食之間違仁，造次必於是，顛沛必於是。  
 同、〇 子曰、君子之於天下也，無適也，無莫也，義之與比。  
 同、二 子曰、君子懷德，小人懷土，君子懷刑，小人懷惠。  
 同、二 子曰、君子喻於義，小人喻於利。  
 同、四 子曰、君子欲訥於言，而敏於行。  
 公、二 子曰、子產有君子之道四焉，其行己也，恭，其事上也敬，其養民也惠，其使民也義。  
 雍、四 子曰……君子周急，不繼富。  
 同、三 子謂子夏曰、女爲君子儒，無爲小人儒。  
 同、六 子曰、質勝文則野，文勝質則史，文質彬彬，然後君子。

雍、二 宰我問曰、仁者雖告之曰、井有仁焉，其從之也，子曰、何爲其然也，君子可逝也，不可陷也，可欺也，不可罔也。  
 述、三 子曰、聖人吾不得而見之矣，得見君子者，斯可矣。  
 同、三 子曰、文，莫吾猶人也，躬行君子，則吾未之有得。  
 同、三 子曰、君子坦蕩蕩，小人長戚戚。  
 泰、六 曾子曰、可以託六尺之孤，可以寄百里之命，臨大節而不可奪也，君子人與，君子人也。  
 罕、七 子聞之曰、大宰知我乎，吾少也賤，故多能鄙事，君子多乎哉，不多也。  
 同、四 子曰、居九夷，或曰、陋如之何，子曰、君子居之，何陋之有。  
 先、一 子曰、先進於禮樂，野人也，後進於禮樂，君子也，如用之，則吾從先進。

顏、四 司馬牛問君子，子曰、君子不憂不懼，曰、不憂不懼，斯謂之君子矣乎，子曰、內省不疚，夫何憂何懼。  
 同、五 子夏曰、商聞之矣，死生有命，富貴在天，君子敬而無失，與人恭而有禮，四海之內，皆兄弟也，君子何患乎無兄弟也。  
 同、八 棘子成曰、君子質而已矣，何以文爲，子貢曰、惜乎夫子之說君子也，駟不及舌，文猶質也，質猶文也，虎豹之鞞，猶犬羊之鞞。  
 同、二 子曰、君子成人之美，不成人之惡。  
 同、九 孔子對曰……君子之德風，小人之德草，草上之風，必偃。  
 路、三 子曰……君子名之必可言也，言之必可行也，君子於其言，無所苟而已矣。  
 同、三 子曰、君子和而不同，小人同而不和。  
 同、二 子曰、君子易事，而難說也，說之不以其道，不說也，及其使人也，器之。

路、云 子曰、君子泰而不驕、小人驕而不泰。

則可卷而懷之。

憲、六 南宮适問於孔子曰、羿善射、奭盪舟、俱

衛、七 子曰、君子義以為質、禮以行之、孫以出

不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>其死<sub>レ</sub>然、禹稷躬稼、而有<sub>レ</sub>天下、夫子

之、信以成<sub>レ</sub>之、君子哉。

不<sub>レ</sub>答、南宮适出、子曰、君子哉若人、尙<sub>レ</sub>德

同、二 子曰、君子求<sub>レ</sub>諸己、小人求<sub>レ</sub>諸人。

哉若人。

同、三 子曰、君子矜而不爭、羣而不黨。

同、七 子曰、君子而不仁者有矣夫、未有<sub>レ</sub>小人而仁

同、三 子曰、君子不以<sub>レ</sub>言舉<sub>レ</sub>人、不以<sub>レ</sub>人廢<sub>レ</sub>言。

者也。

同、三 子曰、君子謀<sub>レ</sub>道不<sub>レ</sub>謀<sub>レ</sub>食、耕也餒在<sub>レ</sub>其中、

同、二 子曰、君子上達、小人下達。

矣、學也祿在<sub>レ</sub>其中、君子憂<sub>レ</sub>道、不<sub>レ</sub>憂<sub>レ</sub>貧。

同、六 曾子曰、君子思不<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>其位。

同、三 子曰、君子不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>小知、而可<sub>レ</sub>大受也、小人

同、元 子曰、君子恥<sub>レ</sub>其言而過<sub>レ</sub>其行。

不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>大受、而可<sub>レ</sub>小知也。

同、望 子路問<sub>レ</sub>君子、子曰、脩<sub>レ</sub>己以<sub>レ</sub>敬、曰、如<sub>レ</sub>斯

同、矣 君子貞而不諒。

而已乎、曰、脩<sub>レ</sub>己以<sub>レ</sub>安<sub>レ</sub>人、曰、如<sub>レ</sub>斯而已乎、

季、七 孔子曰、君子有三戒、少之時、血氣未<sub>レ</sub>定、

曰、脩<sub>レ</sub>己以<sub>レ</sub>安<sub>レ</sub>百姓、脩<sub>レ</sub>己以<sub>レ</sub>安<sub>レ</sub>百姓、堯舜

戒<sub>レ</sub>之在<sub>レ</sub>色、及<sub>レ</sub>其壯<sub>レ</sub>也、血氣方剛、戒<sub>レ</sub>之

其猶病<sub>レ</sub>諸。

在<sub>レ</sub>闕、及<sub>レ</sub>其老<sub>レ</sub>也、血氣既衰、戒<sub>レ</sub>之在<sub>レ</sub>得。

衛、一 子路愾見曰、君子亦有<sub>レ</sub>窮乎、子曰、君子固

同、八 孔子曰、君子有三畏、畏<sub>レ</sub>天命、畏<sub>レ</sub>大人、

窮、小人窮斯濫<sub>レ</sub>矣。

畏<sub>レ</sub>聖人之言。

同、六 子曰……君子哉蘧伯玉、邦有<sub>レ</sub>道則仕、邦無<sub>レ</sub>道

同、二 孔子曰、君子有<sub>レ</sub>九思、視思明、聽思聰、

色思<sub>レ</sub>溫、貌思<sub>レ</sub>恭、言思<sub>レ</sub>忠、事思<sub>レ</sub>敬、疑思<sub>レ</sub>

勇而無<sub>レ</sub>禮者、惡<sub>レ</sub>果敢而窒者。

問、忿思<sub>レ</sub>難、見得思<sub>レ</sub>義。

張、九 子夏曰、君子有三變、望<sub>レ</sub>之儼然、即<sub>レ</sub>之也

季、三 陳亢退而喜曰、問<sub>レ</sub>一得<sub>レ</sub>三、聞<sub>レ</sub>詩聞<sub>レ</sub>禮、又

溫、聽<sub>レ</sub>其言也厲。

聞<sub>レ</sub>君子之遠<sub>レ</sub>其子也。

同、三 陳子禽謂<sub>レ</sub>子貢曰、子爲<sub>レ</sub>恭也、仲尼豈賢<sub>レ</sub>於

陽、三 子路曰、君子尙<sub>レ</sub>勇乎、子曰、君子義以爲<sub>レ</sub>上、

子乎、子貢曰、君子一言以爲<sub>レ</sub>知、一言以爲<sub>レ</sub>

君子有<sub>レ</sub>勇而無<sub>レ</sub>義、爲<sub>レ</sub>亂。

不知、言不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>慎也。

同、二 子貢曰、君子亦有<sub>レ</sub>惡乎、子曰、有<sub>レ</sub>惡、惡<sub>レ</sub>

堯、三 子曰、不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>命、無<sub>レ</sub>以爲<sub>レ</sub>君子也。

稱<sub>レ</sub>人之惡者、惡<sub>レ</sub>居<sub>レ</sub>下流而訕<sub>レ</sub>上者、惡<sub>レ</sub>

右解説批評

君子の語にも、現實的と理想的の二義あり。前者は當代一定の地位階級にあるものをいふ(憲、七、二八)(陽、二三)。後者は理想的の人の義にして、吾人の論究に値するものは之れに外ならず。士の語も又た同様二義あれど、理想的に云へば君子と同じからざるを得ず、随つて士君子の熟語も生ずるなり。

君子は仁主義の實現者なり。唯だ其の實現には時と所と人により種々の相違あり。子貢が士を



問ふに當りて、孔子の答へたる三階級あり。其の第一は己れを行うて恥あり、四方に使して君命を辱かしめずといふ。而して其の次は宗族孝を稱へ、郷黨弟と稱ふといふ。更に第三としては、言必らず信、行必らず果、硜々然たる小人を擧げ、此れさへ今の政に従ふ斗筭の人に比ぶれば、大に優れりとしたるのを見る。恐らく是れは特定の目的ありての説明ならんも、一般的に士の上下を分つものとしては、古來の儒者の種々の解釋にも關はらず、頗る不適確なるを覺ゆるなり。精密に君子の資格を論定することの困難は言を待たず。されど大體其の性質を擧ぐれば、其は

- (1) 克己的なり(學、一四)(憲、三)(衛、三二)
- (2) 實行的なり(爲、一三)(里、二四)(述、三二)(憲、二九)
- (3) 自律的なり(衛、二〇)
- (4) 自足的なり(學、一)

此れ等は、何れも仁主義の條下に詳なるが、君子は此く内面に於て強き意志力を以て、質實剛健の精神あり、即ち「質」あり、されど内面のみにて外面の修養足らざれば、「野」となる。随つて外面は飽くまで禮を以て飾られ、樂を以て和らげざるべからず。即ち、「文」なり。もし唯だ外面の修養成るも、内面の充實せざるに於ては、「史」となる。即ち今のハイカラなり。君子は文質彬々たり

(雍、一八)(先、一)(頤、八)。其の質に従へば、君子には頑固ならざる固き節操あり(衛、三六)。唯だ其は變通の能ありて、器械の如くならざるのみ(爲、一二)。君子には名譽心あり、忠君の念ある(路、二〇)と共に明智あり。其の道を以てすれば之れを欺き得べしと雖も、非合理の事を以て之れを愚弄すべからず、又た之れを害すべからず(雍、二六)。井中に仁者ありと言はば、之れを救ふべきかなる幸我の間に對しては、其所に逝きて事實を見る迄は合理的なるも、既に事實を見たる以上、井中に陥いるなど有り得べからざること、随つて君子は之れを爲さずとするなり。此の章多少不明の點ありて、諸儒の解一致せずと雖も、大要孟子の「君子欺くに其の方を以てすべきも、之を罔すに其の道に非ざるを以てし難し」に外ならず。君子には既に明智あり。是を以て人に物を恵むべきは當然なるが、無益に富める者に與へずして、貧者の必要に應ずるのみ(雍、三)。又た君子は屑々として人の己れを詐るを邪推せず、又た人の己れを信ぜざるなきやと懸念せず。唯だ大體に於て豫め先方の人物を見抜きて、小人の言を受けざるを賢しとす(憲、三三)。此く君子の器は大なれば、容易に其の如何を知ること難きも、一旦知り得たる以上は大に信任し得べし。是れ、小人の重任を授け難きも淺く小さく知り易きと相反す(衛、三三)。されど是れ必らずしも藝能ありといふに非ず。孔子も我れ多能ならずといふ(罕、七)。是れ藝能を賤しむの意味にあらず。凡そ人間の爲す業は、何にてもあれ、其の間に高

下の別を立てず、禹稷さへ躬ら稼して、而かも天下を有したりとす(憲、六)。畢竟君子の器局が大なりといふも、其の悠遠廣大なる大使命(堯、三)を自覺し、而かも其の力用は之れを實現するに堪へ、たとへ幼少の君を託せられ、君の政令を行ひ、死生の大事に臨むも、其の心を易へざるを得るにあり(泰、六)。されば此かる人の世にあるや、風の如き感化力を有して、草たる小人を己れに同化せしむるを怪しまざるなり(頤、一九)。

次に社交上より考察せんに、先づ家庭に於て、君子は其の子を遠ざくといふ(季、一三)。されど此は疎んずる意味に非ずして、徒らに私愛に溺れざるをいふ。親子の親愛あるのみならず、兄弟にも怡怡たるが本領にして、唯だ朋友は義理を重んじて切切偲偲たるべしとす(路、二八)。人々の交際に於て、君子は言と人とを別ち、言を以て人を取らず、人を以て言を棄てず(衛、二二)。衆人に對して偏愛する所なく、義のある所に従つて行動す(爲、一四)。されば君子は小人の利益物質に共鳴するに反して、衷心正義を知りて之れに協賛す(里、一六)。即ち小人利に喻り、君子義に喻るなり。即ち君子は正義の事を行ふなり(里、一〇)(陽、二三)。「適」「莫」の語義は、儒家種々の異解あるも、朱子の如く不可も可し、徂徠の如く親疎も可し、唯だ義の實行を重んずるを知れば足るなり。されど人々は、多く己れが愛する所に従つて結び付きて、黨派を作らんとする傾向あるも、君子は義によつて

進退するが爲めに黨派を作らず。さればとて孤立獨善の態度を取らず。即ち群して黨せざるなり(衛、二二)。君子は何時も善人の味方にして、善人の善事を助成するを怠らず、たとへ其が自己の利益となるとも、悪人の悪事に加擔することなし(頤、一六)。又た人々は、一も二もなく人の言ふ所に従はんとする傾向あるも、君子は先方の主張正しければ、直に之れに賛意を表するも、盲目的に雷同することなし、即ち和するも同ぜざるなり(路、二二)。同ぜざればとて、敢て人と相争ふに非ず、没分曉漢と相争ふとしては、君子は餘りにも自尊的なり、即ち矜にして争はざるなり(衛、二二)。君子の争ふは唯だ射の時、勝てる者、負けたる者共に禮讓を以て行動し、前者驕らず、後者怨まずして後者に爵盃を取らしむる時、其の争や君子なりとは孔子の説明する所なり(僖、七)。君子の和平恭謙温良(路、二六)なるや、其の下に對するに當り、多きを求めず、唯だ部分的の事を爲し得れば可なりとす、即ち之れを器とするを以て、下たる者は甚だ之れに事へ易し。唯だ諂佞の言語態度を以て、喜ばれんとするも容易に罔まし得べきに非ざるなり(路、二五)。されば君子には愛憎なきやといふに、是れ決して然らず、君子も亦た、人の惡をいふ者、上を誦る者、勇ありて禮なき者等を惡むと云へり(陽、二四)。

右大體士君子に關する孔子の諸言を組織立てて叙述せり。其内には或は孔子の言ならずして、門

流のものもあり、或は孔子のものとして編入されたる門流のものも之れあらん。されど同一傾向のものなる以上、敢て其間に區別せざりき。唯だ此所に「憲、三九」の、子曰、賢者辟世、其次辟地、其次辟色、其次辟言の「世」は即ち社會にして、もし字通りに解釋せば、是れ社會を厭離せんとする思想とも思はれざるに非ざれども、本來孔子は隱者に同情すれども、之れに賛成せざる者あれば、論語全卷を貫く思想と一致せざるに似たり。崔述は文章上より論語の若干篇に於て老莊的着色あるを肯定す。余は更に文義上より之れを信する者なり(別に論あり)。されば「憲、三九」の説明中に、古來老莊的註解あるも、亦た當然とすべし(隱者の部参照)。されど弟子は兎に角、何人も孔子自身に社會生活を否定するの思想ありたりとは言ひ得べからず。是れ孔子の隱者の行動の批判によりて明らかに知るを得、寧ろ君子は積極的に社會を愛し、廣く人類をも愛したること(顔、五)疑ふべからざるなり。畢竟此かる論議の生ずるは、以て孔子以後の孔子教の發展と、論語編纂方法を推察するに足るなり。

君子を外面より觀察すれば、其の精神が寛にして又た嚴なれば、其の風采にも自ら兩者の風現はる。子夏によれば、君子は之れに接する時三變し、遠く望めば儼然たるが、之れに近けば温乎として親しみ易く、いよ／＼其の言を聽くに及べば又た嚴正なりと(張、九)。又た殆んど同一の事が「述三六、三七」にも言ひ現はさる。坦として蕩々とは、温乎として自得せる狀を言ひたるなるが、温

にして厲、威あつて猛からずは寬嚴の兩側面を形容したるもの、而して恭うして安しとは徹底的に自得自足したる高き精神を現はせるを覺ゆるなり。

君子たらんとする修養は、一般に道德的修養と異ならずと雖も、特に君子の語を以て説かれたる所を一言せんに、其は先づ孝弟の實行より始めざるべからず(學、二)。而して始終慎重の態度を持つるを要す(學、八)。是れ別言すれば則ち敬なり(憲、四五)。敬は單に何がなしの敬に非ずして、最高目標を目掛けて一路向上せんとするなり。此意味に於て、後世朱子王子等が「敬」を力説せしは當れり。即ち君子は上達するなり(憲、二四)。其の最高目標が仁にあること言を待たず。君子は其の名譽にかけて仁を實現せんとし、一時一刻も之れを忘ることなし(里、五)、即ち常に徳を懷ふなり(里、一)。かく進脩努力する以上、人の爲し得べき所は其れ迄なれば、其れ以上の事は吉凶如何にもあれ、心を勞すべき限りに非ず。即ち内に省みて疚しからずんば、何をか憂ひ何をも懼れん(顔、四)なり。随つて環境の如何は、然まで君子の事業を爲すに當り妨ぐべきに非ず、たとへば九夷に居るも不可ならず(罕、一四)、窮境の如きも亦た君子の必らず避け得る所に非ずと雖も、唯だ小人の如く精神を錯亂せしめざるのみ(衛、一)。

此くて君子の内外表裏の全貌を言ひ表はす言としては、君子儒(雍、一三)あり、又た九思(季、一〇)

あり。されど是れ内面的思念の内容を逸するのみならず、孔子の言としては如何にも整ひ過ぎたる形容なれば、恐らく後世門流の稍や組織的に君子の資格を數へたるものならん。三戒(季、七)、三畏(季、八)の如きも、人に教ふる便宜上より、門流が亦た孔子の教を秩序立てたるものならん。更に子張の約言する所によれば、忠君と、義と、敬と、哀とが士の資格(張、一)なれども、寧ろ特殊の場合の言ならん。更に、子産に君子の道四ありとして、恭敬惠義を數へたり(公、一六)。是れ孔子の言に相違なきも、此の四を以て君子の道が盡きたりといふに非ず。唯だ「衛、一七」の言は最も君子の全貌を道破せる如くにも見ゆ。之れによれば君子の骨髓は義にして、其の實行方法は禮、更に加ふるに、謙遜を以てし、最後信を以て之れを完成すとなり。されど疑ふべきは此所に一言の仁に及ぶことなきのみならず、義と禮と孫と信との関係も適切妥當ならざること是れなり。古來儒家の解釋の別れたるは極めて理由あり(義に論じたる)。恐らくは是れ又た孔子の直接説きし所に非るべしと思はる。

兎にも角にも、孔子の胸中に畫きし君子なる者は、具體的に云へば、夷齊の如き、蘧伯玉の如き、南宮适の如き者にして、恐らく顔回は其の最高なるものなるべきか。之れによれば抽象的諸資格に關はらず、頗る消極的謙退的なるが君子なるかの疑なき能はざるなり。

德行には顔淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓(先、二)と言はる。此れ等は君子ならざるか。又た言語には宰我、子貢、政事には冉有、季路、文學には子游、子夏と言はる。此れ等も亦た君子ならざるか。孔子は一般に辯説を拒け、屢々子貢の辯を抑へ、又た其の政治を喜ばざるに似て、子貢の人となり器物視したり。子路の勇は又た屢々酷評を受けたる所にして、此れ等は寡黙好學の顔回に及ばずとされたるは最も明らかなり。随つて子貢子路は君子以下なるか、是れ又た然りとも言ひ難きが如し。徂徠等によれば、管仲は仁者にして勿論君子なるが如く言はる。

是れ徂徠が積極的事業に心酔するが爲めなるが、勿論如何はしき解釋なりとするも、普通儒家の君子の解釋は、餘りにも消極的退嬰的の嫌あり。或る意味に於て君子とは「お人好し」の念伴ふは之が爲めなり。大鹽中齋によれば、孔子の性質は子貢の形容せしが如く、温良恭儉讓の如く消極的のものに非ずして、更に積極的進取的なりとするも、同一の疑は亦た孔子の君子の概念に於ても懐かるる所なり。吾人は上來孔子が君子の語を用ゐたる諸言を綜合して、其の大要を約説したるが、尙ほ一定確然たる決論を得ざること此くの如し。是れ又た諸家が其間に自由なる私見を容れ得る所以なり。されど大體に於て古來君子とは道德家を指し、之れを事業家と其の他と區別したるが如くにも見ゆ。然らば兩者の比較的價值は如何。此かる問題は恐らく孔子の斷言せざりし所なり。

本文紹介

爲、四 子曰、君子周而不比、小人比而不周。

里、二 子曰、君子懷德。小人懷土。君子懷刑、小人懷惠。

同、云 子曰、君子喻於義、小人喻於利。

雍、三 子謂子夏曰、女爲君子儒、無爲小人儒。

述、矣 子曰、君子坦蕩蕩、小人長戚戚。

泰、云 子曰、狂而不直、侗而不愿、忞忞而不信、吾不知之矣。

顏、云 子曰、是聞也、非達也、……夫聞也者、色取仁而行違、居之不疑、在邦必聞、在家必聞。

路、四 樊遲請學稼、子曰、吾不如老農、請學爲圃、曰、吾不如老圃、樊遲出、子曰、小人哉樊須也。

路、云、子貢問曰、今之從政者何如、子曰、噫、斗筭之人、何足算也。

同、三 子曰、君子和而不同、小人同而不和。

同、三 子曰、……難事而易說也、說之雖不以道、說也、小人及其使人也、求備焉。

同、云 子曰、君子泰而不驕、小人驕而不泰。

憲、七 子曰、君子而不仁者有矣夫、未有小人而仁者也。

同、云 子曰、君子上達、小人下達。

衛、一 子曰、……小人窮、斯濫矣。

同、云 子曰、群居終日、言不及義、好行小慧、難矣哉。

同、云 子曰、君子求諸己、小人求諸人。

同、三 子曰、君子不可小知、而可大受也、小人不可大受、而不可小知也。

季、八 孔子曰……小人不知天命而不畏也、狎大人、侮聖人之言。

陽、三 子曰、色厲而內荏、譬諸小人、其猶穿窬之盜也與。

同、三 子曰、鄉原、德之賊也。

同、五 子曰、鄙夫可與事君也與哉、其未得之也、患得之、既得之、患失之、苟患失之、無所不至矣。

陽、三 子曰……小人有勇而無義、爲盜。

同、三 子曰、唯女子與小人爲難養也、近之則不孫、遠之則怨。

同、三 子曰、鄉原、德之賊也。

同、五 子曰、鄙夫可與事君也與哉、其未得之也、患得之、既得之、患失之、苟患失之、無所不至矣。

陽、三 子曰……小人有勇而無義、爲盜。

同、三 子曰、唯女子與小人爲難養也、近之則不孫、遠之則怨。

同、三 子曰、鄉原、德之賊也。

同、五 子曰、鄙夫可與事君也與哉、其未得之也、患得之、既得之、患失之、苟患失之、無所不至矣。

陽、三 子曰……小人有勇而無義、爲盜。

同、三 子曰、唯女子與小人爲難養也、近之則不孫、遠之則怨。

同、三 子曰、鄉原、德之賊也。

同、五 子曰、鄙夫可與事君也與哉、其未得之也、患得之、既得之、患失之、苟患失之、無所不至矣。

陽、三 子曰……小人有勇而無義、爲盜。

同、三 子曰、唯女子與小人爲難養也、近之則不孫、遠之則怨。

同、三 子曰、鄉原、德之賊也。

同、五 子曰、鄙夫可與事君也與哉、其未得之也、患得之、既得之、患失之、苟患失之、無所不至矣。

陽、三 子曰……小人有勇而無義、爲盜。

同、三 子曰、唯女子與小人爲難養也、近之則不孫、遠之則怨。

同、三 子曰、鄉原、德之賊也。

同、五 子曰、鄙夫可與事君也與哉、其未得之也、患得之、既得之、患失之、苟患失之、無所不至矣。

陽、三 子曰……小人有勇而無義、爲盜。

同、三 子曰、唯女子與小人爲難養也、近之則不孫、遠之則怨。

同、三 子曰、鄉原、德之賊也。

同、五 子曰、鄙夫可與事君也與哉、其未得之也、患得之、既得之、患失之、苟患失之、無所不至矣。

陽、三 子曰……小人有勇而無義、爲盜。

同、三 子曰、唯女子與小人爲難養也、近之則不孫、遠之則怨。

右解説批評

君子に二義ある如く、小人にも亦然り。一は、單に下流社會をいふ者にして徳不徳の價値づけなく不徳者といふに止まるもの(憲、七、陽、二三)、他の一は、罪人に至る程の大それた者にてはなきも、尙ほ小惡ある惡徳者はれなり。其は畢竟如何にして然るか。大體に於て道に志して向上の意氣なきによること君子の反對なり。されば其は無知無能(泰、一六)にして、凡そ高きもの、深きもの、大なるものに對しては、之を理解するの力なし(季、八)。小人とはよくも言はれたり。凡ては淺く、小さければ、直に其の奥底を見抜き得るも、信賴は置き難し(衛、三三)。即ち、小人は無修養にして、其の無修養を愧ぢず、時としては却つて之を得々として高慢す(路、二六)。皆な是れ自我の未だ完成せざ

る(衛、二〇)のみならず、却つて墮落せるに基く(憲、二四)。されば野人の儘に利慾に汲々として(里、一一、一六)(陽、一五)、勇ある者は盜をも爲すに至る(陽、二三)。其の人に對するや、一に愛憎によるが故に、公平ならずとして偏頗なり。虛榮心強きが故に、諂佞者を説ぶと同時に、同情心乏しきが故に、人を責むることは酷なり(路、二五)。

表面徳者を装ひながら、實行は之れに伴はずして、偏に虚名を博せんとす(顔、二〇)。さればもし自己に過失あれば、潔く之を認むることを爲さず、却つて種々に辯解す(張、八)。故に其は名譽の竊盜に外ならず(陽、一二)。其の外面の體裁立派なるは、正に徳を賊するものたるを失はず(陽、一三)。其の人と交はるや、名と利とを中心とするものなれば、淺薄に雷同することあるも、内心打融けて和合することなし(路、二三)。其の談ずることは、無意義の雜談にして、一日中道義に及ぶなく、猿知慧を闘はして得々たり(衛、一六)。されど此の如き小人安ぞ長く其の福利を確保し得べけんや。寧ろ其の事は志と違つて、失望落膽の機會は多からざるを得ず。故に其の面色は戚々として(述、三六)、其の甚しき場合は精神錯亂にも及ぶなり(衛、一)。小人を以て女子と同列に取扱ひたるは、以て當時女子の地位の低きを知るに足るなり。

孔子の小人の常態を説くこと頗る適切なり。而して論語の後篇は、前篇に勝りてより多く、又た

より深刻なるを見る。恐らくは春秋の世より戰國に進むに隨ひ、小人の輩出益々多く、其の研究も孔門に於て益々進みしに非るか、而して更に其の後世となるに従ひ、小人の標本の愈々益々多様多種となるを如何にせむ。

### 9 不幸者

罕、二〇 子見齊衰者、冕衣裳者、與瞽者、見之雖<sub>レ</sub>少必作、過<sub>レ</sub>之必趨。

衛、四 師冕見、及階、子曰、階也、及席、子曰、

席也、皆坐、子告<sub>レ</sub>之曰、某在<sub>レ</sub>斯、某在<sub>レ</sub>斯、

師冕出、子張問曰、與<sub>レ</sub>師言之道與、子曰、

然、固相<sub>レ</sub>師之道也。

鄉、二六 見齊衰者、雖<sub>レ</sub>狎必變、見冕者與瞽者、雖<sub>レ</sub>褻必以<sub>レ</sub>貌。

不具不幸なる者に對する孔子の同情は、至れり盡せるものなれども、亦た例によりて形式に拘泥せる傾向も之なきに非るを見る。要するに、這般の事は親切如何と顧るべきのみ。

### 10 隱者

#### 本文紹介

憲、二五 微生畝謂<sub>レ</sub>孔子曰、丘何爲是栖栖者與、無<sub>レ</sub>

憲、二五 賢者辟<sub>レ</sub>世、其次辟<sub>レ</sub>地、其次辟<sub>レ</sub>色、其次辟<sub>レ</sub>言。

乃爲<sub>レ</sub>佞乎、孔子曰、非<sub>レ</sub>敢爲<sub>レ</sub>佞也、疾<sub>レ</sub>固也。

憲、四 子曰、作者七人矣。

同、四 子路宿於石門、晨門曰、奚自、子路曰、自孔氏、曰、是知其不可、而爲之者與。

同、四 子擊磬於衛、有荷蕢而過孔氏之門者、曰、有心哉、擊磬乎、既而曰、鄙哉、硜硜乎、莫己知也、斯已而已矣、深則厲、淺則揭、子曰果哉、末之難矣。

微、一 微子去之、箕子爲之奴、比干諫而死、孔子曰、殷有三仁焉。

同、五 楚狂接輿、歌而過孔子、曰、鳳兮鳳兮、何德之衰、往者不可諫、來者猶可追、已而、已而、今之從政者殆而、孔子下、欲與之言、趨而辟之、不得與之言。

同、六 長沮桀溺、耦而耕、孔子過之、使子路問焉、長沮曰、夫執輿者爲誰、子路曰、爲孔丘、曰、是魯孔丘與、曰、是也、曰、是知津

矣、問於桀溺、桀溺曰、子爲誰、曰、爲仲由、曰、是魯孔丘之徒與、對曰、然、曰、滔滔者、天下皆是也、而誰以易之、且而與其從辟人之士也、豈若從辟世之士哉、穠而不輟、子路行以告、夫子憮然曰、鳥獸不可與同群、吾非斯人之徒與、而誰與、天下有道、丘不與易也。

微、七 子路從而後、遇丈人以杖荷蓑、子路問曰、子見夫子乎、丈人曰、四體不勤、五穀不分、孰爲夫子、植其杖而芸、子路拱而立、止子路宿、殺鷄爲黍而食之、見其二子焉、明日子路行以告、子曰、隱者也、使子路反見之、至則行矣、子路(反、子)曰、不仕無義、長幼之節、不可廢也、君臣之義、如之何其廢之、欲潔其身、而亂大倫、君子之仕也、行其義也、道之不行、已知之矣。

右解說批評

當世に用ゐられざる點に於て、隱者と孔子と相同じ。隨つて當世に對する感情思想に於ても、彼此相通するものありしは疑を容れず。各章の上に於て之を見るも、孔子が隱者を尊敬し、之れに同情を有せしことは明らかに觀察し得るなり。唯だ一般に社會を厭離すると、然かせざると、是れ其の根本的相違といふべし。即ち隱者より云へば、望みなき世間に向つて尙ほ戀々たる如き孔子の態度は佞ならぬかと疑はるるに、孔子は全然當世に向つて愛想を盡かすは頑固過ぐとせり(憲、三四)。隱者は孔子の行動は社會改良の到底不可能なるを知りながら、尙ほ之れを爲さんとするもの(憲、四一)とし、或は之れを己れを知らざるもの、自己の勝手に迷へるものにすぎずとせるに對し、孔子は此かる態度は餘りにも思ひ切りの善すぎるもの(憲、四二)として之れを非難せり。其の非難の文句は、末之難矣とあり。末は無と解すべきは明らかなるも、扱て如何に之れを讀むべきか。

末之難矣(義疏)とすれば、「之」とは孔子を知らずして譏ることとなり、末之難矣(朱註)とすれば、「之」とは深則厲、淺則揭を指すこととなりたるも、要旨の理解に大變化を及ぼすことなきを見る。微子が紂を去り行きたるを評して、之れを殷の三仁の中に加へたるは何故なるか。註釋者種

種に説明すると雖も、微子箕子等の行動の詳は知るべからず。随つて其の仁なる理由は明らか難し（微、一）。蓋し當世の権力者の、有徳者に對する態度は亂暴にして危険なれば、元より遠からんとし其の趣旨を以て孔子にも助言したるが隱者なり（微、四）。孔子も亦た、危邦に入らず、亂邦に居らずとしたる點、隱者と一致せる傾向なるも、子路の遇へる荷篠の丈人に告ぐる所を以てすれば、孔子は丈人が子路を馳走し、其の二子をも之れに紹介したるを以て、丈人も亦た長幼の間の禮節あるべきを知るを縁として、然らば更に君臣の間の義もあるべき筈なり、君に仕ふると否とを問はず、徒らに其の身を潔ふするに汲々として、重大なる道德を疎略にするは不可なりとしたるが如し（微、七）。されば孔子の東奔西走するは、此かる道を行はんが爲めなり、道之不行、已知之矣の一句は、其の意義頗る曖昧にして、「己」の字はオノレとも、スデニとも訓ぜらる、従つて道の行はれざるは己れ之れを知るとも、又た道の行はれざるは己に承知なりとも解されたり。もし根本的に行はれざる道を行はんとする爲めの東奔西走ならば、其は甚だ愚なるに似たりと雖も、其の本旨は然る原則的のものに非ずして、行はるべきもの、唯だ行はれ難きものの程度と察せらる。而して其の要旨たる畢竟人間は鳥獸と群すべからず、同胞の善惡如何に關はらず、「吾れ斯の人の徒と與にするに非れば、誰れと與にかせん」との社會的思想を棄てざる所にありしならん。而して孔子の此の社會的思

想たる、眞に健實崇高なるものというて可なり。但だ本章の文句頗る不明なるもの多く、「滔々たる者、天下皆な是れなり、汝（而）誰れと與（以）に之れを易ん」の句、并に章末の「天下道あらば丘與に易へざるなり」の句、何れも種々の註解ありて、確然一定する能はずと雖も、是れ等共に大體の要旨を變化するに足らざるを見るなり。

然るに「憲、三九」の「賢者は世を避（辟）く、其の次は地を避く云々」に至つては、字形より云へば正に厭世主義とも解すべきに似て、孔子の思想解釋として容易ならざる一章たるを失はず。よりに聊か詳に之を説かん。

賢者世を避くとは、孔安國は世主の得て之れを臣とする能はざる者をいふとす。地を避くとは馬融は亂國を去つて治邦に適くなりとす。色を避くとは、孔安國は色のまゝに斯れ擧すなりとし、言を避くとは惡言あれば乃ち去るとす。皇侃は之れに疏して曰ふ、聖人は如何にするも己れを汚すことなし、随つて治亂を以て差別するを要せず。唯だ賢者は然る徳なきが故に、時不可なれば則ち世を去る、天子も臣とするを得ず、諸侯も友とするを得ず。其の次の中賢は、斷然世を去る能はず、但だ地を擇んで處り、亂を去り治に就く。其の次の賢者は預め治亂を擇ぶ能はず、但だ時に臨みて君の顔色惡ければ去る。更に其の次の賢者は、君の惡言あるを待つて去ると解釋す。是れ斷然世を去



るを以て最も高しとするの意にして、孔子の社會的思想と一致せざるのみならず、其の賢者の次第付けも亦た明確適切なりといふべからざるに似たり。且つ本章末段たる作者七人矣に註釋して、七人とは王弼の伯夷、叔齊、虞仲、夷逸、朱張、柳下惠、少連なるを挙げ、更に鄭康成の伯夷、叔齊、虞仲は世を避くる者、荷蓀、長沮、桀溺は地を避くる者、柳下惠、少連は色を避くる者、荷蕢、狂接輿は言を避くる者にして、都合十人を正しとして七人は當に十人と爲すべき誤なりの言を挙げたり。されど是れ明快なる説明に非ず。朱子の新註も此の點亦た頗る曖昧にして、更に程子の世と地と色と言との四を避くる賢者は、大小次第を以て之れを言ふと雖も、然れども優劣あるに非るなり、遇ふ所同じからざるのみの言を挙げたり。されどかくては「其次」は「其次」はと明瞭に上下せし言と相合せざるに似て不穩なり。仁齋は世を避くとは、和して同ぜざる人々をいふ、長沮、桀溺の流を指さずとし、世を避くる者の隱見は、天下に關し、其の次の者の進退は一國に關し、其の次の者は孟子の所謂禮貌衰へて去るもの、言を避くる者は違言あつて去るもの、皆身を亂世に失はずと雖も、大小遲速の異あり、政に次第して之れを言ふとす。是れ孔子の思想の社會的たるを害せざる長ありと雖も、世を避くるの言を説く點に於て苦しいふべく、隨つて賢者の次第付けに於て無理あるに似たり。而して仁齋は作者七人の名等は強て穿鑿すべからずとす。要するに本章の趣旨の曖昧

は依然として曖昧なり。流石の徂徠も之れを解き難しと見たるなるべし、更に少しも講解せず、唯だ例の主張により「作者七人矣」を別章とし、皆之れを聖人とし、之れを堯、舜、禹、湯、文、武、周公となせしを見るのみ。更に一堂、全都等諸家の見も、大體徂徠を取る、別に痛快なるものなし。恐らく以上の諸解より見るも、上章と下章との連絡は不自然なるを以て、履軒が下章を「微、八」の冒頭に移すべしとするも、道理あるに似たれども、何れにせよ、意義の上に新光明を加へたりとは云ふべからず。即ち孔子の伯夷其の他の隱者に對する評論の詳は知り得べからざるなり。

唯だ本章の辟世の言の解釋は暫らく措くとするも、孔子の隱者に對する深き同情、并に卷て懷にする顔回の推賞等、孔門弟子によりて次第に厭世的、退嬰的説明を來し、其れによりて見られ傳へられたる孔子の言と見得べき言辭も論語中に發見せらると見るを正しとすべし。

換言、孔子は兎に角、後の孔門の思想は、隱者との相異甚だ不明となりたるを以て、孔子の言として傳へられたる其の言明は自ら曖昧模糊に了るに至りしに非るか。

### 第五篇 國家生活

#### 1 治者階級 (君「上」「臣」)

學、二 有子曰、其爲人也、孝弟而好犯上者鮮矣、不好犯上而好作亂者、未之有也。

述、三 陳司敗問、昭公知禮乎、孔子曰、知禮、……

同、七 子夏曰、賢賢易色、事父母能竭其力、

以告、子曰、丘也幸、苟有過、人必知之。

事君能致其身、與朋友交、言而有信、雖曰未學、吾必謂之學矣。

泰、六 子曰、巍巍乎、舜禹之有天下也、而不與焉。

同、六 子曰、事君盡禮、人以爲詔也。

同、二〇 舜有臣五人、而天下治、武王曰、予有亂臣

同、元 定公問、君使臣、臣事君、如之何、孔子對

同、元 子曰、大哉堯之爲君也、巍巍乎、唯天爲大、

曰、君使臣以禮、臣事君以忠。

唯堯則之、蕩蕩乎、民無能名焉、巍巍乎、

同、三 子曰、居上不寬、爲禮不敬、臨喪不哀、吾何以觀之哉。

其有成功也、煥乎、其有文章。

里、二 子游曰、事君數、斯辱矣。

罕、三 子曰、……拜下禮也、今拜乎上、泰也、雖違衆、吾從下。

罕、三 子疾病、子路使門人爲臣。

憲、三 子路問事君、子曰、勿欺也、而犯之。

鄉、三 君召使擯、色勃如也、足躩如也。

衛、三 子曰、事君、敬其事、而後食。

先、三 季子然問、仲由、冉求、可謂大臣與、子

季、二 孔子曰、天下有道、則禮樂征伐、自天子出、

曰、吾以子爲異之間、曾由與求之間、所謂大臣者、以道事君、不可則止、今由與求也、可謂具臣矣、曰、然則從之者與、子曰、弑父與君、亦不從也。

出、天下無道、則禮樂征伐、自諸侯出、自諸侯出、蓋十世希不失矣、自大夫出、五世希不失矣、陪臣執國命、三世希不失矣。

顏、二 齊景公問政於孔子、孔子對曰、君君、臣臣、

陽、三 子曰、鄙夫可與事君也與哉、其未得之也、

父父、子子。

患得之、既得之、患失之、苟患失之、無所不至矣。

路、四 子曰……上好禮、則民莫敢不敬。

微、七 ……子路曰、不仕無義、長幼之節、不可廢也、

同、五 定公問……孔子對曰……人之言曰、爲君難、

廢也、君臣之義、如之何其廢之、欲潔其身、而亂大倫、君子之仕也、行其義也、道

爲臣不易、如知爲君之難也、不幾幾乎一言而興邦乎。

之不行之矣。

憲、五 子曰、臧武仲以防、求爲後於魯、雖曰

同、二〇 周公謂魯公曰、君子不施其親、不使大臣怨乎不以、故舊無大故、則不棄也、無求備於一人。

不要君、吾不信也。

同、三 陳成子弑簡公、孔子沐浴而朝、告於哀公

曰、陳恆弑其君、請討之。

堯、一 …… 朕躬有罪、無以萬方、萬方有罪、罪

在朕躬 …… 百姓有過、在予一人。

2 被治者 (民「下」「庶人」等)

學、五 子曰 …… 節用而愛人、使民以時。

之、可謂知矣。

同、九 曾子曰、慎終追遠、民德歸厚矣。

泰、九 子曰、民可使由之、不可使知之。

爲、三 子曰 …… 齊之以刑、民免而無恥。

同、元 子曰、大哉、堯之爲君也、…… 蕩蕩乎、民無能名焉。

同、元 …… 孔子對曰、舉直錯諸枉、則民服、舉

鄉、二 鄉人儻、朝服而立於阼階。

枉錯諸直、則民不服。

先、三 子路曰、有民人焉、有社稷焉、何必讀書、然後爲學。

同、二 季康子問、使民敬忠以勸、如之何、子曰、

同、二 求也爲之、比及三年、可使民足。

臨之以莊則敬、孝慈則忠、舉善而教不能、

同、七 子貢問政、子曰、足食、足兵、民信之矣、

則勸。

…… 民無信不立。

佾、三 哀公問社於宰我、宰我對曰 …… 周人以粟、

同、九 (有若) 對曰、百姓足、君孰與不足、百姓不

曰、使民戰栗。

足、君孰與足。

雍、二 仲弓問子桑伯子、子曰、可也簡、仲弓曰、

同、九 孔子對曰 …… 子欲善、而民善矣、君子之德

居敬而行簡、以臨其民、不亦可乎。

風、小人之德草、草上之風、必偃。

同、五 …… 子曰、毋、以與爾鄰里鄉黨乎。

雍、三 樊遲問知、子曰、務民之義、敬鬼神而遠

之、則知。

路、四 子曰、小人哉、樊須也、上好禮、則民莫敢

之狂也肆。

不敬。

張、二 子夏曰、君子信而後勞其民。

同、二 子貢問曰、何如斯可謂之士矣、子曰 …… 宗

堯、一 …… (湯) 曰 …… 帝心不蔽、簡在帝心、朕躬

族稱孝焉、鄉黨稱弟焉。

有罪、無以萬方 …… 興滅國、繼絕世、

憲、望 子路問君子、子曰 …… 脩己以安百姓、脩

舉逸民、天下之民歸心焉、所重民食喪祭、

己以安百姓、堯舜其猶病諸。

寬則得衆、信則民任焉、敏則有功、公則

季、二 孔子曰 …… 天下有道、則庶人不議。

(民) 說。

陽、六 子張問仁於孔子、孔子曰 …… 寬則得衆、信

同、二 …… 子張曰、何謂惠而不費、子曰、因民

則人任焉、敏則有功、惠則足以使人。

之所利而利之、斯不亦惠而不費乎。

同、二 子曰、古者民有三疾、今也或是之亡也、古

右解說批評

社會は治者と被治者に分る。後者は則ち「民」なり、最も下屬にある「下」なり。前者の最上の者として君あり。之れを助くる者として臣あり。臣には大夫、士等の階級あり。此れ等の間又たそれ々の「上」「下」あり。

堯舜は徳を以て君となれりといふも、尙ほ當時下隨、務光等の不平家ありと想像せらるれば、必

らずしも然りとは言ふ能はざるべし。湯が力を以て夏を滅ぼせしは事實なり。周室の初に於てよく般に服事したるは論語に示す所の如しと雖も、尙ほ武王は武を用ゐたり。されば畢竟君とは強者たりしに相違なし。而して臣とは其の機具たるに外ならず。人と生れて君の臣たるを本望とするは、普通の人情なれど、もし聘用の條件己れが意に満たざれば、就職せざるも可し、又辭職するも許されたるが如し(先、二四)。就職すべからざるに、尙ほ執念に君に求むる所あらんとするは見苦しとされたり(里、二六)。

今此れ等上下の常道を論ずれば、君は君、臣は臣(顔、一一)たるは勿論なるも、其は形式的言明に外ならず、重要なるは君の君たる所以、臣の臣たる所以如何にあり。又た君臣の關係は「義」なり(微、七)といふ事も疑なき所なれども、實は如何にするが義なるやが問題となる所なり。君は君たらずとも、臣は以て臣たらざるべからずとも言はるれど、事實上君臣の善き關係も相對的に定まるを免れず(尙、一九)。君が君たるの難きを知り、臣が臣たるの易からざるを知るは、水魚の交の生ずる初なり(路、一五)。上に寛の徳あり(尙、二六)(微、一〇)、又た禮を以て下を遇すれば(尙、一九)(路、四)、臣をして敬せしめ得べし。されど堂々たる堯舜の徳は、此れ等にては言ひ盡したりとは言ふべからず、子夏によれば、其はよく人を知り、人を擧ぐるが如きも(顔、三三)、其の詳細の説明は審ならず。

暫らく禹の形容に就て之を見るに、其は一私を忘れて天と人とに盡すにありしが如し(泰、二二)。さればこそ「政とは正なり」、臣下の非行は斷然之れを征伐するの權能あり。君主もし之れを行ひ得ざるは衰敗の徴なりとす(季、二)。

此くて理想的の君主は之を求むること頗る難しと雖も、國家一日も君主なかるべからず(尙、五)。平生に於て最も之を尊ばざるべからず(罕、三)(郷、三)。たとへ君主に非行ありとも、輕々しく臣下は之を指摘すべからず(述、三〇)。況んや君に向つて強請するをや(憲、一五)。何んぞ況んや弑虐をや。弑虐は最大の罪惡にして、輿國に其れある場合にありとも、臣たる者は之れを討伐することを奏請せざるべからず(憲、二二)とせしが、孔子の意見なりしが如し。されば臣たる者は一身を擲つても、よく忠を盡し(學、七)、報酬の爲めにする如き醜を爲すべからず(衛、三七)とし、孔子は當時の人の忠を盡すを以て諂ふとしたるに憤慨せり(尙、一八)。是れ時俗の不忠に傾けるを責めたるまでにして、孔子は決して正義を外れて君主の意に投ずるを恕さず(憲、二三)、或は季氏のために不正に渉るらしき行動を爲せる弟子等を嚴しく戒しめたり(先、二三、二四)。此くて良臣を得ることは頗る難く、唯だ舜に其れあるを知る(泰、二〇)。

「民」、「庶人」、「民人」、「小人」、「百姓」、「萬方」、「衆」等は大抵同じき用語といふべく、其の

一定の集團は郷黨隣閭なり。其れ等には邪惡の意味はなきも大體に於て無能、未熟を意味す。是れ説文に「民とは衆萌なり、萌して識なきを言ふ」とあり、書經の鄭注に「民は無知の稱」とあり、荀子の楊倞注に、「民は泯として知なき者」とあり、又た春秋繁露に「民とは冥なり」とあるは皆同意義なるを見る。されば論語にありては、民は愛さるるものなれども、使はるるもの、治めらるるものにして、君と上とに對して、常に消極的立場に立てる卑賤の者たるを免れず。「泰、九」の如き種の異解なきに非るも、亦た同意に外ならず。唯だ君と上との使命は、一に民人の福利を全うするに非るなし。是に於て、蠢爾たる蒼生も、亦た決して單に輕んずべきのみに非ず。且つ事實として、民にも君と上とに對して是非好惡の情を有し直接間接之れを言動に現はし、或は大事を起すに至ること之あり。されば荀子は、「君は舟なり、庶人は水なり。水は則ち舟を載せ、水は則ち舟を覆す」と云へり。舟を覆すことが即ち暴君に對する民衆唯一の制裁なるが如し。此は君主によりて恐れられざるに非ずと雖も多くの場合然る懸念なく、又ありとするも之を思はざるが常なれば君主を制限するに足らざるなり。勿論最も理想的に君主の使命を言へば、天下の禍福の全責任は擧て皆其の一身にあり(堯、一)とも言はれざるにも非ず。其れ程ならざるも、有若は百姓足るは君富むなり(頌、九)と云ひ、子張は民の利とする所に因て之を利す(堯、二)と云へり。子張の言は、是れ管子の順民の

思想と相通するものと云ふべく、此くては君の君たる所以は、全く民の福利を謀るに外ならずして、遂に孟子の如き民主的主張にも導くに至るなり。されど是れ理想論に外ならず。事實としては、民は愛の對象たりしには相違なきも、曾て權利の所有者たるべしとしたることはなく、結局儒教は貴族主義道德たりしなり。國に於ては君權萬能にして、家に於ては父權萬能なりき。而して上の暴に對しては(下の暴を以て之れに酬いるの外)、之れを中和調停するの道は孔子にありても發見されざりしが如し。

### 3 孔子の政治上の意見

#### 本文紹介

學、五 子曰、道<sub>二</sub>千乘之國<sub>一</sub>、敬<sub>レ</sub>事而信、節<sub>レ</sub>用而愛<sub>レ</sub>人、使<sub>レ</sub>民以<sub>レ</sub>時。

同、二 子禽問<sub>二</sub>於子貢<sub>一</sub>曰、夫子至<sub>二</sub>於是邦<sub>一</sub>也、必聞<sub>二</sub>其政<sub>一</sub>、求<sub>レ</sub>之與、抑與<sub>レ</sub>之與。  
爲、一 子曰、爲<sub>レ</sub>政以<sub>レ</sub>德、譬如<sub>二</sub>北辰居<sub>二</sub>其所<sub>一</sub>、而衆

星共<sub>レ</sub>之。

爲、三 子曰、道<sub>レ</sub>之以<sub>レ</sub>政、齊<sub>レ</sub>之以<sub>レ</sub>刑、民免而無<sub>レ</sub>恥、道<sub>レ</sub>之以<sub>レ</sub>德、齊<sub>レ</sub>之以<sub>レ</sub>禮、有<sub>レ</sub>恥且格。

同、元 哀公問曰、何爲則民服、孔子對曰、舉<sub>レ</sub>直錯<sub>レ</sub>諸枉<sub>一</sub>、則民服、舉<sub>レ</sub>枉錯<sub>レ</sub>諸直<sub>一</sub>、則民不服。  
同、二 季康子問、使<sub>レ</sub>民敬忠以勸<sub>一</sub>、如<sub>レ</sub>之何<sub>一</sub>、子曰、臨<sub>レ</sub>之以<sub>レ</sub>莊則敬、孝慈則忠、舉<sub>レ</sub>善而教<sub>レ</sub>不能

則勸。

爲、三 或謂孔子曰、子奚不爲政、子曰、書云、孝乎惟孝、友于兄弟、施於有政、是亦爲政、奚其爲爲政。

同、三 子張問、十世可知也、子曰、殷因於夏禮、所損益可知也、周因於殷禮、所損益可知也、其或繼周者、雖百世可知也。

里、三 子曰、能以禮讓爲國乎、何有、不能以禮讓爲國、如禮何。

雍、三 子曰、齊一變、至於魯、魯一變、至於道。

泰、九 子曰、民可使由之、不可使知之。

同、四 子曰、不在其位、不謀其政。

同、二 舜有臣五人、而天下治、武王曰、予有亂臣十人、孔子曰、才難、不其然乎、唐虞之際、於斯爲盛、有婦人焉、九人而已、三分天下有其二、以服事殷、周之德、其可謂至德也已矣。

顏、七 子貢問政、子曰、足食、足兵、民信之矣、子貢曰、必不得已而去、於斯三者何先、曰、去兵、子貢曰、必不得已而去、於斯二者何先、曰、去食、自古皆有死、民無信不立。

同、二 齊景公問政於孔子、孔子對曰、君君、臣臣、父父、子子、公曰、善哉信如君不君、臣不臣、父不父、子不子、雖有粟、吾得而食諸。

同、三 子曰、聽訟吾猶人也、必也使無訟乎。

同、四 子張問政、子曰、居之無倦、行之以忠。

同、七 季康子問政於孔子、孔子對曰、政者正也、子帥以正、孰敢不正。

同、六 季康子患盜、問於孔子、孔子對曰、苟子之不欲、雖賞之不竊。

同、元 季康子問政於孔子曰、如殺無道、以就有道、何如、孔子對曰、子爲政、焉用殺、子

欲善而民善矣、君子之德風、小人之德草、草上之風、必偃。

路、一 子路問政、子曰、先之勞之、請益、曰、無倦。

同、二 仲弓爲季氏宰、問政、子曰、先有司、赦小過、舉賢才。

同、三 子路曰、衛君待子而爲政、子將奚先、子曰、必也正名乎、子路曰、有是哉、子之迂也、奚其正、子曰、野哉、由也、君子於其所不知、蓋闕如也、名不正、則言不順、言不順、則事不成、事不成、則禮樂不興、禮樂不興、則刑罰不中、刑罰不中、則民無所措手足、故君子名之、必可言也、言之、必可行也、君子於其言、無所苟而已矣。

同、四 ……子曰、小人哉、樊須也、上好禮、則民莫敢不敬、上好義、則民莫敢不服、上好信、則民莫敢不用情、夫如是、則四方

之民、襁負其子而至矣。

路、六 子曰、其身正、不令而行、其身不正、雖令不從。

同、七 子曰、魯衛之政、兄弟也。

同、九 子適衛、冉有僕、子曰、庶矣哉、冉有曰、既庶矣、又何加焉、曰、富之、曰、既富矣、又何加焉、曰、教之。

同、二 子曰、苟有用我者、期月而已可也、三年有成。

同、三 子曰、善人爲邦百年、亦可勝殘去殺矣、誠哉是言也。

同、三 子曰、如有王者、必世而後仁。

同、三 子曰、苟正其身矣、於從政乎何有、不能正其身、如正人何。

同、四 冉子退朝、子曰、何晏也、對曰、有政、子曰、其事也、如有政、雖不吾以、吾其與聞之。

路、二五 定公問、一言而可以興邦、有諸、孔子對曰、言不可、以若是其幾也、人之言曰、爲君難、爲臣不易、如知爲君之難也、不幾乎一言而興邦乎、曰、一言可以而喪邦、有諸、孔子對曰、言不可、以若是其幾也、人之言曰、予無樂乎爲君、唯其言而莫予違也、如其善而莫之違也、不亦善乎、如不善而莫之違也、不幾乎一言而喪邦乎。

同、二六 葉公問政、子曰、近者說、遠者來。

同、二七 子夏爲莒父宰、問政、子曰、無欲速、無見小利、欲速則不達、見小利、則大事不成。

同、二八 子曰、善人教民七年、亦可以即戎矣。

同、二九 子曰、以不教民戰、是謂棄之。

憲、六 南宮适問於孔子曰、羿善射、禹盪舟、俱不得其死、然禹稷躬稼而有天下、夫子不答、南宮适出、子曰、君子哉若人、尙德哉若

人。

憲、二〇 子言衛靈公之無道也、康子曰、夫如是、奚而不喪、孔子曰、仲叔圉治賓客、祝鮀治宗廟、王孫賈治軍旅、夫如是、奚其喪。

同、二一 子曰、不在其位、不謀其政。

衛、四 子曰、無爲而治者、其舜也與、夫何爲哉、恭己正南面而已矣。

同、二〇 顏淵問爲邦、子曰、行夏之時、乘殷之輅、服周之冕、樂則韶舞、放鄭聲、遠佞人、鄭聲淫、佞人殆。

同、二三 子曰、臧文仲、其竊位者與、知柳下惠之賢、而不與立也。

季、一 ……丘也聞、有國有家者、不患寡而患不均、不患貧、而患不安、蓋均無貧、和無寡、安無傾、夫如是、故遠人不服、則脩文德以來之、既來之則安之、今由與求也、相夫子、遠人不服、而不能來也、

邦分崩離析而不能守也、而謀動干戈於邦內、吾恐、季孫之憂、不在顛隕、而在蕭牆之內也。

季、二 孔子曰、天下有道、則禮樂征伐自天子出、

天下無道、則禮樂征伐自諸侯出、自諸侯出、蓋十世希不失矣、自大夫出、五世希不失矣、陪臣執國命、三世希不失矣、天下有道、則政不在大夫、天下無道、則庶人不議。

同、三 孔子曰、祿之去公室、五世矣、政逮於大夫、四世矣、故夫三桓之子孫微矣。

張、二〇 子夏曰、君子信而後勞其民、未信則以爲厲己也。

堯、一 (湯)曰……朕躬有罪、無以萬方、萬方有罪、罪在朕躬、周……百姓有過、在予一人、謹權量、審法度、修廢官、四方之政行焉、

興滅國、繼絕世、舉逸民、天下之民歸心焉、所重民食喪祭、寬則得衆、信則民任焉、敏則有功、公則說。

堯、二 子張問於孔子曰、何如斯可以從政矣、子曰、尊五美、屏四惡、斯可以從政矣、子張曰、何謂五美、子曰、君子惠而不費、勞而不怨、欲而不貪、泰而不驕、威而不猛、子張曰、何謂惠而不費、子曰、因民之所利而利之、斯不亦惠而不費乎、擇可勞而勞之、又誰怨、欲仁而得仁、又焉貪、君子無衆寡、無小大、無敢慢、斯不亦泰而不驕乎、君子正其衣冠、尊其瞻視、儼然人望而畏之、斯不亦威而不猛乎、子張曰、何謂四惡、子曰、不教而殺、謂之虐、不戒視成、謂之暴、慢令致期、謂之賊、猶之與人也、出納之吝、謂之有司。

## 右解説批評

孔子は國家に自ら興亡の道ありて、其は前知すべしと爲したる如し。「其れ或は周に繼ぐ者は百世と雖も知る可きなり」の確信は甚だ過大の感なきに非ず。随つて「爲、二三」の解釋は、諸家の異見簇出するを免れざるが、結局のところ、如何に孔子と雖も、百世の後を明瞭に洞見するとは何人も言ひ難く、唯だ大體に於て世代相續の間には或る連繫交渉ありと言ひたるに過ぎずと考へらる。兎にも角にも、周を其の理想的國家とし、之れに次ぐは魯(雅、二二)、更に之れに次ぐは齊にして、衛は亦た魯と同列と見做されたる如し(路、七)。而して此れ等の段階は各國の政治によりて上下するものとされたるは、固よりなり。如何にして國家は興亡するか。政權上に無くして下に移ることが衰亡の始なり(季、二、三)。唯だ君不徳なるも、臣下に賢人あれば、比較的長く邦家を支へ得るに過ぎず(憲、二〇)とす。

孔子は政治に關しては現秩序維持者なり。革命に對しては、少くとも好意を有せず。堯舜禹を讚美せる割合に、湯王武王を謳歌せざりしは之れが爲ならん。湯の語は「堯曰」に現はれたれど、其名は見えず、武王の名は一回現はれたれど其の樂たる「武」は未だ善を盡さすとせらる。之れには

種々の異解ありと雖も、孔安國の解(尙、二五)輕んずべきに非ず。彼は曰ふ、武とは武王之樂也、征伐を以て天下を取る、故に未だ善を盡さずと。實に論語中には、曾て革命是認の言なきのみならず、更に如何に不徳なる君主に對しても之を君主として尊敬せざるなきを見る。事君以禮、人以爲諂也(尙、一八)。拜下禮也、今拜乎上、泰也、雖違衆吾從下(罕、三)。所謂大臣者、以道事君、不可則止(先、二二)と云ひ、恐らく孔子の意を傳へたる子游の言に、事君數、斯辱矣(里、二六)とも云へど、孔子が苟も秩序を破るを可としたる言説は曾てあることなし。唯だ「春秋」に於て孔子が弑虐の罪を寛恕せしは大に異とすべきなれども、論語に就てだけ云へば、孔子は熱心なる現秩序維持者といふべきなり。(「春秋」の孔子の作なるや否や疑ふべし、別に論あり。)

されば飽くまで周道を正しとし、周の天下を挽回せんとしたる保守主義者即ち孔子たりしなり。随つて何れの君主によりても、敬愛せられざることなし。蓋し温良恭儉讓の徳ありければなり(學、一〇)。随つて天下の三分の二を領しながら、尙ほ殷に服事したる文王は、最も孔子の讚美して至徳としたる所なり(泰、二〇)。是れ恭と讓との極なる者なり。普通人の爲すが如く、人臣の分掌ありながら、位を超えて政治を議するが如き驕慢はつとめて之れを戒めたり(泰、一四)(憲、二七)。況んや暴力を以て天下を取らんとすることをや。天下の授受は已むを得ざる場合に於ても、禹稷が躬ら耕し



ながら天下を有するに至りしを嘆美せり(憲、六)。「政治は力なり」と言はる。何れは意見の衝突を力を以て解決することが政治なるが、孔子はかく力を用うることを嫌へり。是に於て、無智の民衆を率ゐるに當りては、固よりのこと、偶ま亂暴惡逆のものありとするも、刑法に頼ることなく、一に徳治主義を以て之れを感化すべしとなす。即ち爲政者は、先づ自ら、其の徳を脩めて模範を示し、實踐躬行を以て下を率うべしと爲す。而して其の効果は法治主義に勝ること萬々なりと爲せり。爲政以徳、譬如北辰居其所、而衆星共之(爲、一)、道之以政、齊之以刑、民免而無恥、道之以徳、齊之以禮、有恥且格は是れ其の大原則なり。その他「里、一三」「顔、一三、一七、一八、一九」「路、一」「季、一」「衛、四」「堯、二」皆な是れなり。されば垂範の重要を説きしことも亦た一再に止まらず(顔、一、一八、一九)(路、四、六、一三)。

徳治主義の實行方法に至りては、所により人により必らずしも一定せず。例によつて特殊の君、特殊の爲政家に對しては、特殊の忠言を與へたり(爲、一九、二〇)、(顔、七、一一、一四、一七、一八、一九)(路、一、二、三、九、一五、一六)(衛、一〇)(季、二〇)。「爲、一九」「路、二」は賢良登用の必要を説けるもの、而して賢良に任じたる以上は、君は無爲にして治むるを得。是れ君たるものの理想にして舜即ち是れなりとす(衛、四)。「爲、二〇」は稍や細目に涉りて、莊敬孝慈の躬行と、賢良の登用と人民

の教養とを説く。「顔、七」は子貢に對して、政治は人民の食と兵と民の信とに勤むべしとし、其の中に於ては信を第一要事としたり。「顔、一一」は君臣父子の秩序本分を守るべきを説けり。「路、三」は子路の衛國の政を論じて、其の名を正すべきを言ふ旨に明らかなるが、名正しからざれば言順ならず、言順ならざれば事成らず等の言は、如何にも細密に亘り、且つ語氣急迫、他所にある孔子の言と相似るべくもあらず。是に於て中井履軒は「事不成則禮樂不興」より「民無所措手足」までを後人の攙入となし、崔東壁も亦た純正なる孔子の言なるを疑へり。更に「路、九」は冉有と衛の政を論じて民の庶多なる上は、次に之れを富ますべきを以てし、其の次は更に教養を加ふべしと爲す。是れ衣食足りて禮節を知るの趣旨なり。是れ「顔、七」に於て、信は食と兵とよりも重しとせると比較して次第を立つること難し、畢竟是れ特殊事情によるといふの外なし。「路、一五」は、君たる者の至大の敬を以て政治に臨むべきを言へるもの、「路、一六」は政は側近より始めて僻遠に及ぶべきを言ひ、「衛、一〇」は顔淵の問に答ふるものとして注意する所、而して政治上の切要なる注意到相違なきも、一般的に見る時、諸註解者種々に説くと雖も、頗る漠然たるの感あり。「季、一」は冉有子路に對して衛の政を論じたるものにして、外征よりも内治を重んずべしとせる點、頗る適切なりと雖も、是れ又た文勢語調、例の孔子の莊重渾厚なるに似ず、履軒は「均無寡、安無貧」を

攘入としたり。されど其の不相應は單に之れのみ止らざるなり。「堯、二」は子張に對して政治を説ける所なるが、其の文辭も孔子の語調に似ず、且つ其の趣旨も管仲の順民の思想に似たるを覺ゆ。是れ又た攘入の疑十分なりといふべし。要するに、此れ等の諸言を通じて或結論を得べきや否や。蓋し孔子の秩序主義は當然平和主義なり。されど現代の秩序は不合理を含蓄せざるることなし。而して其の不合理が極端なる場合、秩序を根柢より顛覆する革命の事業は果して肯定さるべきものか否か。是れ孟荀は斷然然りと答へたる所なるが、孔子は總じて一般的に暴力の行使を嫌ひたるらしく、特に此の大それたる事是否定したるかとも思はる。即ち軍隊の事は之を學ばず(衛、一)と云ひ、子の慎しむ所は齊、戰、疾(述、一二)と云ひ、又た怪、力、亂、神を語らず(述、二〇)といふ。されど必らずしも絶對的に暴力行使の否定を爲せしにもあらず。原壤を策ちしことは一場の戲なりとも見らるべきも(憲、四六)、善人民に教ふる七年、亦た以て戎に就かしむべし(路、二九)と云ひ、教へざる民を以て戰ふは、之れを棄つるなり(路、三〇)と云ひしによりても明らかなり。孔子は決して墨子の如き非戰論者にては非ざりしなり。孔子は力と戰に於ても亦た「意、必、固、我」なかりしなり。さればいよゝゝの場合、革命も是認したるべきか。是れ實に難問題たるを失はず。暫らく論語中之を解く場合を考察するに、蓋し三件ありといふべし。(1)伯夷叔齊の評、(2)佛肸への應召、(3)公山

弗擾への應召即ち是れなり。されど此れ等に關しては何れも種々の疑問の點を有せざるはなし。

伯夷叔齊は孤竹君の二子にして、家督相續に關して各讓徳あり、且つ武王が紂を討するに當りて強諫せりと、史記などに言はるる所なるが、其の讓徳は可しとするも、強諫の一事は年壽の考證上、又た事態の性質上、有るべからざる事にして、戰國雜家の説に出づとしたるは伊藤東涯なり。孟子によれば、彼等は夙に西伯に歸せるものなれば、今更ら武王の事に反對したりとも思はれず。東涯の見亦た理ありと云ふべし。現に徂徠の如きは、仁を求めて仁を得たりといふの仁とは、仁人たる文王を言ふとも解したり。此は頗る如何はしと雖も、兎に角伯夷叔齊は聖之清なる者に相違なければ、「述、一四」の章意は暴力行使、特に革命の是認ならざるは明らかなるに似たり。

佛肸は晋の太夫趙氏の邑宰にして、趙氏に背けるもの、武力を以て其の主と戰はんとする畔臣たるに相違なし。もし孔子が其の不善を責めず、寧ろ其の召に應じたりとせば、是れ悪人を助くる者に非ざるか。此所に難問無からざるを得ず。孔安國は如何なる醜惡も、聖人を汚す能はずとしたるが、朱子は自説を述べず、張敬夫の見を紹介して、「天下變すべからざるの人なく、爲すべからざるの事なし」といふを以て、孔子の往かんとする動機なりとす。仁齋も亦た聖人の天下を救はんとする熱意あるや、苟も善意ありて我れを迎ふる以上、之れを拒くるは天下を棄絶することとなる。故

に佛肸の召にも應ぜんとせりとし、徂徠も匏瓜に就ては之れを星の名としたれども、大體の趣旨は仁齋を賛したり。

然るに江熙は、實は往かんとするに非れども、暫らく門人の心を試むる戲言なりとす（一堂の「知言」引用）。

公山弗擾の件も、亦た略ぼ佛肸の場合と相同じ。随つて文句の解釋上、意義の解釋上、更に又た年月の考證上、紛々の異見續出せり。公山氏の畔けるは事實とするも、何時にして又た誰れに畔けるか。「召す」とは誰れが召したるか、公山氏か或は季氏か。又「東周」とは何を意味するか等。此の章の事實に關し、史記左傳等に年代上に不一致あるを免れずと雖も、暫らく然る穿鑿に入らずして、孔子の意中を知らんとするに當り、古義にては周道を東方に行はん爲めに、公山氏の召にも應ずとし、朱子も殆んど之れを取れるが如し。蘇軾は孔子は畔人を助けざるも、公山氏は惡人に非ず東周を爲すに適せりとして、召に應ずとし、仁齋も殆ど之れと大同小異なり。然るに翟灝は公山氏の畔によつて季氏が孔子を召したるに應じたりとし、楊慎は公山氏は季氏の陪臣なるが、もとく公室に忠ならんとしして畔けるものにして、其の根本方針は寧ろ孔子の三家を抑へんとすると同じとし、安井息軒も亦た「夫の我れを召す者豈に徒ならん哉」を以て、同一趣意なりと斷じたり。而し

て徂徠は、「周道を東方に興すとは、王室を尊み以て天下に號令すること、即ち管仲之事なり」とし、極めて功利主義的見地より、孔子の應召の動機を説明せり。

要するに文句は如何にあるとも、季子の召に應ずとは尤も不合理なることを俟たず。又た公山氏が善人なりせば問題なし。唯だ畔を以て最大惡としながら、尙ほ聖人なるが故に如何なる汚泥中へも入るを辭せざるか否か。公家の爲に陪臣の畔を利用して、季氏を亡ぼさんとする大策略家として孔子を見るは、臆て徂徠の見となる所以にして、是れ又た如何はし。崔述は種々の年代の考證を詳述したる後、遂に公山弗擾、佛肸二件は孔子に關する實事に非ずして、後世の攙入とせり。史的考證の精細に立ち入るは吾人當面の問題に非ずと雖も、論語中に門流の意見が混じありと見るは、此れ等の章のみにあらざるは事實ならんと思はるるなり。思ふに、孔子は勇なきに非るも、温良恭儉讓の人として、最も暴力行使の如き手荒き行動を避けんとし、特に當時の主權者に對して大それたる舉動を慎しみしは容易に想見せらるる所なり。且つ孔子は常識主義者、實際主義者にして、冷徹なる理論家に非れば、其の必要に直面せざるに、豫め革命理論を講ずる如きは、其の本質に合はざることと云ふべし。況んや之れを弟子に語るに於てをや。唯だ魯國に於ける三桓を惡みしは疑ふべからざる事實なるも、此は三桓が周道に叛きたる、即ち反秩序的たりしが爲めなるは、事理明白な

り。されど之れを矯正するに就ての方策胸中に存せしや否や。從來の諸家は、聖人とし言へば、一も二もなく這般政略問題も、孔子に成算ありと解したるは、彼等が聖人偶像化より來る謬見と云はざるべけんや。孔子は決して實際政治家に非ず。史記に記す魯の「相」となりて齊侯と夾谷に會して、斷乎たる正義の武力的解決を爲したる鮮なる手際の如き、亦た崔述の否定する所となる。寧ろ是れ正見ならざるか。

孔子は秩序主義者なるが故に貴族主義者なり。何となれば、周の國家の成立が、羊の如き民衆の上に百官を率ゐたる獨裁主權者が君臨したるものなりければなり。故に民衆には何等政治に關與せしめず(泰、九)、又た官位にある者と雖も、漫りに政治を論ぜしめず(泰、一四)。されば「顔、一九」に小人の徳は、草にして偏に消極的、君子即ち君主の官人たる者のみ、積極的に小人を率ゐる風の徳あるものとしたり。されど推し詰めて言へば、善政の責任は一に君主にあり。百姓にもあらず、又た民衆にもあらず(堯、一)。臣民の惡しきは即ち君主の惡しきにして、君主正しければ臣民は自ら正し、政とは正なり(顔、一七、一八)(路、六、一三)といふを以て大原則となす。而して孔子は文字通りに此の理想を行ふべしとし、もし是れ行はれざれば、之れを如何にせむとの極めて不愉快なるも、亦た必要なる研究を怠りしに似たり。

されど君主の徳化に就ては、其の困難の容易ならざるものあるは亦た孔子の認むる所なり。孔子は實際政治を爲さんと四方に遊びしが、其の志遂に酬いられず、唯だ家政を爲し得たるに止まる(爲、二)。家政も亦た善く之れを爲すは易々の業に非るは固よりなりと雖も、之れを國政に比すれば、其の難易言ふに足らざるなり。然るに孔子は動もすれば國政の易きを言ひたること、「顔、一三、一七、一八」「路、六、一三」の如し。且つもし我を用ゐんには、期月のみにして可なり(路、一〇)など言ふと雖も、亦た必らずしも然らずして、其の反對を言明せる言辭も亦た之れあり。即ち善人局に當るも、百年の後始めて見るべきの治績あり(路、一三)とも言ひ、又た王者あるも一世、即ち三十年の後にして始めて仁政の功現はる(路、一三)とも言へり。蓋し一人の徳者が上にあれば、徳化は以て天下の秩序平和を來すに足るべきや。曰く然りとするが孔子なり。されど其の決して然らざるが眼前の事實なり。是に於て孔子と雖も、徳化主義の實現に相當の困難あることを認めざるを得ずして、如上の言あるに至りしならんも、此の一見矛盾の言明の間に、一種の調和を發見せんとしたるが爲め、註解者の意見種々に別れて、遂に明解に至らざること今更ら詳述するの必要なきなり。徳化主義に對する孔子の信念の堅きこと、論語前篇の明示する所なるに、其の實現の難易論は、後篇にのみあるを見れば、此所にも又た純雜の分れあるを知るべきか。畢竟孔子の道が、政と教との